
相棒 元刑事と魔法少女

losepact

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相棒 元刑事と魔法少女

【Nコード】

N2105S

【作者名】

l o s e p a c t

【あらすじ】

元特命係員・亀山薫が警視庁を退職し、サルウィンに渡ってから半年後…

彼は、魔法と少女達の想いを巡る新たな事件に巻き込まれることになる。

何かおかしな点があったら言ってください。

ちなみに作者は文才が低いです。

新たな出会い

「カオル！バイバイ！」

「ああ、バイバイ！」

亀山薫とフリージャーナリストの妻、美和子がサルウィンへやってきて半年が経過した。

たった今、現地の子供達と別れ、自宅に帰ってきたところだ。

「はあ…」

ソファアに座り、ため息をつく薫。

ちなみに美和子は別の国へ取材に行っているため、サルウィンにはいない。

（もう半年になんのかあ…）

薫はかつての上司の右京やライバルの伊丹憲一等、元同僚達の事を思い出していた。

右京や伊丹達は相変わらずだろうか、俺の後任は就いただろうか、それはどのような人物なのか…

「…考えても仕方ねえや、寝よ…」

もう自分は警察官ではない、これからは現地の子供達のために頑張るぞ。」

そうしているうちにウトウトし、薫は眠りへと落ちていった。

*

「……………ん？」

深夜、窓の外で光る何かの気配を感じ、目が覚めた薫。

窓から覗くと、草の茂みから青色の光が見えた。

「な…なんだ…？」

気になった薫は外へと足を運んだ。

そして茂みに腕を突っ込もうとした、その時だった。

「待って！」

驚いた薫は、声のした方を向く。

そこには、金髪の少女が斧のような物を片手に立っており、薫を見つめていた。

「君は…」

「それに触らないで！」

「ッ!？」

大声を出した少女に驚く薫。

その少女は斧を薫に向けるが、やがて光の方へ斧を向けた。

「ジュエルシード…封印!!」

すると茂みから光り輝く宝石のようなものが姿を現し、少女の持っている斧へと吸い込まれていった。

「……………」

その一部始終を目の当たりにした薫は啞然としていた。

それもその筈、非現実的な光景だったからだ。

やがて少女は薫に背を向け、歩き出す。

「…あ、おい!今のは…」

薫が少女を呼び止めるが…

「…知らない方がいいと思う」

そう眩き、少女はその場から飛び去ってしまった。

「何だったんだよ今の…」

首を傾げ、目を見開く薫。

だが、後にP・T事件と呼ばれる出来事はまだ始まったばかりだった…

新たな出会い（後書き）

一応思いついた話を投稿してみました。

今後ともよろしくお願いします。

執務官登場！その名はクロノ（前書き）

投稿して早々、応援メッセージをいただきました。

本当にありがとうございます！

執務官登場！その名はクロノ

薫は少女が立ち去った方をポカンと眺めていた。

（今は夢じゃないか…？）

自分の頬をつねる薫。

「…痛ッ！」

その途端、痛みが走ったので夢ではないということのを改めて理解した。

「ほんと何なんだ今のは…幽霊か何かか!？」

薫は過去に、親友の浅倉禄郎や裸の女性の幽霊を目撃したことがある。

だがその時とは違い、少女は自分に話し掛けてきた。

（何がどうなってんだよ…）

「もしかして、見たのか？」

その時、薫の後ろから声がした。

振り返ると、そこには黒いコートを着用し、長い杖を持った黒髪の

少年が立っていた。

しかも少年が立っている地面には、水色の魔法陣が描かれている。

「うおッ！また幽霊か！？」

「な…だ、誰が幽霊だ！失礼な…！」

その少年は幽霊扱いされたことに癪癪を起こす。

「それより話を戻すが、貴男は見たのか？ジュエルシードを。そしてそれを回収した人間を！」

「は…はあ！？じゅえるしーどお！？知らねえよそんなもん！あんなこそ誰なんだ！？」

すると少年は、手のひらから魔法陣を出現させる。

そこには証明書のようなものが映し出されていた。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

「時空…管理局？あ、俺は亀山薫だ」

当たり前だが薫は、そのような名称の組織は聞いたことがなかった。知っているのは、過去に小野田が結成した非公式の部署や、テログループの赤いカナリア等だ。

「いやあ…んな名前聞いたことねえよ」

「それは当然だ。この地球は管理外世界…いわゆる別世界なんだからな」

時空管理局…管理外世界…薫にはチンプンカンプンだった。

(右京さんならこの話信じたんだろうか…?)

だが肝心の右京がない為、答えは出ない。

「…ですが…はい…直ちに」

クロノは目の前の小さな魔法陣に話し掛けている。

誰かと交信しているようだ。

やがて交信が終わったのか、魔法陣は消えた。

「あの…時空って付くぐらいだから、もしかしてこことは違う世界にその組織ってあるの?」

薫は疑問に思ったことを質問してみた。

「ああ。そうだな」

対するクロノは涼しい顔で答える。

「…嘘だあゝ!そんなSF映画みたいなことあるわけないだろ!」

「いや、事実だ。それを証明するためにも、貴男には僕と一緒にア

「スラに来てもらおう」

そう言ったクロノは薫に手を差し出した。

「よ…よくわかんねえけど、あんたの手を掴めばいいのか？」

「ああ。僕ので力で転移する」

半信半疑ではあるが、薫はクロノの手を掴んだ。

その途端、光が二人を包み込んだ。

「うわわッ！なんだ!？」

「動かないように!」

そうして、サルウィンから薫の姿が消えた。

執務官登場！その名はクロノ（後書き）

次回から、本家キャラをぼちぼち出していく予定です。

ご意見、ご感想お待ちしております！

薫の決意（前書き）

ご意見、ご感想お待ちしております！

薫の決意

「…………おっ！」

薫が目を開けると、そこはすでに屋内だった。

「ここがその…アースラとかいう場所か？」

「ああ。ついてきてくれ」

そう言われ、薫はクロノの後ろを歩く。

廊下ですれ違う局員達が薫の方をチラッと見る。

それもその筈、薫の服装はフライトジャケットにカーゴパンツ。

制服がある組織で私服の人間がいれば目立つのは当然だ。

「どっぞ」

ドアの前でクロノが薫を振り返る。

どうやら薫に会わせたい人物がこの部屋にいるようだ。

「あ…ああ、お邪魔します」

クロノにそう言い、薫は部屋に足を踏み入れた。

「失礼しま……」

部屋に入った薫は思わず言葉を失った。

その部屋には何故か桜の木があり、水の流れる音が響いていた。

「うおお……すげえ……」

そして座敷には、緑色の長い髪を束ねた綺麗な女性が座っていた。

その女性は、薫の方を向くとニコツと微笑んだ。

(なんかこの人、雰囲気がたまきさんに似てるな……)

そんなことを考えていると、女性が口を開いた。

「亀山薫さんですね？私はこのアースラの艦長、リンディ・ハラオウンです。クロノから話は伺ってます」

薫は、先程クロノが魔法陣に話し掛けていたのを思い出した。

「はあ……ってハラオウン……さん？確かクロノ君も……」

「ええ。私、クロノの母です」

このリンディの発言を耳にし、薫は驚いた。

「……え、お子さん！？てつきりご姉弟かと思いましたよ！」

「あら、ありがとございます。早速ですけど、貴方はジュエルシード及びそれを回収した人物を見たか、私は報告を受けています。その具体的な特徴を教えてくださいさるかしら？」

「いや、見たっていつても…一瞬だけツスよ？それに俺があなた方の役に立てると思えませんかね」

苦笑する薫。

「まあ特徴は…女の子でしたよ、小学生くらいの。金髪を両側で縛って…黒いマントみたいな着てて…あ、そうそう！なんか斧みたいなもので、その…ジュエルシードですか？それを吸収してましたね。俺が見たのはそれだけツスよ」

「そうですね…やはり管理局でもない魔導師が…そんな人がロストロギアを集めるなんて…」

薫の情報提供を聞き、考え込むリンディ。

「あの、リンディさん。ロストロギアって？」

薫が手を低く挙げ、尋ねる。

「“遺失世界の遺産”と呼ばれる物ですけど…わからないですよね？」

「はい。まったく」

即答する薫。

「つまり、次元空間の中にはいくつもの世界があります。その中には、良くない形で進化し過ぎてしまった世界の技術や科学が、自分達の世界を滅ぼしてしまうんです。その後に取り残された、危険な遺産：それらを総称してロストロギアと呼びます。私達管理局が正しく管理していなければならぬ品物：ジュエルシードもその一つです」

「……」

薫は難しい顔をしている。

無理もない。このような突拍子もない話をすぐに受け入れられるはずがない。

「えっと…もしそのジュエルシードを放っておいたら…?」

「万が一、それに魔力が流れ込んだりしたら次元震が起きる。そうなってしまうたら最悪、地球が滅んでしまうかもしれない」

先程から黙っていたクロノが言う。

途端に薫の顔は青ざめた。

「そ、そりゃ大変じゃないっすか!!」

警察にいた頃、東京ビッグシティマラソン大会を狙った大規模な事件が起きたが、それとは比べ物にならない話である。

(万が一、地球が滅んだら…俺も美和子も、右京さん達も、サルウインの子ども達も死んじゃう!!)

そのようなことがあってはならない。

そして…

「あの…！俺にも手伝わせてくださいー！！」

薫は立ち上がり、リンディに頭を下げていた。

「えっ！？」

「俺にできることなら何でもします！手伝わせてくださいー！！俺も…自分のやれるだけことがしたいんですー！！」

リンディはしばらく考え込み、一つの答えを出した。

「…わかりました。いいでしょう」

それに驚き、クロノが口を開いた。

「か、かあさ…艦長！それは…！」

「彼はジュエルシードを回収した人物を見えていますし、その気配も感じ取れました。その人物らしき人と遭遇した場合、すぐに特定できます」

どうやらリンディは、アースラに薫を引き入れることを決めたようだった。

「あ…ありがとうございます!!」

再び頭を下げる薫。

「早速ですけど亀山さん、貴方の魔力を検査します。今から検査室に行っていただけですか？」

「検査室…ですか？でも場所が…」

「案内させます。クロノ、亀山さんを検査室まで」

名を呼ばれたクロノが薫の前までやってきた。

「はい、艦長。僕についてきて」

「ああ、悪いね。何から何まで」

薫はクロノに連れられ、検査室へと向かった。

薫の決意（後書き）

リンディさんが亀山君を呼ぶ時、「亀山さん」か「薫さん」かで迷いました。

今回は、亀山君の新たな相棒登場の予定です！

熱意という名の相棒（前書き）

ご意見、ご感想お待ちしております！

熱意という名の相棒

翌日、

検査の結果を控えた薫は、リンディに部屋を与えられ、アースラで寝泊まりすることとなった。

《亀山薫さん、亀山薫さん。大至急、検査室に来てください》

艦内放送が鳴り響く。

「あゝ…はいはい」

薫はベッドから起き上がると、部屋から出て検査室へと向かった。

*

「失礼します」

検査室のドアが開き、薫が入ってくる。

そこには検査担当の女性局員が、椅子に座った状態で待っていた。

「亀山薫さんですね？貴方の検査結果が出ましたよ」

そう言い、女性局員は薫に資料を渡す。

*

Name：亀山薫

Home：第97管理外世界 現地惑星名称「地球」

Job：難民ボランティア団員（元警視庁特命係）

Magi：魔力量クラス《AA+》（魔導師ランク非保有）

*

「…これ、俺の結果なんスよね？いいのか悪いのかイマイチわかんねえな…」

「武装局員の平均値よりは上ですよ。勿論、クロノ執務官にはかないませんが」

女性局員が説明しながら、薫に何かを差し出した。

「はい。亀山さん、これが今日から貴方のデバイス…《アイファア―》です！」

薫に渡されたデバイス…アイファアは、元警察官である薫の希望に応える形で作成された銃タイプのデバイスである。

ちなみに魔法色は赤。

「これが…デバイス…！」

アイファアを手に取り、それをまじまじと見る薫。

すると…

《…貴方が私のマスターですか？》

「うわッ！？喋った…！」

当然ながらデバイスのことを知らない薫は驚く。

「ええ。アイファアはドイツ語で“熱意”。なんたって亀山さんのパートナーですからね！」

女性局員がニコツと笑う。

「そっかあ…俺の相棒か…！」

薫は、右京に代わる自分の相棒に話し掛けた。

「…よろしくな、アイファア…！」

《はい、マスター！》

それから数十分後、薫はシミュレーターを使った模擬戦を何度も行っていた。

「このッ！」

ズキユン！！

最後の標的を撃ち抜き、模擬戦は終わった。

「はあ…ちょっと酔ったかも…」

バリアジャケット姿のまま、薫は胸をさすりながらトレーニングルームを後にする。

「お疲れ様です、亀山さん！」

薫が声のした方を向くと、その横にいる茶髪の少女がコーヒーカーップを差し出してきた。

「あ、ありがとう。君は？」

礼を言った薫はカップを受け取った。

「私はアースラのオペレーター、エイミー・リミエッタです！」

「ええ！？オペレーターつてずっと椅子に座ってモニターと向き合う、あの？…しんどくない？」

「慣れましたから。ところでデバイスの調子はどうですか？」

エイミイの目線は、今は薫の首にぶら下げられているアイフアーに向けられている。

「ああ、ちゃんとわかりやすく説明してくれるから魔力の使い方のコツは掴めた。でも何故地球上にジュエルシードがあるのか、なんだってそれを集める女の子がいるのか…：…わからないことはまだまだ沢山あるな、へへっ！」

苦笑する薫。

「でも今艦長やクロノ君が調べてますから大丈夫ですよ。あ、私クロノ君に呼ばれてるんで失礼しますね！」

「そっか。なら俺はちよつと休憩してから訓練するよ。コーヒーありがとな！」

そう言った薫は、トレーニングルーム前のベンチに座った。

(エイミイって気さくな子だな。角田課長みたいだ)

《マスター、次は飛行の訓練を…》

アイフアーが光る。

「よっし！やるぞお！…！」

自分に気合を入れた薫は、再びトレーニングルームへと入っていった。

熱意という名の相棒（後書き）

亀山君の魔力はユーノやアルフより上、なのはやフェイトより下に
しました。

次回は亀山君の初任務です。

亀山薫、海鳴へ…（前書き）

海鳴市がどこにあるのかわからなかったのので、一応東京という設定にしました。

亀山薫、海鳴へ…

某日、海鳴市にて…

「お前はこんなところに居ちゃいけないんだ！」

一人の少年が黒い影と交戦している。

だがその黒い影は俊敏な動きで少年を翻弄する。

「くッ…！」

少年も必死で抵抗するが、黒い影の動きについていけない。

そして…

「しまった…！」

黒い影の攻撃が少年にクリーンヒットする。

「うあああああ…！」

その少年はボロ雑巾のように吹き飛ばされた…

*

薫がアースラにやってきて三日が過ぎた。

相変わらずジュエルシードの位置も、それを集める謎の少女の手掛かりも掴めずにいた。

「リンディさん…どうすんスカ!?このままじゃ地球潰れちゃいますよ!」

焦っている様子の薫がリンディに問う。

だがリンディはいたって冷静だ。

「いつ魔力が流れ込んで次元震が起きるかわからない状態のジュエルシードを、アテもなく探すんですか?」

「…そりゃそうツスけど!」

薫はいてもたってもいられないようだ。

「エイミィ、ジュエルシードの位置はまだ一つも特定できてないの?」

「艦長!実は…たった今、地球上に微小な魔力を感知!」

「!?!」

この報告に真っ先に飛びついたのは他でもない、薫だった。

「魔力ってジュエルシードか!？」

「いえ、違うみたいです。でも何かあるのは間違いないです!位置は…日本の海鳴市という街です!」

するとリンディは薫の方を向いた。

「亀山さん。確か貴方は日本出身でしたよね?海鳴市という街をご存知ですか?」

「え…あ、はい。何度か行ったことがありますけど…」

薫の返答を聞いたリンディは若干微笑みながら言った。

「では、これより亀山さんに任務を伝えます!今から海鳴市に出向き、魔力の正体を確認してください。決して一般の人には、自分が魔導師だということを言わないでください」

「はい!」

力強く返事する薫。

《マスター、海鳴市へ転移します!》

アイファーが光り輝き、アースラの艦橋から薫の姿が消えた。

*

「ここは…海鳴か」

薫が目を開けると、そこは海鳴市内の公園だった。

時刻は夕方である。

だが何やら様子がおかしい。

公園の池の栈橋やボートが無残に破壊されており、警察の姿もある。

(なんだ？何かあったのか？)

気にはなったが、今は魔力の正体を突き止めることが先である。

だが…

《マスター。たった今、魔力反応が消えました》

(はぁ？消えたって…完全に消滅したのか？それとも移動したのか？)

《おそらく移動したと思います。ですが…微弱すぎて感知できませんでした》

アイファアの報告を聞き、薫はため息をついた。

「はぁ…また振り出しかよ」

そう呟き、公園を出ようとした時だった。

「くおらあ！ “元” 特命係の亀山！！」

懐かしい声を聴き、思わず振り向いた薫の目の前には…

「…伊丹！？」

そう、トリオ・ザ・捜一の伊丹、三浦、芹沢がいたのだ。

「亀山、お前サルウィンに行ったんじゃないのだったのか？」

年長者の三浦が口を開く。

「いやあ…色々あつてちょっと帰ってきたんだよ。ところでなんでここに捜査一課がいるんだ？」

「今は刑事じゃねえお前に言う義理は…」

「亀山先輩、実はあの棧橋が誰かに壊されたみたいなんですよ」

薫や伊丹の後輩である芹沢が割り込む。

「べらべら喋るんじゃないねえバカ！」

パシンッ！

「痛ッ！」

伊丹に頭を叩かれた芹沢が頭部をさする。

「そっか。でもあの壊れ方…」

まるで巨大な物がぶつかったような壊れ方である。

「ま、この辺りに危ねえ奴がいるって情報もあったし、一応ここにも来てたんだ」

結局説明した伊丹。これも彼の良い所なのだろうか…？

「あ、そっか。ところで右京さんは？」

「警部殿なら今ロンドンだ。あ、そうそう。お前の後任来たぞ」

三浦が薫にそう告げる。

「え？どんな奴だよ！？」

気になっていた薫はすぐに食いついた。

「神戸尊…元警察庁警備局のエリートだ。どういつわけか左遷されて特命係に来た奴だ」

「そうか…あ！そっぴや俺用事あるんだった！そろそろ行くわ！」

そう言った薫は三人に背を向けた。

(特命係のことは気になるけど…今はそれどころじゃねえ！)

「右京さんと、その神戸って人によろしく言っといてくれ！じゃあな！」

そして薫は、その公園から走り去っていった。

亀山薫、海鳴へ…（後書き）

実は4/11から大学が始まるので、更新ペースが遅れるかもです。
少なくとも一ヶ月に1、2回は更新したいと思っています。

ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします！

新たな魔導師登場！？（前書き）

ご意見、ご感想お待ちしております！

新たな魔導師登場！？

その日の夜、薫は宿泊先のカプセルホテルにいた。

「はあ…」

思わずため息がもれる。

あれから数時間、街を歩き回って魔力を探したが、何の反応もなかった。

《マスター、まだ諦めてはいけません。反応があった以上、この街にいるのは間違いありません》

「だといけどよ…」

若干投げやり気味な薫。

そして本日は何も進展がなかったので、早めに休もうとした時だった。

キーーーーンッ！

突如の耳鳴りが薫を襲った。

「うっ…！？」

慌てて耳を塞ぐ薫だが…

《聴こえますか…？僕の声が聴こえますか！？》

「こ、これ…」

確かに薫の耳に、少年の声が届いた。

《聴いてください。僕の声が聴こえる方…お願いします。力を貸してください！》

「なんだよ、これ…」

薫は突然聴こえてきた少年の声に驚きを隠せない。

「……まさか探してた魔力の正体か！？」

《行きましようマスター！》

胸にぶら下がっているアイファアが光る。

「おう！」

薫はカプセルホテルを飛び出した。

「はあ…はあ…」

ホテルを飛び出して10分、薫は住宅街を走っていた。

やがて再びさっきの耳鳴りが襲ってきた。

「くツ…またかよ…！」

すると街が何かに覆われ始め、通行人達の姿が消えた。

「結界か…なら好都合だ！」

そう言つと薫はアイファアを手に取り…

「アイファア！頼む…！」

《了解です！マスター！》

そう言つたアイファアが光り輝き、薫もその光に包まれた。

*

バリアジャケット姿に変身した薫は、魔力反応がある方へと飛んでいった。

やがて…

「あいつか…！」

薫は道路でうごめいている黒い影と、それと対峙する一人の少女を

見つけた。

その少女は白いバリアジャケットを装着し、杖のようなものを持っている。

「あの子もしかして魔導師か!？」

その少女は、手に持っている杖と何やら話しながら黒い影と戦っている。

「まだ初心者か……ッ!？」

何かに気づいたのか、薫の表情が一変する。

なんと黒い影は三体に分裂し、市街地の方へと移動を開始したのだ。

「まずい!！」

すぐさま薫は地面を蹴り、追跡する。

だが三体の動きは早く、とても追いつけない。

「くッ、間に合わねえ……!！」

薫が諦めかけた、その時だった。

ゴオオオオオオ……!

背後から轟音が迫ってきたのを感じ取り、薫は素早く右に避けた。

その轟音の正体は桜色の魔力の砲撃だった。

「グオオオオ…！」

「ギャウウ…！」

三体の黒い影は砲撃に飲み込まれ、消滅した。

「すげえ魔力だな、あの子…！」

啞然とする薫。

すると張られていた結界が消え、通行人達の姿が再び確認できた。

「やべっ…！」

誰かに見られることを恐れた薫は、慌てて近くの空き地に身を隠した。

「そつだ、リンディさんに報告しねえと…！」

薫は目の前に魔法陣を展開し、アースラと通信を繋いだ。

「リンディさん、俺です。亀山です」

《ご苦労様です。何かわかりましたか？》

「白い服の魔導師がいました。名前は不明です。あ、小学生くらいの…」

リンディに、自分が見たすべてを報告する薫。

《ところでその彼女は？》

「すみません、見失いました…」

《そうですね…わかりました。とりあえずアースラに帰還してください》

「了解ッス！」

通信が終わり、薫の前の魔法陣が消える。

「アイファー、アースラまで頼む！」

《はい！》

そして、夜の手鳴市から薫の姿が消えた。

*

「白い服の魔導師だって？」

「うん、亀山さんはそう言ってたよ」

リンディの横で薫の報告を聞いていたエイミィがクロノにそう言う。

「どういうことだ…彼といいその少女といい、あの管理外世界の地球には魔導師の素質がある人間が埋もれているのか…？」

クロノの疑問は深まるばかりだった。

新たな魔導師登場！？（後書き）

次回辺りから、オリキャラを出したいと思います！

エリート魔導師、ロック（前書き）

久しぶりの更新です。短くてすみません。

エリート魔導師、ロック

薫はアースラに戻ってからというもの、すっかりトレーニングルームに籠もりがちになっていた。

黒い影と交戦した時に遭遇した、あの少女の魔力に対抗するためある。

（万が一、敵だったら厄介だからな…）

その時、薫の目の前に標的が現れた。

「うらあぁッ！」

ズキーン！！

最後の標的はアイファアに撃ち抜かれた。

*

「本局からの派遣魔導師ツスカ！？」

トレーニングルームを後にした薫は、その報告をリンディイから受け

た。

「ええ。ジュエルシールドを一刻も早く見つけ出すために、本局のエリートへの派遣を要請しました。今後は、亀山さんと行動を共にしていただきます」

「えッ!? 俺ッスか!?!」

驚愕の表情を浮かべる薫。

それもそのはず、いきなり本局のエリート魔導師と組めと言われたのだから…

「いやあ、でも…俺なんかでいいんすかね?」

「はい。彼の魔法量は亀山さんより若干上ですんで、いいコンビになると思いますよ!」

リンディはそう言っが、薫には気になることがあった。

「え? エリートとかって魔法量とかで決まるもんじゃないんですか?」

どうやら魔力が高い順に階級が決まると思っているらしい。

「いいえ。試験を受ける、もしくは何か大きな功績をあげることによってエリートに抜擢されることもあります」

「そうなんすか…」

シュン！

その時、ドアが開いて一人の局員が入ってきた。

「失礼します！本局の魔導師をお連れしました！」

その局員の後ろには、30代後半くらいの男が立っていた。

「ご苦労様、下がってください」

「失礼します！」

局員はそう言うとその場から立ち去り、連れてこられた魔導師がリンディに敬礼する。

「本日こちらに配属されました、ロック・ブル二尉です。よろしくお願ひします！」

ロックと名乗った魔導師は凜とした態度だ。

「アースラ艦長、リンディ・ハラオウンです」

リンディとロックが握手を交わす。

（いかにもエリートって感じだな…）

薫は半ば呆然とロックの方に目をやっていた。

するとロックが薫に気づいたのか、顔をこちらに向けた。

「提督、彼は？」

「彼は亀山薫さん。民間協力者の方ですよ」

リンディから説明を受けたロックは、薫の前までやってきた。

「君が報告書の…初めまして、僕はロック・ブル。よろしく」

そう言ったロックは薫に手を差し出した。

「あ…ああ、俺は亀山薫。こちらこそよろしく」

少し戸惑ったが薫も手を差し出して、二人は握手を交わした。

(エリートなんていうから、大河内さんみたいな雰囲気の人かと思っただけ…気さくな奴だな)

とりあえずホッとした薫であった。

*

「そうか、薫は地球出身なのか」

意気投合した薫とロックは、食堂でコーヒーを飲みながら話し込んでいた。

「まあな。ところでロック、一ツ気になってたことがあるんだけどよ……」

「ん……何かな？」

カップに口をつけたまま、ロックは薫に目をやる。

「時空管理局って、地球以外の殆どの世界にあるんだよね？」

「まあ……そうだね」

「だろ？それぞれの世界には、他との違いや文化があるのに、それを自分達で勝手に抑えつけるって変じゃねえか？」

薫がそう言った時、ロックの動きが一瞬止まった。

「え……」

「あ、いや悪いな。少なくとも本職の人間の前でする話じゃなかったな」

バツが悪そうに頭をかく薫だが、ロックはフツと笑っていた。

「……ははは、そうかも。薫、君は随分面白いことを言うね」

「かつての上司の理屈っぽいところがうつちまったのかな？はは……」

薫は苦笑いしながらそう言った。

*

一方その頃、

「駄目じゃないフェイト…ちゃんと母さんの言う通りにしなきゃ…」
薄暗い部屋に響き渡る女性の声。

声の主は黒い服を着た女性で、彼女の正面には、かつて薫と遭遇した金髪の少女の姿があった。

「じゅめん…なさい…」

フェイトと呼ばれたその少女は、怯えた表情を浮かべて目をつぶっている。

「あなたのようないけない子はお仕置きが必要みたいね…！」

パシィッ！…！！

「キヤアアアアアアッ！…！！」

その部屋の扉の前で、聞き耳をたてているオレンジ色の髪の少女がいた。

ちなみにフェイトより背が高く、見た目は年上である。

「なんで…なんでなんだよ…ちゃんと言われた物を持ってきたのに
ッ…！」

その少女は何もできない自分自身に苛立ちを隠せなかった。

エリート魔導師、ロック（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております！

出撃！（前書き）

ご意見、ご感想お待ちしております！

出撃！

ロツクが赴任してから数日後、遂に事態は急展開を迎えた。

エイミイが海鳴市内の廃工場付近の空き地に、ジュエルシードの反応があるのを発見したのだ。

すぐさま薫とロツクはクロノに呼び出され、会議室に赴いていた。

「ええ！？あつたの！？」

クロノからその事実を伝えられた薫は驚愕の表情を浮かべる。

対するロツクは予想していたのか、いたって冷静である。

「ああ。亀山さんとロツク二尉にはこれから海鳴に行って、ジュエルシードを回収してきてもらいたい」

するとロツクが黙って挙手し、口を開いた。

「二人で、ですか？」

「恐らく、亀山さんの見た二人の魔導師が現場に現れるだろう。まずはバインドで二人の動きを封じるといい。万が一逃走したら追跡してもらいたい」

「あ、そっかあ！なるほどね！」

クロノの説明を聞いた薫はすっかり納得した。

「わかりました、ではこれより出勤の準備をします」

ロツクは敬礼し、そう言うと会議室から出ていった。

「じゃ俺も行くわ」

「ああ。気をつけてな」

クロノに手を振り、薫も会議室を後にした。

「今回初めてペアを組むね。よろしく」

会議室の外でロツクが薫を待っていた。

「ああ。こつちこそよろしくな！」

そう言った薫はニヤリと笑う。

「ところで薫、いいのかい？」

「…え？何がだよ？」

「こないだ管理局の在り方が変わって言ったじゃないか。そんな状態で任務に集中出来るかい？」

ロツクの疑問ももつともだ。

「…そうだな。でも管理局の在り方よりも、今はジュエルシードを一刻も早く見つけ出さないと！」

ロックはそう力強く答える薫に驚く。

「…そうだね……薫は強いね、そして正しい……」

「んなことねーよ！ハハハ！」

そう笑う薫だが、自分もかつての相棒である杉下右京に、同じ台詞を吐いたことがあった。

「……僕にも君のような強さがあれば……」

ロックは密かにそう呟いたが、その独り言が薫に聴こえることはなかった。

《ロック二尉、亀山さん。そろそろ指定ポイントに転移します！用意してください！》

艦内放送が二人の耳に届く。

「あつ、そろそろか」

「よし、セットアップだ」

その途端に二人は光に包まれ、バリアジャケットを装着した。

「そういえばロック、お前のデバイス喋らないんだな」

薫はロックの手にある、杖の形をしたデバイスに目をやる。

「ああ、このタイプのデバイスは自我が無いんだ。名前は《カルミ》。イタリア語で“冷静”という意味らしいんだ。提督、準備オツケーです！」

ちなみに魔法色は緑らしい。

「へえ、随分お前らしいじゃんか！あ、俺も大丈夫ツス！」

《では、これよりお二人を海鳴へ…転送！！》

艦内放送を使用していたリンデイの声が響くと同時に、二人の姿が消えた。

*

一方その頃、廃工場付近の空き地にて、クロノの予測通りに二人の少女が対峙していた。

茶髪の少女…高町なのはは相手をまっすぐ見据えており、対するフエイトは自分の右斜めにあるジュエルシールドを横目で気にしつつ、向き合っていた。

なのはの後ろではフェレットのような生き物が、フエイトの後ろではオレンジ色の髪の少女が、固唾を飲んで見守っている。

その沈黙をやぶるかの如く、フェイトは黙ってデバイスを取り出した。

《Get Set》

斧へと姿を変えたデバイスからそう聞こえた。

そしてなのはも、自身のデバイスを取り出した。

「あの…フェイト…ちゃん…？」

若干ぎこちなく相手の名を呼ぶのは。

「わたしはフェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど…」

だがフェイトはなのはを睨みつけたままバリアジャケットを装着する。

「ジュエルシードは…譲れないから！」

するとなのはも、それに応えるかのようにバリアジャケット姿に変身した。

「わたしも譲れない。理由を聞きたいから…フェイトちゃんがなんでもジュエルシードを集めてるのか、どうしてそんなに…寂しそうな目をしているのか…」

その時、フェイトの眉がピクツと動いたが、すぐになのはの方へと向き直る。

「わたしが勝つたら、お話聞かせてくれる？」

そう言ったなのは自身のデバイスをかまえ、フェイトへ向かっていった。

「…ッ！」

フェイトも負けじと、相手へ向かっていく。

そして二人がぶつかり合おうとした、その時だった。

ピシャアアアアン！！

雷のような音が鳴り響き、二人の間に赤と緑の光が落ちた。

「あっ！？」

なのはもフェイトも驚きを隠せないでいる中、光の中から二つの人影が現れた。

「そこまでだあ！！」

男の声が聞こえたと同時に、緑色のバインドがなのはとフェイトの手足を封じる。

「な、何！？」

思わずフェイトがそう呟く。

「時空管理局アースラ所属、ロック・ブルだ」

「同じく亀山！警視庁…じゃなかった、アースラで事情を聞かせてもらおうか！」

薫はまだ刑事の癖が完全に抜け切っていないようだ。

だがその時、

バシユツ！！

薫とロック目掛け、何者かが攻撃を仕掛けてきた。

「くっ！」

すぐさまバリアを張る薫。

「フェイト！撤退するよ！」

攻撃を仕掛けたのはオレンジ色の髪の少女だった。

「アルフ…！」

フェイトがそう呟いた時、アルフがなのは方へ攻撃を放った。

「おわっ、危ねえ！」

薫は慌ててなのはをバリアで包み込み、彼女を守る。

アルフの攻撃は地面に直撃して辺りに砂が飛び散り、煙幕の役割を果たした。

同時に彼女の魔力も分散し、フェイトの動きを封じていたバインドを無効化する。

「フェイト!?!」

ここでフェイトがアルフにとって予期せぬ行動を起こした。

なんと煙幕の中をくぐり抜け、ジュエルシードへと真っ直ぐ走っていた。

バシユシユツ!!

すると砂煙の中から緑色の魔力の塊が飛び出し、背を向けているフェイトを襲つ。

バアンツ!!

「あつ!つう…!!」

当然ながらフェイトは転倒し、バランスを崩してしまった。

「フェイト!!」

すぐさまフェイトに駆け寄り、彼女を抱えようとするアルフ。

やがて砂煙がはれ、なのはと目をつぶった薫と、攻撃態勢に入ったロツクの姿が確認できた。

ロツクのカルミの照準は勿論フェイトとアルフである。

(もう駄目か…!?)

思わずアルフが目をつぶった、その時だった。

「だめえ！」

「「「!?!?!」」」

声をあげたのはなのはだった。

薫にロツク、アルフは驚いた様子でなのはの方を向く。

「撃っちゃだめ!!」

さらになのはは叫ぶ。

ロツクが呆気にとられている隙を突き、アルフはフェイトを抱えて地面を蹴り、空へ飛び上がった。

「あッ！しまった…！」

舌打ちするロック。

「ロック、お前はその子を頼む！俺はあの二人を追いかける！先にアースラに戻つといてくれ！」

そう叫んだ薫も地面を蹴って飛び立っていった。

出撃！（後書き）

次回は亀山君vsフェイト・アルフになると思います。

戦闘の描写が下手かもしれませんが、お許しください。

葛藤（前書き）

すいません、戦闘シーン短いです。

葛藤

取り残されたロックは、薫に言われたようになるのはとユーノを保護し、アースラまで連行することにした。

「さ、とりあえず事情を聞かせてもらおう。僕について来て」

「は…はい」

そう返事したなのはだが、一つ気になることがあった。

「あの…フェイトちゃんは？」

するとロックはなのはに笑顔を見せた。

「大丈夫だよ。さっきの彼は、他の管理局員とは違うからね。じゃ行こうか」

そして空き地から、ロックとなのは、ユーノの姿が消えた。

*

「おい待て！」

薫はフェイトとアルフを追跡していた。

(くっ…速い！)

アルフはフェイトを抱えているからか、スピードが遅くなっている。

「なんで…なんでそうまでしてジュエルシールドなんてもん欲しいんだよ…!?!」

薫には訳がわからなかった。

一歩間違えれば、一つの世界を滅ぼすほどの力を持つ危険なジュエルシールドを欲しが理由がわからないからだ。

(あのフェイトって子…何時かの男の子と同じ目をしてたな…)

薫はかつて、担任の女性教員のために彼女につきまとうストーカーを殺した小学生のことを思い出した。

周りに相談もせず、決断を急ぐと、ろくなことにならないということとを、薫は改めて知らしめられた。

「おい！待てよお前らぁッ!!」

様々な想いをかかえた薫は加速した。

「…しっこいねえアンタ！」

逃げられないことを悟ったのか、ストップしたアルフはフェイトを抱えたまま、薫の方へ振り返る。

「おい！アルフちゃんとフェイトちゃん…だよな？なんでジュエル

シードを集めようとすんだよ!？」

するとアルフはフェイトから手を離し、何やら耳打ちし…

「うるさい!!フェイトの邪魔をするなあああッ!!」

拳を握り締め、アルフは薫に殴りかかった。

パシッ!!

だが薫は容易くそれを受け止める。

「教えてくれるまでは離さねえからな!」

ヒュン!

その時、黄色の光が薫の横を駆け抜けた。

薫が振り返ると、バルディッシュを携えたフェイトがこちらを見据えていた。

だが先程の攻撃の傷のせいか、表情に余裕がない。

「はあ…はあ…アルフから離れて!!」

「フェイト…!?!?逃げてって言ったはずだよ!?!」

「それはできないよ……だって、私はアルフが大事だから!!」

そう叫んだフェイトはバルディッシュを振り上げ、薫の方へ迫ってきた。

「くッ……!!」

薫はバリアを張り、バルディッシュを受け止めた。

「うらあッ!!」

すかさずアイファアを連射してフェイトを攻撃するが、彼女もバリアを張っている。

だが明らかに薫がフェイトを圧倒している。

「アイファア、もうちょっと踏ん張ってくれよ……!!」

《は……はい!!》

そして薫が再び、アイファアの引き金を引こうとした、その時だった。

「ううおおおおおらああああッ!!……!!」

ドガッ!!

なんとフェイトの危険を察知したアルフが、薫の背中にハイキックをくらわせたのだ。

「うおおッ!?!」

もろに攻撃を受けた薫のバランスは崩れ、バリアが消えてしまった。

「フェイト!早く私の後ろへ!!--」

そしてフェイトがアルフの後ろへ移動したと同時に薫が振り返る。

「いてて...このおおッ!!--」

だが薫がアイファーを向けるより早く、アルフは彼に両手を向けていた。

(しまった...!!--)

「遅いよ!--」

ドドドドドドドドドドドドッ!!--!!

アルフの掌から発せられた魔力攻撃は、たちまち薫に迫ってきた。

「やべえ...!!--」

バリアを張る暇などなく、魔力攻撃は薫に襲いかかった。

「おわああああッ!!!?!」

「フェイト!逃げよ!」

アルフはフェイトに肩を貸し、その場から姿を消した。

やがてボロボロの薫が、煙の中から飛び出してきた。

「はあ…はあ…ああクソッ!」

フェイトとアルフに逃げられたことを悟った薫は舌打ちする。

そしてリンディヤクロノへの報告と謝罪のため、薫はアースラへと帰還した。

*

一方ここはロックの自室。

(亀山薫…思っていたよりも頼もしい人物だったね…)

保護したなのはとユーノをリンディ達に任せ、彼は自室で休憩をとっていた。

「それにジュエルシードの手掛かりも掴めたし、これはいよいよ運が向いてきたかもね…」

誰もいない部屋でロックはそう呟いた。

葛藤（後書き）

次回は、亀山君となのは&ユーノの交流を書きたいと思います。

なのはの決意（前書き）

今回はちょっとサクサク気味です。後半は殆ど亀山君目線で進みます。

なのはの決意

「…すみませんでした！」

ここは会議。

帰還した薫がリンディに頭を下げていた。

「まあ仕方ないでしょう。それより亀山さん、こちらは貴方とロック二尉が保護した、なのはさんとユーノさんです」

見るといつの間にかリンディの横になのはと、人間の姿をしたユーノが立っていた。

「初めまして。高町なのはです！」

「ユーノ・スクライアです。初めまして！」

なのはとユーノが薫に頭を下げる。

「ああ、俺は亀山薫。よろしく！」

「なのはさん。亀山さんは、貴方と同じ世界：つまり地球出身の方ですので、わからないことがあったら彼に訊いてくださいね」

リンディが薫を紹介し、なのはとユーノは薫と握手を交わした。

*

数分後、なのはとユーノは薫の部屋にて、ジュエルシードが地球にある理由を話した。

部屋に来る途中、ロックと会ったので彼も一緒にいる。

「…そつかあ、元々ジュエルシードはユーノ君が発掘したモンだったのか…」

「はい…僕らの宇宙船が爆発してしまつて…本当にすみません」

ユーノがうなだれる。

「気にすんなよ。起きちまつたもんはしょうがねえだろ」

薫がユーノの肩を叩く。

「そつだよユーノ君、これからも頑張ろう!」

なのはも励ます。

「あ、そつだ。なのはちゃん、あのフェイトつて子やアルフの事知ってるんだろ?よかつたら聞かせてくれないかな?」

フェイト達の事情を知りたい薫は直接なのはに問う。

「わかりません…でもフェイトちゃん、いつも寂しそうな目をしてます…」

「そつだよなあ…あんな小さな子が夜中に各地を飛び回るなんて異常だぜ。ところでさ、二人はこれからどうすんだ？」

するとユーノが挙手した。

「僕達はこれから、管理局に協力しようと思っています。元々僕のせいでもありますし、なのはの魔力はそちらにとっても有効な戦力になると思います。どうでしょうか？」

だが薫はバツが悪そうに頭を掻いた。

「いやあ、俺は民間協力者だから何とも言えねえな。それに…」

「それに君達には覚悟があるのかい？僕には、とてもそういう風には見えないね」

薫の台詞を遮るように、ロックが口を開いた。

「覚悟…？」

「君達はまだ子供だ。こんな事件に首を突っ込むべきではない」

ロックは、なのはとユーノを交互に見比べる。

「つまり僕は、君達に命のやり取りができるのかと言っているんだ。最悪の場合、フェイトの命を奪わなければならないかもしれない。もしくは奪われる」

「で、でも…！」

なのはが反論しようとするが、ロツクの表情は険しい。

「でももへつたくれもない！薫は地球で刑事という仕事をしていたから大丈夫だけど、君達は魔力が強いだけのただの子供だ…！」

「やめるロツク！相手は子どもだぞ…！」

強い口調で話すロツクに驚きつつも、薫はロツクを止めた。

「子供だからこそだよ、薫。クロノ執務官といいエイミィといい、そもそも事件に子供を巻き込むこと自体どうかしてるとは思わないかい…？」

ロツクはそう言うつと力無く立ち上がった。

「…少し熱くなってしまったようだ、すまない。頭を冷やしてくるよ…。」

出口へ向かって歩いていくロツク。

「どうしてもこの捜査に参加するといふのなら止めはしない。仮に死んだとしても恨まないでね…。」

振り向いてそう言ったロツクは部屋から出て行った。

「…ごめんな、でもあいつなりに二人のこと心配してんだよ。でもこういうことに許可を出すのは、ここの責任者のリンディさんだ。あの人に相談してみなよ。」

すかさずフォローする薫。

(ロックの奴：意外と不器用なのか？右京さんと同じように…)

右京とロックの共通点(？)を見つけた薫だった。

《だから、僕もなのはもそちらに協力させていただきたいと…》

翌日、なのはの家に戻ったユーノがレイジングハートを通し、管理局に協力することに決めたことを報告した。

クロノは反対気味だったが、リンディの最終判断によりなのはとユーノは、アースラ部隊に協力することになった。

なのはとユーノをアースラ艦内で見かけても、ロックは何も言わなかった。

(ようやくロックも諦めたか…)

安心する薫だが、絶望へのカウントダウンは既に始まっていた。

*

なのは達がアースラに移って十日後、艦内放送が流れた。

《エマーゼンシー！捜査区域の海上にて大型の魔力反応を感知！》

「な…なんだとお！？」

部屋のベッドで寝転がっていた薫は、上着を着ると急いで艦橋へ向かった。

艦橋に到着すると、既になのはやユーノ、クロノも到着していた。

モニターには、海に魔力を流してジュエルシードを強制発動させようとしているフェイトが映っていた。

「なんとも無茶する子ね…」

リンディがそう呟く。

「あの…私、急いで現場に…！」

「その必要はない」

なのはの台詞をクロノが遮った。

「放っておけばあの子は自滅する。自滅しなかったら、力を使い果たしたところで叩く。捕獲の準備を！」

クロノはオペレーターにそう指示を飛ばした。

「残酷に見えるかもしれないけど、これが最善です」

「でも…！」

リンディの言葉も耳に入らない様子なのは。

(どうにかしねえと地球が…！)

薫も額に汗を浮かべている。

その時、薫達の背後で何かが光り輝きだした。

「君は…！」

振り向いたクロノが声をあげる。

それにつられて振り返った薫とリンディは驚いた。

なんとユーノが、なのはを現場に転送させようとしているのだ。

「ごめんなさい！高町なのは、指示を無視して勝手な行動をとりま
す…！」

「あの子の結界内に…転送！」

すると艦橋からなのはの姿が消え、ユーノも後を追った。

「クソッ、あいつら…！」

拳を握りしめた薫は、リンディの方を向いた。

「リンディさん！俺を行かせてください！」

「待つてください亀山さん！少し、様子を見ましょう…」

そう言われた薫は、黙ってモニターを見つめていた。

（ここは警察でもなければ、俺は特命係でもない…リンディさん達に迷惑はかけねえ…）

薫は自分を責めた。

自分よりもまだまだ幼い少女達が戦っているのを、ただ見ていることしかできない自分が歯痒かったのだ。

それから十分後、現場は落ち着いた空気を取り戻していた。

モニターの様子を見る限り、なのははフェイトと協力してジュエルシードの封印に成功したようだ。

そして今、彼女らの前には封印に成功した七つのジュエルシードが浮いている。

「フェイトちゃんに伝えたいこと…ようやくわかったんだ」

そう言ったなのはは、フェイトの目を見つめ、言った。

「友達に、なりたいんだ」

フェイトは勿論、後ろで見ているアルフも驚いた様子だ。
対するユーノは安心したような表情を浮かべていた。

だが…

ドオオオン！！

「きゃあっ！？」

その時、何者かがなのはの背中に魔力攻撃を撃ち込んだ。

「ッッ！？」

何が起こったのかわからず、驚くフェイトにアルフ、ユーノ。

アースラの艦橋にいた薫やリンディ達も啞然としていた。

(…な…何…！？)

なのははフラフラになりつつ、後ろを振り向いた。

そして驚愕した。

「…あ…あなたは…！」

それは艦橋でも同じ反応だった。

「なんで…何やってんだよ！？ロック…！！！」

思わず叫ぶ薫。

そう、なのはを攻撃したのはカルミを彼女に向けている管理局の工
リート、ロック・ブルだった…。

「だから言ったよね…死んでも恨まないで…！」

なのはの決意（後書き）

次回、ロックの化けの皮が剥がれます。

ご意見、ご感想お待ちしております！

ロツクの正体（前書き）

今回は少し長めです。

ロックの正体

「ぎゅっ…して…」

フラフラなのはをユーノが支える。

「なのは、大丈夫!？」

「うっ…うん…」

ユーノはキツと、ロックを睨みつける。

「…何だいその目は?」

ロックが不敵に笑う。

「ロックさん…どうしてこんなことを!？」

激怒するユーノ。

だがロックは澄まし顔で言い放った。

「僕は予め君達に警告した筈だよ。死にたくなかったら出てくるな
ってね。さすがに僕だって、関係ない君達を巻き込みたくはないよ」

そう言ったロックは、その場から猛スピードでフェイトの前までや
ってきた。

「な…！」

しまった、という表情を浮かべるフェイト。

だがロツクから出た言葉は意外なものだった。

「大丈夫だよフェイト。これからは仲良くしよう」

「「「！？」」「」」

全ての人間が耳を疑った。

特にこの男が…

「…あの野郎あ…！」

そう叫んだかと思うと、薫はアイフアーと共に現場へと転移した。

「あ…ま、待ってくだ…！」

リンディが止めようとしたが遅かった。

「それって…どういうこと…！」

フェイトとアルフはまだ警戒態勢だ。

「なに、簡単なことだよ。僕は君の母親…プレシア・テストロッサ

と組んだんだ！」

ロツクがそう言い放った時、辺りの空気が硬直した。

「か…母さんと!？」

予想だにしていけない展開に、驚く一同。

その時、バリアジャケットを着用した薫がロツクの前に姿を現した。

「ロツク! てめえどういっつもりだ!？」

ロツクの胸倉を掴み、奥歯を噛み締める薫。

「言葉の通りだよ、僕とプレシアは取引したんだ。フェイト達を捕まえようとした後、ジュエルシード集めを手伝う代わりに、時空管理局に復讐するための力を提供するって…プレシアが僕にコンタクトをとってきたのさ！」

「か…管理局に復讐!？」

ロツクの衝撃発言がまた飛び出す。

「な…何言っただよロツク…? お前…その管理局のエリートじゃないか…!」

薫は完全につろたえている。

対するロツクは、真っ直ぐ薫の目を見つめている。

「薫…僕と初めて会った時、君はなんて言ったか覚えてるかい？」

「初めて会った時……あっ！」

薫は思い出した。

それは、彼にとって少し気になった程度のことだった。

《時空管理局って、他の世界にもあるんだろ？他の世界にもそれぞれの文化ややり方があるのに、それを自分達で押さえつけるのって変じゃないか？》

「あの時君はそう言った。僕は正直、嬉しかったんだ。僕がこれまで会ってきた魔導師の中で、君だけが管理局の横暴さに気づいたんだからね。でも同時に君は元刑事だ。万が一、僕の造反を察知して捕縛されたら厄介だからね。あえて高速移動とバインドは教えなかったのさ」

そう言ったロックは、カルミを通してアースラと通信を繋いだ。

「という訳なんで提督、僕があなたの方の下で働くなんて愚かな真似はもう終わりですよ」

*

「ロック二尉、どういづつもり？」

艦橋のリンデイとクロノは、モニターに映っている裏切り者、ロツクを睨みつける。

《…提督。12年前の“ケリーブルク騒動”をご存知ですか…？貴女も時空管理局の幹部だ…知らないとは言わせませんよ》

艦橋にロツクの静かな声が響く。

「ケリーブルク騒動…ええ、資料で見たわ。あれは嫌な事件だったわね…」

リンデイがため息をついた途端、ロツクの表情が変わった。

「…嫌な事件…？…ふざけるのも大概にしろ！あの時、僕はお前から時空管理局のやった悪事を絶対に忘れはしない、そして許さない！！」

ロツクがそう言い放ったと同時に、艦内に警報が鳴り響いた。

「次元干渉…！？」

小型モニターと向かい合っていたエイミィが急いでキーボードを叩く。

「別次元から本艦、及び戦闘空域に向けて高次魔力来ます！あ…あと6秒！？」

「なッ…！？」

クロノが驚くが遅かった。

バリバリバリッ！！！！

突如何処からか、紫色の雷のようなものが現れ、アースラに直撃した。

*

魔導師達が居る現場にもそれは近づいていた。

「か…母さん…！！」

怯えた表情を見せるフェイト。

（あの子、今母さんって言ったぞ…！！）

薫はそれを聞き逃さなかった。

雷のようなものはフェイトに直撃し、彼女が苦しみだした。

「フェイトちゃん！きゃあッ！」

なのはがフェイトを助けようとするも、彼女も巻き添えをくらってしまった。

この混乱に乗じ、アルフはジュエルシードの回収に向かう。
手を伸ばしたその時、何かがそれを阻んだ。

「こ…これはデバイス!？」

それは執務官であるクロノのデバイスだった。

「そこまでだ！」

クロノがそう言い放つが…

「ガウスシューター!！」

ドガアアアン!!

「ぐはぁッ…!！」

なんとクロノの背後には、七つのジュエルシードを確保したロック
が迫っており、彼に攻撃を放ったのだ。

「ぐ…ロック二尉…!！」

「執務官といえど所詮は子供ですね、クロノ執務官!！」

ロックの指がカルミの引き金にかかった、その時だった。

ズダン！！

「ぐツ…！？」

その時、ロックの右肩に魔力攻撃が直撃した。

「いい加減にしろロック！！どうしちゃったんだよ！？」

ロックの後ろには、ボロボロなのはに肩を貸し、アイファアを彼に向けている薫の姿があった。

撃たれたロックは右肩を押さえて苦笑いしており、なんと薫に手を差し出したのだ。

「薫…僕と一緒に来るんだ！」

「な、何言ってるんだお前！？」

当然ながら困惑する薫。

「君は時空管理局にいるべき人間ではない。それに…僕は君を殺したくない」

「くツ…ロック、すまねえ！」

ドスッ！！

「かはッ…！」

薫はなのはから離れ、ロツクの鳩尾に拳を叩き込んだ。

そして一瞬の間隙をつき、ジュエルシードを四つ奪い返した。

「しまった…！」

「悪いなロツク…地球をぶっ壊すわけにはいかねえんだよ…！」

申し訳なさそうに叫ぶ薫。

「うああああ…！」

それを見たアルフは頭に血が上り、魔力を海に撃ち込んだ。

波が薫に襲い掛かる。

「う、おわああああ…！」

ザバアアアッ…！！

波は薫を一瞬のうちに海へと引きずり込んだ。

「逃走するわ！捕捉を！」

指示を飛ばすリンディ。

「ダメです！先程の雷撃でセンサー機能停止！！」

オペレーターのアレックスがそう返す。

「…ふう…！」

諦めざるを得ない状況になり、脱力するリンディ。

「はあ…はあ…」

薫はユーノとクロノに助けられ、海から上がってきていた。

しかし既にフェイトやアルフ、ロックの姿は消えていた。

（あいつ…昔何があったんだよ…）

今の薫の頭の中は、ロックのことでいっぱいだった。

ロツクの正体（後書き）

次回、ロツクの過去が明らかになります。

ご意見、ご感想お待ちしております！

後悔（前書き）

今更ですけど、なのはとユーノがめっちゃ空気ですねw

後悔

戦闘空域から離脱したフェイト、アルフ、ロックの三人は活動の拠点である“時の庭園”へと帰還していた。

「ねえ…本当にアンタはあたし達の味方なのかい？」

廊下を歩きながら、アルフがロックに尋ねる。

「君もしつこいな。何度もそう言ってるじゃないか。今フェイトがプレシアに確認しに行ってるよ。ジュエルシードを渡すついでにね」

*

ロックの言葉通り、フェイトはプレシアの部屋にいた。

「…ええ、本当よフェイト。ロック・ブルは私が雇った、腕のいい魔導師だわ」

「そんな…ジュエルシードなら私が…！」

フェイトがそこまで言った時、プレシアは持っていた鞭を床に叩きつけた。

パシンッ！

「…あなたが役に立たないからじゃない！今回だってそう…あの亀山薫という魔導師に邪魔されたとはいえ、ただボーっとしているだけなんて…！」

フェイトはビクツとし、ギョツと目を瞑った。

「酷いわフェイト…そんなに母さんのことが嫌いな…？」

パシンッ！！

「きゃあああああッ…！」

プレシアの部屋に、フェイトの悲鳴が響いた。

*

一方こちらはアースラ。

なのはとユーノが直立し、椅子に座ったリンディと向き合っている。

壁にもたれかかっているクロノがそれを見ている。

「指示や命令を守るのは最低限のルールです。あなた達のせい、他の人が危険な目に遭ったかもしれないからですよ」

「すみませんでした！」

リンディに頭を下げるのはとユーノ。

(そついや俺や右京さんも、ああやってよく内村刑事部長に怒られたなあ…)

なのは達の後ろにいる薫は、昔を思い出す。

むしろ薫や右京の場合は、死体を発見したり、手柄を持つてくるので大目に見られることが多かった。

また薫達も、怒られてからすぐに捜査活動を再開することはもはや当然であった。

「…まあ今回は、ジュエルシードを全て封印、そしてそれを四つ奪い返した亀山さんに免じて不問とします。ですが、二度目はありませんよ」

「はい、すみませんでした」

再び頭を下げるのはとユーノ。

「さて、これで私達は厄介な人を敵に回してしまったわね…」

リンディがため息をつく。

厄介な人とは勿論ロツクのことである。

「そうだリンディさん！あいつ、ケリーブルク騒動って言ってましたけど、それって何なんスか？」

薫が問うとリンディは若干俯いた。

「…そうですね、皆さんには話しておかないとね」

そう言ったリンディは静かに語り始めた。

*

12年前、惑星ケリーブルクは自然に恵まれ、人々が畑や家畜で自給自足するという、良くも悪くも田舎だ。

元々電気もあまり使わなかったので、機械が無くても困りはしなかったし、治安は比較的良かったので平和な世界だった。

そう、あの日までは…

某日、一隻の次元航行船がケリーブルクに降り立った。

何事かと、人が沢山集まる。

その船には時空管理局のマークがある。

やがて責任者と思われる、一人の年配の男が船から出てきて、マイクを手に持った。

《たった今より、この惑星に我々時空管理局の基地を建設する!》

人々は猛反対したが、聞き入れられることはなかった。

頭にきた住人達は建設現場に座り込み、立ち退き反対運動を起こした。

それはロックの両親…デビッド・ブルやシンディ・ブルも同様だった。

数日後、武装隊により反対運動は鎮圧され、それに参加していた住人は全員死亡した。

以上がケリーブルク騒動の悲劇である。

*

「な…何すか、それ…」

薫が絶句する。

これならロックが時空管理局を恨んでも仕方ない。

「ひ…ひびく…」

ぼそりとなのはが眩く。

「彼には気の毒だが、これも仕方の無いことだ」

クロノが腕を組みながらそう言ったが、薫は黙っていなかった。

「…それ本気で言ってるのかよ？」

「…え？」

「本気で言ってるのかって聞いてんだよ!!!」

彼はロツクに同情したのか、クロノを怒鳴りつけた。

「…あ、ああ。管理局は大きな組織だ。この程度の小さな反対運動は鎮めなければならない」

ガシッ!!

「か、薫さん！ダメですよ!!!」

なのはが止めるが、薫はクロノの胸倉を掴んだ。

「…いくら子どもだからって…執務官だからって言っていていいことと悪いことがあるだろうが!!!お前は…自然を壊して基地建設をするのが正しいっていいのかよ!!!」

「ぼ、僕はそこまでは言っていない!!!」

クロノも負けじと言い返す。

「……………ああ、そうかよ！」

やがて薫はクロノに呆れ、彼を解放した。

「クロノ、今の発言は執務官としては少々問題よ？」

リンデイがクロノを咎めるが、薫はまだムスツとしている。

「…すみません艦長……さてエイミィ。次は、ロック二尉を買収したプレシア・テスタロッサの情報を！」

話題を上手くプレシアに移したクロノは、艦橋のエイミィを呼ぶ。

《はいはい！》

そして、モニターにプレシアの写真と経歴が表示された。

「僕らと同じ、ミッドチルダ出身の魔導師だ」

（この人がフェイトの母親か…何だかキツそうな人だな）

そう思った薫だが、昔右京に言われたことを思い出した。

《亀山君。捜査権を持つ人間は一概に物事を決めつけず、捜査に骨身を削るものです》

「…そうッスよね、右京さん…」

薫は誰にも聞こえないようにそう呟き、同時にプレシアの計画を突き止めることを決意した。

*

…あれ、みんな…どうして倒れているの…

…父さんも母さんも…なんで他の人と一緒に並んでいるの…

…血なんか沢山浴びちゃって…どうしたの…

…ああ…そうか…

みんなころされたのか

「…うわあッ!?!?」

時の庭園内の自室にて、ロックは飛び起きた。

「はあ…はあ…またあの夢か…」

ベッドから起き上がったロツクは、冷蔵庫からペットボトルの水を取り出して飲んだ。

（父さん…母さん…ろくに親孝行出来ずにごめんね…）

今は亡き両親を思うロツク。

（あの時、僕にも薫のような強さがあれば…こんな事にならずに済んだかもしれないのに…）

「…」

ロツクは涙を流しながら頭を抱えた。

後悔（後書き）

次回からは、なるべくなのはの出番を増やしたいと思います！

束の間の休息（前書き）

今回、なのはよりユーノの出番が多くなりましたw

束の間の休息

「…フェイト!!」

大広間にて、傷だらけで倒れているフェイトを抱き起こすアルフ。

「くッ…!」

激怒したアルフは怒りにまかせ、プレシアの部屋へ飛び込んだ。

「うおおおおッ!!」

バチィッ!!

アルフは拳をぶつけようとするが、プレシアはバリアでそれを防ぐ。だがアルフの勢いは止まることを知らず、プレシアのバリアを破ることに成功し、彼女の胸倉を掴んだ。

「アンタはあの子の母親で…あの子はアンタの娘だろ!!なのに…どうしてあんな酷いことができるんだよ!?!」

そう叫んだアルフが再び拳をぶつけようとした時、プレシアが振り返って自身のデバイスから攻撃を放った。

「あぐッ…!!」

「邪魔よ…消えなさい」

プレシアは冷たく言い放つと、再びアルフに攻撃を放った。

ドガアアアン！！

アルフは庭園の外へと吹き飛ばされていた。

(…ごめん、フェイト…ちょっと…遅くなりそう…)

心の中でフェイトに謝罪し、アルフは何処かへ転移していった。

*

翌日、薫は海鳴市にいた。

その理由は前日に遡る。

「…えっ！捜査から少し外れる！？」

薫となのは、ユーノの三人はリンディに呼び出されていた。

「ええ。プレシア女史とフェイトちゃんは、あれだけの魔力を放出

したので当分動けないでしょう。貴方達は少しの間休んでください」

「で、でも…」

「ご家族やお友達に元気な姿を見せてあげてください」

そう言われて、薫はなのはを学校まで送っていた。

「じゃあな、なのはちゃん。勉強頑張れよ！」

薫が手を振る。

「はい！薫さん、ユーノ君をお願いします！」

なのはも薫に手を振り返し、校舎へと駆けていった。

「…じゃあ頼むぞ、ユーノ！」

「はい！」

ユーノは今フレットモードで、薫の肩に乗っている。

何やら囁き合った二人は、その場から走り去っていった。

*

そして午後、

「っしゃあ！バインドと高速移動を修得できたぞ！！」

誰もいない山上の空き地にて、薫がガッツポーズをとっていた。

「よかったですね！」

フレットモードのユーノが笑顔で言う。

「いやあ、ユーノとアイファアの教え方が上手かったんだよ。ただしゃがんで話聞いて練習したら修得できたんだ。どうりでなのはちやんが短期間で魔力の使い方を上達したわけだぜ！」

薫はすっかりご機嫌だ。

(子どもみたいだな…)

密かにユーノはそう思った。

「よしユーノ、今からラーメンでも食いに行くか？まだ飯食ってないだろ」

「あ、はい！」

返事をしたユーノは人間の姿に戻る。

二人は親交を深めつつ、下山した。

*

「あゝ、腹一杯だぜ」

「そうですね」

午後三時、ユーノは再びフレットモードに戻り、薫の肩に乗っていた。

「ところで薫さん。さっきのお店にあった、丸い木の実みたいなのは何だったんですか？臭いがキツかったんで食べれませんでしたけど…。」

「あー、あれはニンニクだ。食わなくて正解だぜ。あれ食ったら臭いが付いて、なのはちゃんに嫌われるぞ」

薫が冷やかす。

「なッ…ぼ、僕は…！」

「ははは、冗談だよ！」

（そついや伊丹の奴、いつも昼間っからラーメンにニンニク入れてたな。だから彼女できねえんだよ）

かつての同僚である伊丹を思い出す。

だが後に、そのニンニクを使って伊丹が命を狙われることを誰も知らない。

そんな中、

「おいおいおい！お前、亀山か！？」

誰かに名を呼ばれ、薫が振り返った。

「か、角田課長じゃないツスカ！お久しぶりです！！」

そう、刑事時代に友好的だった組織犯罪対策五課の課長…角田六郎だ。

「お久しぶりじゃないよ！お前やっぱ帰ってたんだな！いや、一課の連中が「亀を見た！」って騒いでたからよ！」

「そ、そうツスカ…」

ちなみにユーノは先程から空気を読んで、黙っていた。

「あ、そだ亀山。お前って動物詳しかったっけ？」

角田はユーノを見ながら薫に問う。

「え…そうツスね…昆虫ならわかりますけど。俺こっつ見えても子ども頃、昆虫博士って呼ばれてたんすよ！」

「あ……やっぱ知らねえか」

残念そうに肩を落とす角田。

「どうしたんスか？いきなり動物なんて…」

「いや実はな…オレン家の近所に、バニングスさんっていうお金持ちの豪邸があんだけどな。そこに見たことねえ犬が居たからよ、朝から気になってな…大木や小松に訊いても知らないって言うんだよ」

「お金持ちなら珍しい種類の犬くらい飼ってても不思議じゃないでしょ？」

薫が若干呆れながらそう言う。

「いやいや！これがまた驚きなんだよ！」

角田が声を荒げる。

「その犬な、毛色はオレンジ色なんだ。それに…なんと額に赤い宝石があんだよ！」

「額に赤い宝石ってんな事あるワケ……………ええッ!？」

犬の特徴を聞き、薫とユーノは驚いた。

《薫さん、それって…》

《ああ…間違いねえ!》

念話で会話しながら、薫とユーノは確信した。

(アルフだ…！)

「おい、何かわかったのか？」

角田が薫の様子をうかがう。

「課長、その家何処ツスか!？」

「なななんだよ急に…えつとな、その角曲がつて真つ直ぐ行けば着くよ。オレ早退したとこだから帰るわ。なんか最近眠れなくて調子悪いのよ。じゃ!」

そう言った角田は、薫達とは逆方向へ歩き始めた。

「コーヒーの飲み過ぎツスよ課長!」

そう言った薫は、ユーノの方を向いた。

「よし、行くぞユーノ!」

「はい!」

*

角田と別れた薫は角を曲がってダッシュし、すぐにバニングス邸に到着した。

「ここか…でつけ家だなあ…！」

あまりの大きさにため息をつく薫。

「うちに何か用ですか!？」

突如、隣から少女の高い声が聞こえてきた。

「え…？」

薫が向くと、そこには三人の少女が立っていた。

彼はその中の一人に見覚えがあった。

「薫さん！」

そう、なのはだ。

どうやら三人は友達らしい。

「なのはちゃん、知り合い？」

大人しそうな少女が問う。

「えっと…アリサちゃんにすずかちゃん。この人は以前お世話になった刑事さんなの！」

(助かったぜなのはちゃん！)

なのはのフォローに感謝する薫。

《ところでなのはちゃん、聞いたか？》

《はい…アリサちゃんから聞きました…》

どうやらなのはも話を聞いたらしい。

「で、その刑事さんがうちに何の用なの!？」

「アリサちゃん…」

喧嘩腰のアリサをすずかが宥める。

「珍しい種類の犬がいるって聞いたからさ、見せてもらっていいかな？」

薫はしゃがみ込む、アリサと視線を合わせる。

「え…ええ、いいですよ」

拍子抜けしたのか、アリサはすんなり了承した。

「ありがとな!」

《薫さん…行きましょう!》

念話でユーノが言う。

《ああ!》

プレシアやロックの情報を知るチャンスだ。

薫はアリサに案内される形で、バニングス邸に足を踏み入れた。

束の間の休息（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております！

フェイトの過去（前書き）

今回はあの人登場です。

フェイトの過去

《やっぱり…アルフさん…》

《アンタらか…》

遂に薫達は、檻に入っている獣形態のアルフと対面した。

《どうしてここに…フェイトちゃんは？》

なのはがそう問い掛けると、アルフは俯いた。

「あらら…まだ元気ないみたい」

アリサがため息をつく。

《なあ、なのはちゃん。俺とユーノが話聞いとくから、なのはちゃんは友達と遊んできなよ》

薫がそう伝えると、なのははコクンと頷いた。

「さ、おやつにしましょ！」

アリサがそう言い、それになのはとすずかが続いた。

やがて檻の前には薫とユーノだけになり、事情聴取が始まった。

「アンタらが居るってことは…連中も見てるんだろ…?」

(…連中?)

薫が首を傾げるが、ユーノは頷いた。

《時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ》

その時、アルフと薫の頭の中にクロノの声が響いた。

「連中って管理局か…」

ボソツと呟く薫。

《事情を話してくれば、悪いようにはしない。君も、君の主も…》

「堂々と盗聴かよ…」

《なツ…し、失礼な!》

薫がぼやくと、クロノが声を荒げた。

《…話すよ。あたしの知ってること全部…》

アルフは観念したのか、全てを話した。

*

「なるほどなあ……」

フェイトの事情を知り、薫の表情が険しくなる。

「……まったく！プレシアって奴はなんで娘にそんな酷い仕打ちができたんだよ！自分の子どもにそんなこと……俺なら絶対出来ねえよ……！」
拳を握り締める薫。

「……フェイトの……」

突如、アルフが口を開いた。

「……あ？」

「フェイトの親が……アンタなら良かったのに……」

そう呟くアルフ。

「そついやアルフ、フェイトの父親はどこにいるんだ？」

「わからない……フェイトもあの女も、何も言わないから……」

《なるほど……高町なのは、君はどうする？》

次にクロノはなのはに問い掛けた。

《私はフェイトちゃんを助けたい。それに、一応考えている事もあ
るんだけど……》

どうやらなのはには何やら作戦があるらしい。

《…だそうだ。それでいいか？》

《うん。なのは…だっけ、頼めた義理じゃないけど…フェイトをお願…！》

《はい、アルフさん！》

こうして交信はひとまず終わり、薫はアイファーと共に自宅があるサルウィンへと転移していった。

*

薫が自宅に戻った時には既に夜だった。

だが普段と違ってることがあった。

「…ん？灯りがついて…まさか！」

薫は急いで自宅に駆け込んだ。

ボタンー！

「うわっ！びっくりした〜！」

「美和子、お前帰ってたのか!？」

そう、フリージャーナリストである薫の妻・亀山美和子である。

「うん、ついさっきフランスから帰ってきたとこ。薫ちゃんはどっか行ってたの？」

美和子がミネラルウォーターを飲みながら尋ねる。

「え…あ…あ、ああ。ちょっと、な…」

「…ん？また何か隠してる？」

しどろもどろの薫。

「あっ！何これ!？」

美和子は、薫の首にぶら下がっているアイファアに気づいた。

「あっ…!」

「薫ちゃん、こんなアクセサリ持ってたっけ？」

美和子がそう言った時、突如アイファアが光り出した。

《マスター、こちらの方は?》

「うわ！喋った!」

興奮する美和子。

(やっべえ…)

「これスクープになるかも！その名も喋るネックレス！」

「ま、待て美和子！それは困る！」

魔導師や時空管理局の存在が表沙汰になるのを恐れた薫は、美和子を説得する決意をした。

「どうして？」

「…美和子、聞いてくれ。俺が今から言うことに嘘偽りは無い」

*

「…へえ、沢山の世界を行ったり来たりする時空管理局…魔法を使う魔導師…かあ…」

「やっぱ…信じらんねえか？」

薫はあまり期待していないようだが、美和子の返答は意外なものだった。

「…わかった。私は薫ちゃんを信じる！」

「ほ、本当か!？」

美和子の返答を聞いた薫は、嬉しそうな表情を浮かべた。

「だいたい薫ちゃんが、嘘なんてつけるわけないじゃん!」

そう、薫は良くも悪くも嘘をつくのが苦手なのだ。

「あ、くれぐれも…」

「わかってる。記事にはしないよ」

美和子が笑顔を浮かべ、そう約束した。

「だからさ…そのフェイトちゃんとロックさんを絶対助けてあげてよね!」

「…ああ!サンキュー美和子!」

*

数日後、某所にて戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

「…ここならいいよね。出てきて、フェイトちゃん」

なのはがそう言った時、彼女の正面にある噴水の水面にフェイトの黒いマントが写った。

《フェイト！もうやめようよ！なのはや薫がなんとかしてくれるから…これ以上、あの女のいいなりになるのは！》

怪我の治療が終わったアルフがフェイトに呼び掛ける。

だがフェイトは黙って首を横に振る。

《でも…私はあの人の娘だから…！》

そしてこちらはアースラ。

「戦闘開始、だねえ…」

現在はクロノとエイミィ、薫がモニター越しになのはとフェイトの戦いを確認する。

どうやらなのはがフェイトと戦っている間に、フェイトの帰還先を探索するようだ。

「頼りにしてるんだ。頼むよ」

「りょうかい〜！」

真剣な表情のクロノに対し、エイミィは笑いかけた。

「でもさ、なのはちゃんに言わなくていいの？あの事故のこと…」

エイミィの表情が暗くなる。

「なのはが勝つに越したことはないんだ。今はなのはを迷わせたくない」

「おい何のことだよ、あの事故って…」

何も知らない薫が二人に問い掛ける。

「これだ」

クロノが手に持っていた資料を薫に手渡す。

「ここにプレシアの過去や、フェイト誕生の真相が書かれている。だが今は口外しないでくれ」

「わかった。サンキューな！」

クロノに礼を言った薫はその場を後にした。

*

「…う…嘘だろ…?」

部屋に戻った薫は、クロノに渡された資料に目を通し、驚愕した。

「こんな…こんなことがあんのかよ…」

自分が思っていたより、深刻な事態だったようだ。

(なのはちゃん…頑張ってフェイトに勝ってくれ…プレシアを止めるために…！)

薫はなのはの勝利を祈り、アイファアを握り締めた。

フェイトの過去（後書き）

どうでもいいけど、もしこれが亀山君でなくイタミンだったら絶対主人公できないですね。

彼は子どもを手懐けるの苦手ですからw

ちなみに作者は亀山君と同じくらいイタミンが好きですw

プレシアの脅威(前書き)

関係ないですけど、大阪城ホール開催の水樹奈々さんのチケット買えました！

プレシアの脅威

(こっつしちゃいらねえ！)

資料を読み終えた薫は、部屋のパソコンに向かい合った。

プレシア・テストロッサという人物を、もっと詳しく調べるつもりなのだ。

(こんな時、米沢さんが居たら一瞬で調べられんだろうな…)

自分と右京の味方だった鑑識員、米沢守を思い出す薫。

そうしてパソコンに向かい合ってから数分後、資料以外の情報は出なかった。薫は次にジュエルシードについても調べていた。

「これだ…」

すぐさまマウスを操作し、ロストログの一覧表をクリックする。

ジュエルシードは全部で幾つあるとか、どのような能力を秘めているのかを調べることにした。

そして…

「あッ！」

ジュエルシードを集めた者がどうなるのかを知った薫は驚愕した。

「…これは…！」

ビー！ビー！

その時、薫の部屋のベルが鳴った。

《亀山さん！エイミィです！開けてください！》

薫が急いでドアを開けると、息を切らせているエイミィが立っていた。

「ど、どうした？」

「はあ…はあ…なのはちゃんとフェイトちゃんの戦いに…決着がついたんです！」

遂に二人の戦闘が終わった。

「ほんとか！すぐに行く！」

薫とエイミィが艦橋に到着すると、モニターには誰も映っていないかった。

その時、海からなのはがフェイトに肩を貸しながらあがってきた。

「勝ったのは…なのはだ」

クロノが安心した表情で言う。

「よ…よかった…」

大きなため息をつく薫。

だが、状況はそう安心できない。

なんとボロボロのフェイトが、まるでなのはを振り切るように飛び立っていったのだ。

「あッ…!？」

モニターを見ていた薫の表情が変わる。

なんとなのは達がいる現場に、灰色に染まった雲が立ち込めたのだ。

「高次魔力確認、魔力波長は…プレシア・テストロツサ！戦闘空域に次元跳躍攻撃を仕掛けるようです！」

エイミイが叫ぶ。

「なにッ!？」

薫とクロノが同時に反応する。

だがアルフから、プレシアとフェイトの話聞いていた薫にはわか

っていた。

プレシアは、なのはやユーノを攻撃するつもりは毛頭ない。

彼女の攻撃目標は、娘のフェイトであることを。

「ちつくしよおおお!!」

叫んだ薫はアイファアを握り締め、何処かへ転移していった。

クロノが止めようとしたが、遅かった。

*

「…母さん…?」

一方、なのはに敗北したフェイトは、力無く曇天を見上げていた。

やがて、自分が紫色の光に包まれていくのを感じ取った。

「はッ!?!」

遠くでフェイトのことを見ていたなのはが驚く。

フェイトに危険が迫っていることを悟ったなのははその場から飛び

立ち、彼女に近づく。

だが間に合わない。

「フェイトちゃああああん!!」

なのはが手を伸ばし叫んだ時には、フェイトに魔力攻撃が直撃……しなかった。

「フェイトおツ!!」

なんと薫が現れ、フェイトを後ろから抱き締めたのだ。

そうしてすぐ、薫に魔力攻撃が直撃した。

「ぐおおおおわあああああッ!!!!」

凄まじい魔力が薫を襲う。

だが薫は屈しない。

「……フェイトだけは……守り抜いて……」

彼はそう決意していたのだ。

そして薫は、薄れゆく意識の中でフェイトの背中を押し、魔力攻撃

の照準から外すと、海へ落ちていった。

*

その頃アースラでは、エイミィがプレシアの魔力発射地点を特定していた。

「空間座標、確認！」

「転送座標セツトしました！」

オペレーターのランディが、ランディにそう伝える。

「突入部隊、転送ポートから出動！任務はプレシア・テストロッサ、並びにロック・ブル二尉の身柄確保です！」

ランディが時の庭園へ突入部隊を出撃させた。

*

《転送反応！庭園内に侵入者多数！》

時の庭園でアラームが鳴り響く。

既に突入部隊がやってきたことは読まれていた。

「ゴホゴホ…ゴホッ！」

戦闘空域の映っているモニターを眺めていたプレシアが激しい咳をし、吐血する。

「プレシア！大丈夫かい！？」

側で控えていたロックがプレシアの肩に手を置くが、彼は薫のことも少し心配していた。

その証拠に横目でモニターを見ている。

（薫…君って奴は本当にお人好しだな）

そのモニターにはフェイトを抱えたなのは、ユーノとアルフに助け出された薫の姿が映っていた。

（でも…僕は…！）

モニターから目を逸らしたロックは、その視線をプレシアに向ける。

「…突入部隊が来たみたいだよ。僕が迎撃に出ようか？」

するとプレシアは血を吐きながらも、頷いた。

「ゴホッ…そうね。お願いするわ…」

するとロックはカルミを取り出し、バリアジャケット姿に変身した。

「じゃあ行ってくるよ。このカルミも強化してもらったことだしね

…
「

そう言ったロックは駆け出し、部屋を飛び出していった。

プレシアの脅威（後書き）

右京さんの相棒は神戸君もいいけど、やっぱり亀山君だね…

season1の再放送を見ながらそう思ってますw

悲しみのフェイト（前書き）

おかしなところがないか読み返してみたところ、
亀山君二回も海に
落ちてますねw

（しかも助けてるのが二回ともユーノ）

自分の芸の無さに少し呆れましたw

悲しみのフェイト

「よし、行くぞ！」

突入部隊の指揮を執る隊長、ディアズが先頭に立って走る。

だが…

「ここは通せないよ」

彼らの前にロックが立ちはだかったのだ。

「なッ…！」

「ロック二尉か…！」

他の局員は怯えるがディアズは違った。

「お前らは先に行け！ここはオレが引き受ける！」

薫やなのは達が来る前の彼は、アースラ内で優秀な方だった。

「は、はい…！」

「どづか…無事で…！」

他の局員達は会釈しながら、ディアズの横を通り過ぎていく。

ロックもそれを黙って見ていた。

「へっ、あの民間協力者共といいアンタといい…オレの活躍の場をことごとく奪いやがって！今日こそ恨みを晴らしてやらあ…！」

…同時にかなりのひねくれ者であった。

そんなディアズをロックは鼻で笑う。

「ふん、何を言い出すかと思えば…」

「黙れロック・ブル！オレあ元々テメエのことが気に食わなかったんだよ！でもな、ようやく今日という日がやってきた…」

自身のデバイスをロックに向けるディアズ。

「へえ、どんな日だい？まさか君の誕生日とかいうんじゃないよね？」

「へへへ…違いよ。それはな…」

ニヤリと笑ったディアズは地面を蹴り、ロックに向かっていった。

「テメエを堂々とぶっ殺せる日だああああ…！」

だがロックは一步も動かず、静かに笑っていた。

「フフフ…僕や薫よりも弱いくせに何言ってるの？」

「テメエのデバイスのデータはこっちが掌握してんだよ！残念だったなあ！！」

ズシヤツ！！

*

その頃アースラでは、艦橋にフェイトが連れて来られた。

ちなみに彼女を案内した薫はアースラに帰還してすぐ、治療担当の局員に治療されたので大事には至らなかった。

「…あら」

リンディがフェイトの姿を確認する。

「あの…リンディさん、この子を別の部屋に通してもいいっすか？母親の逮捕を見せるってのは流石にちょっと…」

「ええ、お願いします亀山さん」

リンディが頷くが、フェイトは動かない。

彼女は悲しい表情でその場に立ち尽くしている。

(母親の期待に応えれなくてショックなんだな…)

フェイトの考えを悟った薫は、なのはやユーノ、アルフの方を向く。
「よし、皆ついてきてく…」

《プレシア・テストロッサ！時空管理法違反、並びに管理局艦船への攻撃容疑で
貴女を逮捕します！！》

突入部隊の声が艦内に響く。

途端にフェイトは振り返って、モニターに釘付けになった。

やはり母親の名に反応したのであろう。

モニターには、プレシアの部屋の更に奥が映し出されていた。

そして少し進んだ先に、大きなカプセルが見えてきた。

*

「こ、これは！」

カプセルの中を確認した局員達が驚愕する。

そのカプセルには、なんとフェイトそっくりの少女が膝を抱えて目

を閉じていたのだ。

まるで眠っているかのように。

「私のアリシアに…近寄らないで!!」

ガシッ!!

「ぐわッ!?!」

近くに立っていた局員一人がプレシアに顔を鷲掴みにされ、投げ飛ばされた。

そして魔力攻撃を放ち、全員を無力化したのだ。

*

「……………!」

あまりの出来事にフェイトは勿論、なのはにユーノ、アルフまでもが愕然とする。

(あれはまさか…?!いや、彼女は死んだはずだぞ…!)

資料を読んだ薫でさえも驚いている。

《たった九個のジュエルシードでは、たどり着けるかどうかはわからないけど…もういいわ。終わりにする…》

艦内にプレシアの声が響く。

《この子を亡くしてから時間も…この子の身代わりの人形を娘扱
いするのも…》

「…!?!」

フェイトがビクツと反応する。

《聞いていて?あなたのことよフェイト。折角アリシアの記憶をあ
げたのに…そっくりなのは見た目だけ…役立たずでちっとも使えな
い、私のお人形…》

「くツ…!」

クロノがモニターのプレシアを睨みつける。

「最初の事故の時にね…」

突如エイミィが口を開いた。

「プレシアは実の娘…アリシア・テストロッサを亡くしているの。
安全管理不良で起きた暴走事故によって…」

(そついやそつだ…だが改めて聞くと…)

薫が拳を握り締める。

「その後プレシアが行っていた研究は、使い魔を超えた人造生命の生成。そして…死者蘇生の技術」

「記憶転写型特殊クローン技術『プロジェクト・フェイト』」

クロノが付け加える。

《そうよ…でも失ったものの代わりにはならなかった…つくりものの命は所詮つくりもの…》

「や…やめろ！それ以上言うんじゃない！！」

我慢できずに叫ぶ薫だが、尚もプレシアは口を開く。

《アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ…ワガママも言ったけど、私の言うことをとてもよく聞いてくれた…アリシアは…いつでも私に優しくかった…》

そう言い、アリシアのカプセルを撫でたプレシアは振り返った。

《フェイト…あなたは私の娘じゃない。ただの失敗作…だから、あなたはもういらないわ。何処へなりと消えなさい！》

「やめろ！やめてくれえッ！！」

ありつたけの声を絞り出す薫。

その横では、フェイトはなのはに支えられてようやく立っていた。

《いいこと教えてあげるわ、フェイト。あなたを作り出してからずっと…私はあなたが…》

「やめろって言うてんだろおツ!!」

《大嫌いだったのよ…!!》

…プレシアはそう、冷たく言い放った。

その瞬間、フェイトはバルディッシュを落とし、床に崩れ落ちてしまった。

「フェイトちゃん!」

「フェイト…」

なのはやユーノが必死で呼び掛けるが、フェイトの目は虚ろで、彼女からは生気が抜けていた。

(ちくしょう…!!)

薫も悔しさで俯いていた。

*

そしてロック対ディアズ。

「ぐ…おおツ…！」

なんとディアズは、ロツクのカルミから突出した刃に腹部を貫かれていた。

「バ…バカナ…！テメエのデバイスには…そんな機能はなかったはず…！」

「僕が何のためにプレシアに協力したのか忘れたのかい？ほんと単純だね、君は」

そう言い、不敵に笑ったロツクはディアズから刃を抜き、彼を蹴り飛ばした。

「ぐあッ…！ち…ちくしょ…う…！」

ディアズの傷口から大量の血が溢れ出る。

そんな彼の胸倉を掴み、ロツクは言い放った。

「さようなら…お調子者君」

そしてロツクは、腹部に大穴のあいたディアズを虚数空間へと突き落とした。

「フフフフフ…あつはははははは…！あ…つはははははははははは…！」

ロックはその場で狂ったように笑い続けた。

悲しみのフェイト（後書き）

今回の新キャラ、ディアズは見てわかるようにヤムチャ的ポジションです。

初期設定ではカルロという名前でしたが、カルミに似ていて紛らわしいので変更しました。

フェイトの決意、そして薫の覚悟（前書き）

久しぶりの更新です。

遅くなつてすいません。

フェイトの決意、そして薫の覚悟

薫とアルフは、抜け殻のようになってしまったフェイトを部屋に運んでいた。

二人は彼女をベッドに寝かせ、毛布をかけた。

「あの子達が心配だから、あたしもちよつと手伝ってくるね」

アルフが薫とフェイトにそう呼び掛ける。

あの子達とは、なのはやユーノである。

つい先程、庭園内で大量の傀儡兵が動き出したため、クロノと共に出動したのだ。

「…そうか、わかった。フェイトは俺が見とくから、行ってきてくれ」

コクンと頷いたアルフは、二人に背を向けて部屋から出ていった。

アルフが出ていってしばらく経ったが、部屋の中は相変わらず静まり返っている。

フェイトの目は先程から虚ろで、薫はそんな彼女を黙って見守っている。

そんな中、フェイトの唇が微かに動いたのを薫は見逃さなかった。

「……か……」

「……！……フェイト……？どうかしたのか！？」

「……母さんは……私のことを愛してなどいなかった……母さんが会いたかったのはアリシアで……私はただの失敗作……私……生まれすぎて……いけなかったのかな……？」

ついさっきプレシアから告げられた一言を思い出し、それを呟くフェイト。

「……いや、それは違うな」

その一言を否定し、薫はフェイトの手を握った。

「生まれてきちゃいけねえ命なんてねえよ。たとえ、フェイトがどんな生まれ方をして……誰も君のこと嫌いにならない。皆だつてそうだ」

するとフェイトはそのまま、モニターの方を向く。

モニターには、合流したアルフと話しているのが映っていた。

「アルフ……それにこの子……なんて名前だったっけ……」

なのはをじつと見つめながら、フェイトがベッドから起き上がった。

「ちゃんと……教えてくれたのに……」

「Jのk……ッー」

この子の名前は高町なのはだ。

薫はそう言おうとして、その口を嚙んだ。

あの白いバリアジャケットを纏った少女の名を伝えるのは自分ではない。

フェイト自らが、本当の自分を始めるために…自分で聞かなければいけないのだ。

「…じゃあ俺外に居るから…何かあったら呼んでくれよ」

薫はそう言い残し、部屋を後にした。

ピカア…

その時、ベッドの側に置いてあったバルディッシュが微かに光った。

それはかなりひび割れており、まるでフェイトの心を表してるかのようだ。

フェイトはベッドから出て、そんなバルディッシュを手にとる。

「バルディッシュ…私の…私達のすべては…まだ始まってもない…？」

フェイトがそう問い掛けた時、バルディッシュは斧へと姿を変えた。だがその姿は痛々しく、ギシギシと悲鳴をあげながらも動こうとする。

そして…

《Get Set》

主人に対し、その一言だけを発した。

フェイトはそんな傷だらけの斧を抱き締め、涙を流した。

「そうだよね…バルディッシュも…ずっと私の側に居てくれたんだもんね…」

彼女の頬を涙が伝う。

「お前も…このまま終わるのなんて嫌だよね…？」

《Yes Sir》

相変わらず一言だけだが、それがバルディッシュなりの気遣いだっただ。

しばらく黙り込んだフェイトは息を吸い込み、バルディッシュを構えた。

その表情は、遂に決意を固めたようだ。

「上手くできるかわからないけど…一緒に頑張ろう」

そして、みるみるうちにバルディッシュが修復されていく。

《Recovery complete!》

「私達のすべては…まだ始まってもない…」

同時にフェイトもバリアジャケットを装着する。

「だから、本当の自分を始めるために…今までの自分を…終わらせよう…！」

完全に復活した少女と斧は金色の光に包まれ、再び戦場に赴いた。

ガラッ！

薫が扉を開けた時には、既にフェイトの姿はなかった。

（フェイト…遂に決心したんだな…！）

フェイトの決意を悟った薫はフツと笑い、自らもアイファアを取り出した。

「アイファア、俺達も行くぞ!…親友を助けにな!」

《はい!マスター!》

途端にアイファアが輝き、薫はその相棒を構える。

「変身!セツトアップ!」

アイファアは銃へと姿を変え、薫もバリアジャケットを装着した。

「時の庭園へ!」

《了解!》

そしてフェイト達に続き、薫の姿も消えた。

*

「くッ…後からぞろぞろと!」

ユーノがバインドで敵の動きを止め、アルフやなのはがそれを撃破する。

だが数が多すぎるのだ。

そんな中、一体の傀儡兵がなのはに向けて斧を投げつけた。

「なのは!!」

ユーノが叫ぶが、彼は動けない上に、アルフは遠い場所にいる。

誰もなのはを助けられない。

そう、ただ一人を除いて…

《Thunder Rage》

その時、なのはに直撃するはずだった斧に雷撃が命中し、それを粉砕した。

「え…!?!」

なのはが思わず上を見上げると、そこには魔法陣を展開させ、その中心に立っているフェイトの姿があった。

もう、その表情に迷いは無い。

「サンダー…レイジッ!」

フェイトは自らの大技を放ち、辺り一帯の傀儡兵達を全て破壊したのだ。

「フェイトちゃん……」

そう呟くのはの前に、フェイトがやってきた。

「あ……」

なのは何か言おうとした時、背後の壁が音を立てて崩れ落ちた。

なんとそこには、先程とは比べ物にならない程の大きさの傀儡兵が一体、中型が五体もいたのだ。

しかも大型の肩には、あの男が立っていた。

「可哀相だけど……僕は君達を殺す」

ディアズを始末したロック・ブルが立っていた。

「フフフ…大丈夫だよ、みんな…痛みは一瞬だけだから…」

ロックは不敵に笑いながらカルミの刃を突出させ、四人に斬り掛かった。

「いいね…？いくよ！！」

ロックがカルミを振り上げた、その時だった。

「イレイザー・ボール!!」

上空から赤色の球体が、五つ降ってきた。

それらはすべてロックに向かって襲い掛かるが、彼は全て避け切った。

ドガアアアアン!!!

流れ弾は全て、それぞれの中型の傀儡兵五体に命中し、それらを爆散させた。

「ッ…誰だ!？」

ロックが声を荒げる。

「…俺だよ、ロック!!」

そこには、髪とバリアジャケットを風になびかせている薫の姿があった。

「薫…!!」

「薫さん!!」

なのはやユーノ、アルフが笑顔を浮かべる。

「薫…さん…？」

フェイトがぼそりと呟く。

自分のことを必死で守ろうとしてくれた恩人の名を確認するかのよう
うに。

「…久しぶりだね、薫」

ロックは一度カルミを下ろし、薫に顔を向ける。

「悪いけど帰ってくれないかな？僕は…」

「帰らねえ。俺はぜってえ帰らねえ！」

そう叫んだ薫は、アイファアの銃口をロックに向けた。

「…お前を止めるまではな…！」

するとロックはため息をつき、やがてニヤリと笑った。

「…そうかい。なら、もう僕は容赦しない」

カルミを構え直し、刃を薫に向ける。

「全力で君を殺す…！」

フェイトの決意、そして薫の覚悟（後書き）

突然ですが、ここで読者の皆様にお知らせがあります。

話の内容の都合により、A・S編は書けなくなってしまいました…
作者が考えているラストでは、どう頑張ってもA・S編に繋げるのは難しくなってしまうためです。

楽しみにしていただきつつ皆様のご期待を裏切ることになってしまい、本当にすいませんでした。

友情の証（前書き）

前回の更新が遅かったなので、今回は早めにしました。

友情の証

「…殺す、か…」

薫はロックの狂気を感じし、残念そうな表情を浮かべる。

そして、誰にも聴こえないように呟いた。

「ほんと…あいつそっくりだな…」

あいつ…それはかつての薫の親友、浅倉禄郎である。

「どうしたんだい薫、まさか怖じ気づいたとか言わないよね？」

「いや…怖えよ。お前と親友でいられなくなっちゃうのがな!!」

そう叫んだ薫はアイファアを連射する。

「はッ！」

ロックは薫の攻撃をすんなり避ける。

「薫、君って奴は本当にお人好しだね。そんなんじゃ、僕を止められないよ!!」

ロックはカルミを射撃モードに変え、薫に発砲した。

「うおおッ!!」

薫もそれを避け、アイファアをギュツと握り締めた。

「やるしかねえのか…！」

薫は、なのはとフェイトの方を向き、叫んだ。

「俺はロックと決着をつけるから、君達二人はあのでけえロボットを！今の君達なら…君達二人ならやれる…！」

なのはもフェイトの目を見つめ、頷いた。

「うん！薫さんの言う通りだよ！」

するとフェイトは嬉しそうに微笑んだ。

「よし、これであいつらが割ってくることはねえ。お前と真剣に向き合っぜ、ロック！」

薫がそう言うと同時に、アイファアが光輝いた。

そして…姿を変えた。

《ライフルモード！》

拳銃タイプのアイファアは、なんとライフルへと姿を変えた。

「あんな機能…見たことがない…」

少し驚くロツクだが、彼はニヤリと笑った。

「ようし…薫、覚悟しなよ…！」

ロツクもカルミを発砲し、薫に襲い掛かった。

「くッ、この…！」

薫も戦場を飛び回り、応戦する。

「ガウスシューター…！」

「イレイザーボール…！」

二人の攻撃がぶつかり合う。

だがロツクの方が魔力が若干上だった。

ガウスシューターがイレイザーボールを打ち消し、薫に迫る。

「でりゃあッ！」

パシッ！

薫はガウスシューターを腕で弾く。

「11のッ！」

薫は引き金を引くが、アイフアーは動かない。

（弾切れか…！）

バリアジャケットのポケットを弄る薫は、カートリッジを取り出す。

だがロツクはその隙を見逃さなかった。

ズキユン…！

チュン…！

「ぐあッ…！…！」

その一撃は、薫の左腕を貫いた。

そして手に持っていたカートリッジを取り落としてしまった。

「バロンクラッシュユ…！」

カルミから放たれた一撃が薫に直撃した。

「がああッ！！」

バロンクラッシュをもちに食らった薫は壁に叩きつけられ、付近の手すりから床へと落ちた。

「うつ…いつてえ…！」

薫が立ち上がるうとするが、もう遅い。

目の前にロックが着地したからだ。

「呆気ないね、薫。君を倒せば、僕はもっと強くなれる…その後管理局を壊滅させれば、父さんも母さんも…ケリーブルクの皆も喜んでくれる！！」

カルミから刃が突出し、鎌のような姿に変形する。

「ロ…ロック…！その力は…！」

「ははははは！もう君のデバイスとは、天と地ほどの差があるのさ！！」

ゆっくりと薫に迫るロック。

「俺を殺すなら殺せ…だがな、ロック！その力を無闇に使つと…お前は永遠に、力の呪縛から逃れられなくなるんだぞ！！」

額から血を流し、薫は叫ぶ。

「僕はそれを望んでいる…！」

狂った笑顔を浮かべたロックがカルミを振り上げた、その時だった。

「やめてよ…！」

なんと、ロックと薫の間に何者かが割って入ったのだ。

「…何の用だい？」

「アルフ…！？」

割り込んだのはアルフだった。

薫が驚き、ロックが嫌悪感を露わにする。

「お願いだから…薫を殺さないでよ…！」

アルフの瞳には涙が溜まっていた。

「あの子には…フェイトには薫が必要なんだよ！それに……薫は、フェイトの父親になってくれるかもしれない人なんだ…！」

それは、何度もフェイトを助けようと奔走する薫の姿を見てきたアルフだからこそ言える台詞だった。

《俺だつたら…実の子どもにそんなことできねえよ…!》

《フェイトだけは…守り抜いて…》

《やめろって言ってんだろおツ!》

「薫に何かしたら…あたしがアンタを許さないよ!」

ロツクを睨みつけるアルフ。

「ッ…!」

一瞬、フェイトを庇ってプレシアの攻撃を受けた薫の姿が、ロツクの脳裏をよぎり、彼の動きを止めた。

「…でりゃあああッ!」

バキッ!!

一瞬の隙をつき、薫はアルフの横を駆け抜け、ロツクの頬を右腕で思い切り殴った。

「がはッ…!?!」

薫が拳に魔力を込めたため、ロックは反対側の柱まで吹き飛んだ。
すぐさまが立ち上がろうとするロックだが…

シュルル…！

「…ッ！？」

赤い何かがロックの手足に巻きつく。

「バインド…！？」

赤のバインド…それはユーノとの特訓の末に、一人の男が習得した技。

「こんの…大馬鹿野郎があああッ…！」

薫はライフルモードのアイファアを片腕だけで支えようとするが、やはりぐらついて焦点が定まらない。

するとアルフがすぐさま駆け寄り、左腕でアイファアを、右腕で薫の腰を支えたのだ。

「アルフ…！」

彼女は何も言わず、コクンと頷いた。

「…ああ、サンキュー！」

そして薫は、バインドで固定したロックを見定める。

「お前を狂わす呪縛を、俺達が断ち切つてやる！それに…俺はもう親友を失いたくねえんだ！！」

《充電完了！いつでも発射できます！》

アイファアが輝く。

「今度一緒に…酒でも飲もうぜ…！バーニングソウル…」

カチッ！

「…ブラスタ…！！！」

ゴオオオオオオオ！！！！

アイファアの必殺技であり薫の奥義、バーニングソウル・ブラスタ
ーがロックに迫る。

「はッ…！」

ロックは思わず息を飲む。

そして…

ドガアアアアン…！！

爆風の中から、気絶したロックが落下する。

それを抱き止めたユーノが見たのは、薫の友情の証だった。

「カルミが…粉々だ！」

驚くユーノの手のひらには、カルミの残骸が残っていた。

こうして悲しき復讐鬼、ロック・ブルの野望は潰えた。

実際にはカルミが消耗していたのもあったのだが、ユーノは薫の友情と優しさを感じ取った。

友情の証（後書き）

ネーミングセンスがアレなのは突っ込まないでください（笑）

作者の脳内でのアイファアの声は、折笠富美子さんです。

プレミアの想いと薫の願い（前書き）

そついえば相棒劇場版？のDVDっていつ発売なんだろう？

プレシアの想いと薫の願い

薫はアルフに支えられ、ロックとユーノのところまでやってきた。

「ロック…」

変身の解けた彼は気を失っていた。

「薫さん、今の技格好良かったですよ！」

ユーノが嬉しそうな表情で薫の方を向く。

「ああ、サンキューな。それより、向こうはどうなった？」

薫は大型の傀儡兵がいた方に目をやる。

既に傀儡兵は、なのはとフェイトに倒された後だった。

「よかったなアルフ、フェイトはもう大丈夫だ」

薫がアルフの頭を撫でながら笑う。

「うん…ありがとうございます、薫」

アルフは薫に向かって微笑むと、フェイトのところへ飛んでいった。

「ありがとうございます薫さん、来てくれたおかげで助かりました」

ユーノが改めて、薫に礼を言う。

「ロボット五体にロックさん…こんなに手強い組み合わせはありませんからね」

「いや、俺は何もしてねえよ。ただ…」

そう言いかけて、ロックの方を向く薫。

(ロック…これがお前の末路なのか…?)

ロック・ブル…純粋な彼の人生は、一体どこで狂ってしまったのだろうか…?

「…いや、何でもねえ。ユーノ、悪いけどロックのこと頼めるか？」

「え…?ええ、構いませんけど…どうしたんですか？」

首を傾げるユーノを余所に、薫は上を見上げる。

その視線の先には、なのはとフェイト、アルフの姿があった。

「…プレシアに話をつけてくる」

それを聞いたユーノは驚いた。

「…でも、そんな身体で大丈夫なんですか!？」

そう、薫は先のロック戦で左腕を負傷している。

「いや、大丈夫だ。俺…プレシアのこと、ようやくわかったんだ。だから…頼むぜ、ユーノ！」

ユーノに手を振りながら背を向けた薫は、傀儡兵を次々と撃破しながら奥へと進んでいった。

*

時の庭園最深部。

プレシアは一人、九個のジュエルシードとアリシアのカプセルと向き合っていた。

「あと…もう少し…」

そんな時、プレシアの脳内に声が響いた。

《プレシア・テストロツサ、終わりですよ。 駆導炉もじき封印、あなたのもとには執務官が向かっています》

声の主はリンディだ。

次元震をおさえる為、自ら出動したのだ。

《忘却の都・アルハザード…かの地に眠る秘術…そんなものは、もうとっくの昔に失われているはずよ》

「違つわ…」

リンディの発言に呆れながら、プレシアはそう呟いた。

「アルハザードは今もある。失われた道も…次元の狭間に存在する」

《仮にその道があったとして、あなたはそこに行って何をする？》

「取り返すわ…私とアリシアの、過去と未来を…」

悲しそうにプレシアは呟く。

その表情は、前髪に隠れてはつきりと見えない。

「取り返すの…こんなはずじゃなかった、世界のすべてを…！」

ドガアアアアン！！

その時天井が爆発し、クロノが到着した。

「知らないはずがないだろう！どんな魔法を使っても、過去を取り戻すことなんかできやしない…！」

プレシアは黙ってクロノを睨みつける。

「クロノ君の言う通りだ！」

プレシアとクロノが声のした方を向くと、バリアジャケットをボロボロにした薫が走ってきていた。

「はあ…はあ…はあ…」

息を切らせた薫は、プレシアの正面で立ち止まる。

「あなた… 亀山薫ね？」

プレシアは薫の目を見つめ、そう問う。

「…ああ。あんたがプレシア・テストロッサだな？」

遂に二人は対面した。

「そうよ… 本当に、あなたには驚かされるわ…」

「…なにが？」

「色々。フェイトを庇って自分が魔力攻撃を受けたり、自分より強いロックからジュエルシードを奪ったり、あの数の傀儡兵を突破してここまで来たものね…」

思い出すように語るプレシア。

「今更ぐだぐだ言うつもりはねえ。単刀直入に訊く。あんたは… 本当に、もうフェイトを愛していないのか？」

薫の目はまっすぐプレシアを見つめている。

「…ええ、さつきも言ったでしょう？私はあの子が、大嫌いだった
…」

「嘘だな」

薫はその一言をプレシアに突きつけた。

「あなたは…本当はフェイトに、もっと甘えて欲しかったんじゃない
かったのか？」

「…ッ!?!?」「」

プレシアがビクッと反応し、クロノが驚く。

「亀山さん…どうということなんだ？」

クロノが薫に説明を求める。

「どうということも何も、親子なんてそんなもんだろ。子どもが親に
甘える…それが自然だ」

薫にはわかっていた。

自分がかつて特命係にいた頃、娘を殺した犯人の名前を何度も聞き
に来た老夫婦がいた。

もしかすると彼女も…プレシアも、その老夫婦と同じで本当はフェ
イトのことを愛していたのかもしれないと、薫は考えていたのだ。

「な…何を言っているの…?」

プレシアは若干動揺し、薫の方を見直す。

「言葉の通りだよ。だがフェイトはあんな性格だ。母親に心配かけまいと、今まであんに甘えなかった!」

その時、薫の後方にフェイトとアルフがやってきたが、クロノ以外それに気づいていなかった。

「あなたに…あなたに何がわかるの!!大切なアリシアを失ったこの悲しみ…あなたにはわからないわ!!」

プレシアは薫を睨みつけ、声を荒げる。

「確かに…子どもがいない俺にはわかんねえ!でもなプレシア…フェイトを“アリシアの妹”として育てることはできなかったのか?」

「…!!」

その時、プレシアは思い出した。

生前、アリシアが「妹が欲しい」と言っていたのを。

「それによ…フェイトはあんなのこと、これっぽっちも恨んじやいねえよ。それでも突き放すのか?あんな親思いのいい子を…」

「私は…」

プレシアが何か言いかけた時、薫の後ろの二人に気がついた。

「フェイト…何をしに来たの…？消えなさい」

ここで薫も振り返り、二人の存在を確認した。

「あなたに…言いたいことがあつて来ました」

フェイトの表情にもう迷いは無い。

堂々と母親にぶつかっていた。

「私は…ただの失敗作で…アリシアの偽物なのかもしれない…」

薫もアルフもクロノも、勿論プレシアも黙ってフェイトの話聞いていた。

「アリシアになれなくて…期待に込えられなくて…いなくなれって言うなら遠くに行きます。でも…生み出してもらってから、今までずっと…今もきつと、母さんに笑ってほしい。幸せになってほしいって気持ちだけは…本物です」

そう言いながら、フェイトはプレシアに手を差し出した。

「私の…フェイト・テストロッサの本当の気持ちです」

フェイトの本音を聞いた一同は沈黙していたが、やがてプレシアがその沈黙を破った。

「…ふ…くだらないわ…」

それを聞いたフェイトは何も言わない。

だが、この男は黙っていないかった。

「…まだ意地張ってんのかよ…フェイトもアリシアも、あんたにとつては娘だろ…」

そう呟き、薫はプレシアの胸倉を掴んだ。

「俺は…あの子達に笑っていてほしだけなんだよ!!」

カンッ!!

その時、プレシアが自身のデバイスを地面に叩きつけ、魔法陣を作り出した。

それと同時にジュエルシールドが輝き、次元震が発生した。

《このままでは崩れます!》

アイファーが叫ぶが、薫はプレシアの胸倉を掴んだままだ。

「早く離れなさい…!」

パシンッ!!

「ぐあぁッ!!」

プレシアに鞭で叩かれ、薫はフェイトのところまで吹き飛ばされた。

「薫！大丈夫かい？」

「私は行くわ…アリシアと一緒に…!!」

アルフが薫に手を貸し、彼が起き上がった時には既にプレシアの足場は崩れていた。

「母さん！アリシア！」

フェイトが駆け寄ろうとするが、プレシアとアリシアのカプセルは虚数空間へと吸い込まれていった。

「ま、待て!!」

「アリシア…母さん…!!」

手を伸ばすフェイトをアルフが止める。

（なんで…なんでそこまで…!!？）

薫も拳を握り締め、落ちていくプレシアを見ることしかできなかつた。

だが、一瞬薫とプレシアの目があった。

《フェイトを…お願い…》

薫の脳内にそう響いた時には、もうプレシアの姿は見えなくなっていた。

「プレシア…！」

ドガアアアン…！

再び天井が爆破され、なのはがやってきた。

「フェイトちゃん…！」

なのははフェイトの横に降り立つ。

そうしている間にも薫達の足場も崩れていく。

「まずいな…皆！早く脱出するぞ…！」

「はい！エイミィ、ルートを…！」

薫に頷いたクロノはエイミィに指示を飛ばす。

《了解！》

やがてその場から全員の姿が消え、時の庭園は完全に崩壊した。

プレシアの想いと薫の願い（後書き）

わかりにくいですが、クロノ君は亀山君に対して少し素直になっている設定です。

二人の帰る場所（前書き）

自分で言うのもアレですが、めっちゃディアズの扱い不遇ですねw

二人の帰る場所

アースラに帰還した局員達は治療を受けていた。

それは無論、薫やなのは達も例外ではない。

「いてて…！」

「動かないでくださいね」

医療担当の女性局員に左腕の治療を受けている薫のもとに、エイミイと頭に包帯を巻いたクロノがやってきた。

「クロノ君！フェイトちゃんは!？」

薫の後ろにいたなのはとユーノが二人に駆け寄る。

どうやらフェイトとアルフ、ロックの姿が見えないので困惑していたようだ。

「ああ。彼女達はこの事件の重要参考人だから隔離させてもらった」

「そんな…」

罪人扱いを受けているフェイトの身を案じるのは。

「特にロック二尉は、管理局の情報をプレシアに流したり…最後は

裏切っちゃったしねえ……」

エイミイが付け加える。

「でもよ……」

治療中の薫が口を開いた。

「ロックがああなっちまったのは……管理局のやり方に問題があったからじゃねえのか？」

彼は俯きながら、クロノとエイミイに語りかける。

「どづいつことですか？」

「あいつ……昔管理局に両親殺されてるだろ？しかも当の管理局上層部は、それを必死で隠蔽した。だから許せなかったんだぜ、あいつは。まあそれだけじゃないんだろっけどな」

背中では語る薫に、クロノとエイミイはすっかり圧倒されてしまっていた。

「はい、終わりましたよ！」

女性局員が薫にそう言う。

「こんな無茶しちゃ駄目ですよ！」

「はは、すみません……」

薫は苦笑いする。

「ところでさ…あいつは見つからないのか？」

「はい…出撃してからすぐに行方不明になった」

薫とクロノは突入部隊の指揮を執っていたディアズのことを言っている。

庭園も崩壊したので、死亡しているのは間違いない。

「そういえば艦長がロック二尉を取り調べた時に彼、「自分が殺した」って言っていましたよ」

手をあげたエイミーが思い出したように言う。

「ええ！嘘だろ！？」

「本人はデバイスで殺したと供述しているが、彼はデバイスを失っているし、衣類に血痕が飛び散った形跡もない」

「証拠不十分か…」

カルミを破壊した張本人である薫がため息をつく。

ディアズは謎の失踪扱いになりそうだ。

「だが、裏切り者とはいえ彼は元管理局のエースだ。これまでの功績と相殺して、解雇処分で済むだろう。確かに、当時の管理局は彼に酷い事をしてしまった」

「おつ、クロノ君。今日はえらく素直じゃねえか」

薫が軽く嫌みを言うが、クロノは気にしていないようだ。

「いえ…貴方のおかげだ、亀山さん。貴方のおかげで、僕は管理局という組織に疑問を持つことを覚えれたんだ」

すると薫は笑いながら、クロノの頭をわしゃわしゃと撫で回した。

「ははははは！言うようになったじゃねえか！」

やがてその手を止め、一つの疑問が浮かんだ。

「ロックはともかく、フェイトとアルフはどうなるんだ？あいつら二人はプレシアに利用されてただけだろ？」

フェイトとアルフの話題になり、なのはとユーノが再び心配そうな表情を浮かべた。

「とりあえず、ずっとこのままなんてことはありませんから」

エイミーが薫に笑いかける。

「そっか…そうだ、俺リンディさんに話が…！」

何かを思い出した薫は、その場から走り去っていった。

数時間後、リンデイが料理皿を乗せたカートを押しながら、一つの部屋の前までやってきた。

そう、そこはフェイトとアルフの部屋である。

シュン！

「お食事持ってきたわ」

リンデイが中の二人に声をかける。

「一緒にお話ししましょう？これからのこともありますし、ね？」

彼女は椅子に座り、フェイトとアルフの前に食事を乗せたプレートを置いた。

「どうぞ」

「あ…あのさ！」

その時、今まで黙っていたアルフが口を開いた。

「はい？」

「その…これから、あたし達どうなるの？あたしはともかく、フェイトは…」

フェイトは母親を助けられなかったことを悔やんでいるのか、先程から俯いている。

「そうね…もうすぐ裁判があります。それまでの間、保護責任者のもとでいい子にしていれば、何の心配もありません」

「その、保護責任者って…?」

恐る恐る質問するアルフ。

するとリンディはニコツと微笑んだ。

「アルフのご指名の方ですよ」

「ま…まさか…!」

「はい、亀山薫さんです!」

期待通りの返事を聞いたアルフはガッツポーズをとった。

「よっし!薫が責任者になってくれたあ!」

先程まで俯いていたフェイトも笑顔を浮かべている。

今まで自分を助けてくれていた恩人だとわかっていただけなのだ。

「あの…それは貴方が薫さんに頼んでくれたんですか?」

フェイトがリンディに尋ねる。

「いいえ、実は…」

*

数時間前、

「あ、リンディさん！」

リンディは廊下で、薫と出くわした。

「あら亀山さん。どうかしたのですか？」

「リンディさん、実はお話があるんすけど…今大丈夫ですか？」

「はい。立ち話も何なんで、私の部屋に来てください」

薫を自分の部屋に通し、リンディは緑茶を二つ用意した。

「…甘いスね、このお茶…」

それはそうだ。

角砂糖が二つも入っているのだ。

「お気に召しませんか？」

すると慌てた様子で薫は首を横に振った。

「い…いえいえ！外国では緑茶に砂糖入れるところもありますから！」

「湯飲み茶碗を温めてから、お茶よりも先にミルクを煎れるのがコツなんですよ」

「な…なるほど…」

薫がお茶を啜る。

(ぜってえ右京さんと仲良くなれるな、この人は…)

「ところで亀山さん、お話というのは？」

薫の考えを遮るようにリンディが話し掛けた。

「ああ、はい。実はスね…」

薫はしばらく黙り込み、やがて口を開いた。

「フェイトとアルフを、俺に引き取らせてくれませんか？」

「え…？」

薫の頼みに、思わず耳を疑うリンディ。

「ですから、俺がフェイトとアルフの保護者になりたいんです！美和子も…家内も二人を引き取りたいって言ってくれました！」

薫の脳内には、アルフの台詞が引っ掛かっていた。

《アンタがフェイトの親だったらよかったのに…》

《薫は…フェイトの父親になってくれるかもしれない人なんだ！》

「それに…こんなこと言うのも失礼なんすけど…管理局の人が引き取ったら、あの子達がこれから新たな戦いに巻き込まれそうに思えて仕方ないんです！」

「…！」

リンディは顔には出していないが、一瞬ギクツとした。

フェイトの魔力は高いので、アースラ部隊の戦力になってくれるよう頼むつもりだったのだ。

「…フェイトだってもう戦う理由も無いですし、何よりも俺は…彼女に普通の女の子として育ててほしいんです。プレシアにも頼まれたし…あの二人さえよければ！裁判が終わってからも俺にフェイトとアルフを任せてください！」

*

そして舞台は戻る。

「どつやら彼によると、あなた達の保護者に私は相応しくないようです」

「薫さんがそんなことを…」

人伝てとはいえ、フェイトとアルフは亀山薫という男の優しさを改めて感じ取った。

ビー！ビー！

その時、三人がいる部屋の呼び鈴が鳴った。

『あのお、今いいツスか？』

薫の声だ。

「ええ、どうぞ」

シュン！

「薫！本当にありがとうね！…！」

ガバツ！

「わッ！？」

扉が開いた瞬間、薫にアルフが抱きついた。

「こ、こらアルフ！離れる！」

「何言つてんの！これからあたし達の保護者になるんだから恥ずかしくない！」

薫の胸に頬擦りするアルフと、顔を少し赤らめながら抵抗する薫を見て、リンディとフェイトは久しぶりに声を出して笑った。

こうして、フェイトとアルフを薫が引き取ることが決定した。

だがこれで終わったわけではない。

そう、フェイトはまだなのはに「返事」ができていないのだから…

二人の帰る場所（後書き）

亀山君には美和子さんがいるのに……こうしてみると、アルフがヒロインみたいですね。

薫×美和子が好きな方、申し訳ありません！

苦悩（前書き）

亀山君が本編よりも冷静なのは、右京さんの影響です。

苦悩

「…ところでさフェイト、まだ彼女に返事してないよな？」

アルフを強引に引き離れた薫がフェイトに尋ねる。

その途端、フェイトが表情を暗くして俯いた。

「でも…私はあの子に、沢山ひどいことをした…だから、今更何て言っていていいか…わからないよ…」

フェイトの言っていることもわかる。

自分が危害を加えた人間と今更仲良くできないと思っているのだ。

「…なあフェイト、君は勘違いしてねえか？」

薫はフェイトの隣に座り込み、彼女の肩に手を置いた。

「…どんなにひでえことしても、その子が君に、「友達になりたい」って言ったんだろ？だったらそれでいいじゃねえか」

「でも…」

口ごもるフェイト。

そんな彼女に対し、薫は言い放った。

「人の善意を無視すると、一生後悔するぞ」

「え…」

「薫…」

思わずフェイトとアルフが薫の方を向く。

そして若干空気になりつつあるリンディは、黙って薫の話聞いていた。

「長い間、右京さんと一緒にいた俺だからわかるんだ。俺も昔、ちよっとひねくれててな…上司の右京さんが誉めてくれたのを、素直に礼を言うことができなかったんだ」

かつて薫と右京がある事件を担当した際、薫が懲戒処分ギリギリな無茶をしたことがあった。

その際、右京との間でこんなやり取りがあった。

『君のその無鉄砲さ、僕は嫌いではありませんよ』

『俺のこと馬鹿にしてんスか!?!』

『僕は誉めたつもりなんですがねえ…』

『ふん…!』

今の薫にはわかる。

杉下右京は、少し素直になれない人間なのだ。

「まあ…俺の場合は特殊だけだな。でもあの子は素直でとてもいい子だぜ」

そう、なのはは右京と違って素直な性格なので打ち解けやすい。

「あとのことを決めるのは君自身だぜ」

そう言った薫はドアを開け、部屋を後にした。

*

「はあ…やっぱり俺って話下手だなあ…」

扉を閉めてすぐ、ため息をつく薫。

「まあいいや。よし…!」

次に薫は、フェイト達の隣の部屋のベルを鳴らし、そこに入っていた。

「…何だ、僕を笑いにきたのかい…?」

その部屋のベッドに腰掛けている男がそう呟く。

「まあまあ、そう言うなよロック」

そう言った薫は、ズボンのポケットから缶ビールを二本取り出し、一つをロックの前に置いた。

「一旦地球に帰った時に買ったもんだ。ここの食堂の冷蔵庫でこっそり冷やしてたんだ、へへ。一緒に飲もうぜ！」

缶の蓋を開け、薫が飲み口に口をつける。

「…いただくよ」

少し躊躇していたロックだが、最終的に缶を手を取った。

「俺は管理局の人間じゃねえから、聴取なんてことはしねえ。ただゆっくり話したいんだ」

缶を机の上に置き、ロックと向き合う薫。

「お前の処分、解雇で済むって話だぜ。ディアズの件は証拠不十分で立件出来ないそうだ」

「え…」

思わず言葉を失うロック。

「…どういうことだい？まさか恩情をかけてくれたわけじゃないよ

ね…？」

「表向きは、これまでのお前の功績と相殺してって話だが…実際は組織のイメージダウンを恐れたんだと思っぜ」

薫の推測は正しかった。

ロツクを逮捕して処罰を与えると、報道局によって世界中に報道され、隠蔽したケリーブルク騒動の全貌が明らかになってしまつのを恐れた上層部の判断だった。

「ふん…どうせ自分達の保身のためだろう。相変わらず汚い連中だ」

ロツクがため息をつきながら缶ビールを啜る。

「それが組織つてもんだ。俺の世界の警察だってそうだけ」

右京と共に難事件へと立ち向かった薫は、警察組織の卑劣な悪事を今まで何度も見てきた。

勤務中に女を連れ込んだ交番勤務の警官、それを保身のために殺害した刑事課長。

酔っ払いを放置して死なせてしまった刑事、それを隠蔽しようとした警察署長。

「お前は晴れて自由の身になるんだ。だからさ、時空管理局の居ない世界で暮らすってのは？」

「そんな世界あるものか…！」

ロツクはそう吐き捨てる。

「あるって！地球だ地球！」

ロツクの背中を叩く薫。

「地球…だって…？」

「ああ。あそこには時空管理局なんていねえし、丁度いいんじゃないのか？」

だがロツクは首を横に振る。

「でも…仕事はどうするんだい？僕は無一文なんだよ…給料は殆ど、各世界の児童保護施設や老人ホームに寄付してきたし…」

「そっかあ…うちのボランティアは人手が足りてるし…」

ちなみに薫は有償スタッフである。

「ロツク、お前何か特技とかないのか？仕事に活かせるようなの」

「格闘技の大半は身につけたけど…ああ、そうだ」

何かを思い出したロツクは立ち上がり、ベッドの下に手を伸ばした。

そしてUSBメモリーを取り出し、薫に手渡した。

「プレシアと本音で話し合った際、彼女には悪いと思ったんだが盗聴していたんだ。フェイト達の裁判に役立つかもしれない」

「…ああ。サンキュー、ロック！」

受け取ったUSBメモリーをポケットに入れた薫。

「それはそうと薫、君はフェイトとアルフを引き取ることにしたんだね。ここまで聴こえてたよ」

「あ…ははは、うるさかったか？」

薫は苦笑いする。

「いいや、二人とも喜ぶよ。新しい家族を大事にね…」

そう言ったロックは缶ビールを一气飲みした。

「…そろそろ行った方がいいよ。長い間ここに居ると、君まで内通者だと思われるからね」

「…そっか、じゃあ行くわ」

薫は立ち上がり、ドアを開けた。

「仕事探すときは言えよ！できるだけ力になるからな！」

それだけ言い、薫はドアを閉めた。

「…ありがとう、薫…」

誰も居なくなつた部屋で、ロックはそう呟いた。

*

数日後、薫はサルウインの自宅に、なのはとユーノは高町家へ戻っていた。

なのはは普通に学校へ行つたが、薫は自宅で爆睡していた。

本来なら自宅にフェイトやアルフも居るはずなのだが、裁判の日程が明後日に決定したため、アースラで寝泊まりしていた。

トゥルルルル！

薫の携帯が鳴り響く。

「…はい…もしも…？」

寝ぼけた薫が電話に出る。

《時空管理局アースラ艦長、リンディです》

なんと電話の主はリンディだった。

「…ってリンディさん!？」

慌てて薫が飛び起きる。

《もしかして…お休み中でしたか？》

「え…い、いえいえ！それより何かあったんですか！？」

《実はフェイトさん、なのはさんに会う決心がなかなかつかないみたいなんです。ですから亀山さん、今日彼女と会っていただけませんか？》

「へ…？会つのはいいツスけど…具体的にどうすればいいんですか？」

困惑する薫。

《そうですね…気分転換に、何処かへ遊びに行かれてはいかがでしょうか？フェイトさんもリラックスできると思いますし》

「ああ、いいツスねそれ！じゃ今からそっちに行きますんで、失礼しますリンディさん！」

電話を切った薫はアイファアを握り締め、アースラへと転移していた。

苦悩（後書き）

次回は、東京巡りをする亀山君とフェイトの話になると思います。

フェイトの本心(前書き)

今回は相棒キャラを少し出します。

フェイトの本心

すぐさまアースラにやってきた薫はフェイトと対面した。

「まだ決心つかないか？」

「うん…ごめんなさい」

申し訳なさそうに俯くフェイト。

「いや謝んなくていいけどさ…そだフェイト、これから一緒に東京行かねえか？」

「…とう…きょう…？」

フェイトが首を傾げる。

「地球の街だ。今日くらいリラックスしようぜ。明日の出発前が最後のチャンスなんだからよ」

「……はい！」

しばらく考え込み、フェイトは頷いた。

「よし、じゃ早速行くか！」

そして、薫とフェイトはアースラから姿を消した。

*

転移した二人がやってきた場所：それはかつての薫の職場、警視庁の前だった。

幸い、誰にも見られていないようだ。

「あの…薫さん」

フェイトが薫の上着の裾を弱々しく引っ張る。

「お、どうした？」

「今からどこへ行くんですか？」

すると薫は少し笑い、フェイトと同じ目線までしゃがみ込んだ。

「これから決めようぜ。悩んでるときは、とにかく道をぶらぶら歩いてりゃ気が楽になるもんだ」

「…はい！」

そうして二人は歩き出した。

*

「…おい芹沢、まだ奴は現れねえのか？」

「まだみたいです…」

一方、捜査一課の伊丹と芹沢は車の中で張り込んでいた。

「今日こそとつ捕まえてやる！アパート学生殺害の証拠は掴んでんだよ！」

「先輩！あれ！」

その時、芹沢が前方を指差しながら声をあげた。

「出てきたのか！？」

「いえ、あれ亀山先輩じゃないですかね？」

パシンッ！

「そんなことで大声あげんじゃねえ馬鹿！あいつまだ日本に居たる！」

伊丹が芹沢の頭を叩く。

「そうじゃなくて女の子と一緒にじゃないですか！」

それを聞いた伊丹が薫の隣の少女を凝視する。

芹沢の言っている女の子とは、勿論フェイトのことだ。

「……おい芹沢、亀に娘なんていたか？」

「さあ、現地の子じゃないですか？にしても可愛い子ですね…あ、先輩。真面目に張り込みしないとどやされますよ」

パシンッ！

「うるせえ！元々はお前が言い出したことだろうが！」

常に頭を叩かれる芹沢と、少し怒る伊丹。

薫もフェイトもそんな二人に気づくことなく、その場から離れていった。

*

やがて薫とフェイトは、警視庁付近の公園へとやってきた。

薫はフェイトをベンチに座らせ、自分も隣に座った。

「どつだ？どつするか決めたか？」

フェイトの顔を覗き込む薫だが、彼女はまだ悩んでいるようだ。

「…よし、何か飲もうぜ！買ってこるから何がいい？」

するとフェイトは申し訳なさそうに俯いた。

「その…奢ってもらうのは、悪いです…」

「何言ってるんだよ。これから俺達家族になるんじゃないか。遠慮することないの！」

「…じゃあ、オレンジジュースで」

ぎこちない笑顔を浮かべたフェイトがそう言った。

「おう！買ってこつから、ちょっと待っててくれよ！」

薫はそう言つと、自販機を探すべく駆け出した。

薫がいなくなつて一分、フェイトは一人で考え込んでいた。

（私…本当に決断力無いなあ…あの子にもなんて言えばいいかわからないし…）

一人では埒があかない。

再び考え込もうとした時、フェイトの前に一つの人影が現れた。

「ちょっとよろしいですか？」

（薫さん…？）

ふと顔を上げたフェイトだが、そこにいたのは薫ではなかった。

そこにいたのは、眼鏡をかけ、英国紳士という言葉がぴったり当てはまるスーツを着た中年男性だった。

その男性はフェイトが悩んでいるのを察しており、気になった様子だ。

「あ…はい…えつと…」

「これは失礼。僕は杉下右京といいます。君がとても悩んでいるよ
うなので、無礼を承知で声をかけさせていただきました」

それを聞き、フェイトは一瞬ビクツとした。

自分の考えていたことが、顔に出ているとは思っていなかったのだ。

「僕で良かったら、君のお悩みを聞きますよ。細かい事が気になる
のが、僕の悪い癖でしてねえ…」

素性が知れないが、悪い人間ではない。

それがフェイトの第一印象だった。

（…悩んでもしょうがないし…この人に話だけでも聞いてもらおう
！）

決めたフェイトは、魔法や異世界のことは伏せて自分の悩みを話
した。

*

「…なるほど、そうでしたか」

「なので、私…その子になんて言ったらいいのか…今まで沢山ひどいことしてきたし…今さら友達なんて…」

俯くフェイトに対し、右京は言った。

「あなたはそれでいいんですか？」

「え？」

思わずフェイトは右京の顔を見る。

「ほんの少し…手を伸ばせば届く幸せを、あなたは自然と拒否しようとしている。僕にはそう見えますねえ」

右京の指摘は当たっていた。

なのでフェイトは若干うろたえた。

「幸せを…拒否？」

「ええ。他人に対して罪悪感を抱くのはとても大切なことです。ですが抱き過ぎると、かえって悪い方向へ進んでいくこともあるんですよ。その子のためにも、ここは自分に素直になってみてはどうで

しょう」

そう言った右京は踵を返し、フェイトに背を向けた。

「ま、待って！」

慌ててフェイトが右京を呼び止める。

「どうして…貴方はどうして私の相談に乗ってくれたんですか…！
？」

すると右京は空を見上げ、口を開いた。

「昔、僕には相棒がいました。その相棒は子どもが大好きな、とても熱心で優しい人間だったんですよ。彼の影響でしようかねえ」

そうして、右京はその場を立ち去っていった。

(幸せを拒否、か…)

右京の言葉を思い出すフェイト。

『人の善意を無視すると、一生後悔するぞ』

以前言われた薫の言葉も、同時に思い出す。

「……………」

「フェイト〜！」

その時、缶を二つ持った薫が走って戻ってきた。

「悪い悪い。昔はそこに自販機あったんだけどよ、何故か撤去されててな。コンビニまで買いに行ったら遅くなっちまった」

「薫さん…私、決めました」

フェイトは立ち上がり、薫の目を見つめた。

「私はあの子と友達になりたい…だから、明日あの子に会います！」

「…そっか。よく決心したな！」

フェイトの決意を聞いた薫は笑顔を浮かべ、缶を一つ渡した。

「ありがとうございます！」

「でもよく決心したな。偉いぜ！」

感心する薫。

「うん。実はさっき、相談に乗ってくれた男の人がいて…」

「そっかあ。でも決めたのは君だけフェイト！」

フェイトは笑顔を浮かべ、缶の蓋を開けた。

（誰か知らないけど、その人には感謝しねえといけねえな！）

フェイトの決意のきっかけになった人物が、かつての相棒である右京だということに薫が気付くのは今から一年後のことだった。

フェイトの本心（後書き）

右京さんと亀山さんが対面しないので、お怒りの方もいらっしやる
とは思いますが、どうかご容赦ください。

名前を呼んで（前書き）

今回で無印編最終回です。

ちなみにサブタイと内容はあまり関係ありません。

名前を呼んで

翌朝、アースラで一泊した薫は、休憩室で美和子に電話をかけた。
た。

「…美和子か？俺だけど…」

《今日出発なんだよね、薫ちゃん。いつくらいに帰ってこれそう？》

「裁判次第だな。まあ、こっちにはロックにもらった証拠があるから、すぐに判決出ると思うぜ。そろそろ出発だから切るわ、じゃ！」

プチッ！

「はあ…」

薫がため息をつく。

クロノやリンディから聞いた話によると、管理局の裁判は日本よりも短いらしい。

「薫、何してんのさ？」

後ろを振り返ると、アルフが立っていた。

「ああ、アルフか。ちょっと美和子に電話をな」

「そろそろ地球に転移するからさ！行こうよ！」

そう言ったアルフは薫の手をとって走り出した。

「お、おいアルフ！」

慌ててアルフを呼び止めた薫は、彼女から手を離した。

「前から言おうと思ってたけどよ…お前、俺に媚びなくていいんだぜ？」

「…え？どういうこと？」

首を傾げるアルフ。

「俺はフェイトのことを本当に大事に思ってる。だから、アルフが俺に媚びなくても、フェイトもお前も大事にすっからよ！」

するとアルフは俯き、首を横に振った。

「あはははは！違うよ、薫。別にあたしはアンタに媚びてるわけじゃない。今では…薫のことも、フェイトと同じくらい大好きだからさー！」

少し頬を赤らめたアルフがニコツと笑う。

「お…おう。ありがとな…でもよ、アルフ…一緒に暮らすよつになつたら、あんまそれ言わないでくれよ？」

「どっして？」

すると薫は苦笑いし、ボソツと呟いた。

「…美和子に殺されるからな…」

「二人とも！ 転移の準備ができたから、早くこっちへ！」

用意を済ませたクロノが、薫とアルフを呼びにきた。

「おう、今行く！」

*

数分後、地球の海鳴公園に一同は転移した。

「じゃあロツク元二尉、これでお別れだ」

ロツクは本日付けで釈放である。

「…ふん。クロノ執務官、君も管理局のやり方には気をつけることだね」

クロノに警告したロツクは、フェイトとアルフ、薫を振り返った。

「薫…フェイト…アルフ…今までごめん！」

なんとロツクが三人に頭を下げたのだ。

薫もフェイトもアルフも、キョトンとする。

「いや、許してもらおうなんて思ってない。ただ君達に謝りたかったんだ。僕は過去に囚われすぎて、君達を傷つけてしまった。なのはちゃんやユーノ君にも、ごめんって伝えてほしい」

そう言っって頭を下げたロックは、踵を返して歩き出した。

「待てロック！途中まで送るぜ！」

走り出す薫。

「フェイト、俺が居なくても大丈夫だろ？あの子に…ちゃんとやりたいこと言っただぞ！」

フェイト達に手を振りながら、薫はロックに付き添う形で海鳴公園を後にした。

*

「薫、どうして僕についてきたの？フェイトを見守ってやらなくていいのかい？」

「あいつなら大丈夫だ。むしろ無一文でふらふらするお前の方が心配だよ」

朝の東京の街を、並んで歩く薫とロック。

「本当に何から何まですまないね。とりあえず、求人募集してるところを探すことにするよ」

「ああ、そつだ。これ」

ポケットを弄っていた薫が封筒を取り出し、ロックに手渡した。

「俺が今回の事件で働いた分の謝礼金の一部だ。まあ十万しかねえけどよ、それで仕事見つかるまで頑張ってくれ」

「いや、これは受け取れないよ……」

封筒を突き返すロックだが、薫の姿勢は変わらない。

「いいかロック、これはお前を“撃墜”した分だ。でもお前はこうしてピンピンしてる。厳密に言えば撃墜できてねえ。だからこれはお前の取り分だ。受け取んねえとぶん殴るぞ？」

そう言った薫はロックの胸ポケットに無理矢理封筒をねじ込んだ。

「…所々ワケわからないけど…この借りは必ず返すよ」

ロックは薫から目を逸らし、そう呟く。

「うっせえ、何の借りだよ」

そんなロックを薫は笑い飛ばす。

「まあ何にせよ、困ったらいつでも俺を頼れ。なんたって俺達は親

友だからな！」

笑顔を浮かべた薫は、ロツクに右手を差し出した。

「…そうだね。ありがとう、親友！」

そうして二人は握手を交わした。

初対面の際にも握手した二人だが、親友としての握手は今回が初めてであった。

*

「チクショー、遅くなっちまった…」

ロツクを市街地まで送った薫は、急いで海鳴公園へと向かっていた。もしかするとクロノ達は自分を置いて行ってしまったかもしれない。変身し、飛行魔法を使おうかと思ったが、人通りが増えてきたので断念した。

走ること10分、ようやく薫は海鳴公園へと到着した。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

公園のベンチにはクロノとアルフ、フェレット状態のユーノがいた。

何故かアルフは涙ぐんでいる。

「アンタんとこのさ…なのはは…本当にいい子だね…」

「ぜえ…友達になれたみたいだな」

薫がクロノに確認する。

「…はい」

それだけ返事すると、クロノは立ち上がってなのはとフェイトに近づいた。

「時間だ」

クロノの言葉に少し慌てた様子のなのはは、自分の髪を縛っているリボンを二つ外し、フェイトに手渡した。

「これぐらいしか…あげれるものないけど…」

するとフェイトも、自ら黒いリボンを外してなのはに渡した。

「ありがとう、なのは…」

(ようやく名前呼べたか…よかったな、フェイト！)

心の中でフェイトの成長を喜ぶ薫。

アルフがユーノをなのはの肩に乗せ、薫の横に立つ。

「ありがとう！アルフさんもお元気で！」

「ああ、ありがとうね！なのは、ユーノ！」

そしてクロノ、薫、フェイト、アルフの足下に魔法陣が現れた。

「なのはちゃん！必ず、フェイトと遊びに行くからよ！待っていてくれよな！」

「はい！薫さん！」

そうして、四人の姿が消えていく。

遂に別れのときがきたのだ。

なのはは涙を浮かべながらも、笑顔で四人の姿が消えるまで手を振り続けた。

（さよなら…フェイトちゃん！）

こうしてP・T事件は終わりを迎えた。

だがフェイトとアルフ、薫の新たな生活は始まったばかりだった。

名前を呼んで（後書き）

なのはとフェイトの感動シーンがあまり無かったのは、亀山君が居ても原作と殆ど変わらないからです。

なのでロックとの別れのシーンにしました。

ここまで読んでくださった読者の皆様、本当にありがとうございました！

次回から番外編に入りますんで、これからもよろしく願います！

番外編・少女と刑事（前書き）

今回の主人公は亀山君ではありません。

番外編・少女と刑事

某日の朝、一台の黒い車が海鳴市の住宅街を走っていた。

運転手は男性で、スーツを着ているがネクタイはしめていない。

やがて車は一軒の家の前に停車した。

その家の表札には「八神」とある。

「はやてちゃん。迎えに来たよ」

車から降りたその男は、インターホン越しに第一声を放った。

すると玄関のドアが開き、中から車椅子に座った少女が出てきた。

「もう、遅いで神戸さん！」

ここまで読んだ方ならお気づきだろう。

少女の名は八神はやて、男の方は神戸尊である。

*

車に乗った二人はある場所へと向かっていた。

「女の子を待たせるやなんて、神戸さんも罪な男やなあ」

助手席のはやてが悪戯っぽく笑う。

「ごめんごめん。検査終わったらお昼ご馳走するからさ、許してよ？」

尊も慣れた様子ではやてを誘う。

「ありがとう！でもごめんな神戸さん。非番の日にも病院付き合ってもらって…」

若干シユンとするはやてだが、尊は彼女に笑顔を向けた。

「何言ってるの。僕ははやてちゃんの力になりたいだけだよ。おっと、ここだな」

車は目的地である海鳴大学病院の駐車場へと滑り込み、入口に一番近いスペースで停車した。

「よし。車椅子を降ろすから、しばらく待ってて」

「はいー！」

尊は慣れた手つきで車椅子を準備し、はやてを抱えてそれに乗せた。

「それじゃ行きますか」

「うん！」

数十分後、待合室にて尊は朝刊を読みながら、検査室に入ったはやてを待っていた。

（あんなにいい子が、脚の病と闘っているのか…）

そもそも何故はやてと尊が出会ったのか。

それは数ヶ月前に遡る。

*

かつて尊は警察庁警備部に所属しており、階級は警視だった。

そんな彼は現在、杉下右京を探るべく特命係に潜入している。

初めて右京と対面し、共に事件を解決した後の帰り道でのことだった。

「まったく…杉下警部はわからない人だな…」

夜道で車を走らせながら、一人愚痴をこぼす尊。

「置いてけぼりにされるわ、何か言おうとすれば怒られるわ…ついでけないよ」「

だがそんな時、車のライトに何かが照らされた。

「!」

キーーーーッ!!

尊が慌てて急ブレーキを踏む。

幸い衝突は免れた。

(車椅子…しかも女の子!?)

尊は車から降り、少女に駆け寄った。

「大丈夫!?君、怪我はない!?!」

すると、その少女は冷や汗を流しながら尊の方を向いた。

「あ…は、はい。ごめんなさい…」

京都弁のような口調のその少女は、尊に頭を下げた。

「いや…それよりも、君は夜道に何してたの?ご両親は?」

すると少女は俯き、重々しく口を開いた。

「…私、両親おらんです…今は生活保護受けながら暮らしてます

…」

「…！」

しまった、と尊は思った。

「…ごめん…とにかく送るよ。君の家はどこ？」

「…あ、はい…」

*

数十分後、尊ははやてを無事送り届けた。

「おっちゃん、ほんまにありがとう！」

「お兄さん！それと、散歩でも夜はあまり出歩かないこと！」

おっちゃん呼ばわりされたことに少し腹を立てた尊だが、はやての笑顔を見ているうちにどうでもよくなってしまうた。

「あは、ごめんごめん！お兄さんのお名前はなんていうん？」

「僕は神戸尊。君は？」

「私は八神はやて。せや神戸さん、よかったらお茶でも飲みます？」

「いや、そ…」

尊は一瞬断るうかと思ったが、はやての家庭事情を思い出した。いくら独りの時間が長くても、やはり寂しいのだ。

「…せっかくだから、お言葉に甘えようかな」

「はい！」

こうして尊とはやては出会い、交流を深めた。

出会って数ヶ月…今では親子、いや兄妹のような関係になりつつあるのだ。

*

「神戸さーん！はやてちゃんの検査終わりましたよー！」

検査室の入口から、一人の女医が顔を出し、尊を呼んでいる。

「あつ、はい！」

尊は朝刊をたたみ、マガジンラックに置くと検査室へと入っていった。

「えっ、本当ですか石田先生!？」

「はい。はやてちゃん、段々良くなってきていますよ。やはり神戸さんに会えたのが大きかったんでしょうね」

石田と呼ばれた女医が笑顔でそう言う。

「そらそつやよ。神戸さんに会われへんかったら、リハビリ頑張ろうって気になられへんかったのに…」

笑顔を浮かべるはやて。

「はやてちゃん。先生、神戸さんとお話があるから外で待っててくれるかな？」

「はい！」

石田がはやてを外に出し、話し相手を尊だけにする。

「神戸さん、病気は身体的なことだけでは治らないこともあります。特にはやてちゃんのケースは、神戸さんという精神的な支えができたからとも思えます」

「は、はあ……」

すると石田は尊の目を見つめ、口を開いた。

「神戸さん。はやてちゃんは回復に向かっています。これからも、はやてちゃんを支えてくださいね！」

「…はい！」

尊もコクンと頷く。

「石田先生、これからはやてちゃんとランチなんで失礼します。ありがとうございます」

石田に会釈した尊は検査室から出て行った。

*

車に乗った二人は、海鳴大学病院を後にした。

「神戸さん、どこに連れてってくれるのん？」

助手席のはやてが尋ねる。

「翠屋っていう喫茶店さ。ケーキやナポリタンが美味しいんだよ」

「ほんまに？楽しみやわ〜！」

尊とはやての日常はまだまだ続く。

番外編・少女と刑事（後書き）

今回の主役は亀山君の後任、神戸君でしたが、口調がちょっと変か
もしれません。

ちなみにはやての脚の病気は、闇の書とは一切関係ありません。

番外編・彼のその後（前書き）

今回は、多くの方が気になった（？）（？）であろう、あの男の行方です。

番外編・彼のその後

P・T事件から二週間後、ある休日の昼間だった。

「はあ…中々見つからないな…」

一人の男が海鳴市の市街地をふらふら歩いている。

「…ま、こんな経歴不明の男なんて誰も雇いたがらないよ。管理局なんて秘密組織に勤めてたから…」

そう、彼はロック・ブル。

元管理局のエリートである。

「薫からもらった生活費も底を尽きかけてるし…また道路工事で食いつなぐか…」

そう決めたロックは休憩するため、近くにあったファミレスに入った。

*

「ドリンクバーお一つですね！グラスはあちらにごときますー！」

「あ、はい」

ロックは席を立ち、カップにコーヒーを注ぐ。

(このままじゃ駄目だ…)

そして砂糖を二本手にとり、席へ戻ろうとした時だった。

「オラあ！！全員大人しくしやがれ！！」

突如店内に怒声が響き、客の悲鳴が聞こえる。

なんと覆面を被った男が数人現れ、ファミレスに立てこもり始めたのだ。

(まずい！)

すぐさまロックはカップを放置し、トイレに駆け込んで身を隠した。

幸い、トイレはドリンクバーコーナーのすぐ横にあったので、犯人達に見られずに済んだ。

「なんだよあいつら…」

トイレには窓があるが、通気用なので人は通れない。

しかもロックは携帯を持っていないので、外部と連絡が取れないのだ。

「こんな時、薰ならこの状況を打破するだろうね……よし」

覚悟を決めたロックは、手に持っていた砂糖をポケットに忍ばせ、忍び足で店内を覗きに向かった。

（人数は…いち…に…三人か…）

犯人の人数を確認し、次に彼らの手元を見た。

（厄介だなあ、あいつら銃持つてるよ…人質の人数はつと…）

人質は一ヶ所に集められている。

「…!!」

ロックが見たのは、犯人を威嚇する金髪の少女と、その隣で目に涙を浮かべる大人しそうな少女だった。

どうやら人質になってしまったようだ。

（年はなのはちゃんやフェイトと同じくらいか…あんな小さな子が……ッ!）

ロックの脳裏に、かつてなのはとフェイトを本気で殺そうとした自分の姿がよぎった。

（…僕は最低だ。あいつらと何ら変わらないじゃないか…!）

そんな時、犯人の一人がロックにとって最悪の一言を放った。

「おい町田、トイレ見てきたか？」

「いや、まだまだよ吉井。見てくるわ」

（嘘だろ…！？）

これを聞いたロツクは心臓がでんぐり返るくらい驚いた。

慌ててロツクはトイレに引き返し、個室で息を殺した。

そうしている間にも、町田と呼ばれた犯人がトイレに足を踏み入れた。

「…ふんッ！」

「ぐッ…！？」

個室から飛び出したロツクは町田の口を塞ぎ、鳩尾に拳を叩き込んだ。

「…ぐッ」

町田は気絶し、その場に倒れ込んだ。

そのまま彼の覆面を剥ぎ取り、ロツク自らがそれを被った。

町田になりすまし、近づくつもりなのだ。

*

「おい、誰かいたのか？」

吉井と呼ばれた男が尋ねる。

それに対し、ロックは黙って首を横に振った。

服装が似ていたので、吉井達はロックに気づいていないようだ。

（あの男の銃は偽物だった。残りの二人もそうだろう……ん？）

外を見ると既にパトカーが何台も駆けつけていた。

「チツ、警察か……」

《犯人！今すぐ出てこい！》

外にいる刑事が呼び掛ける。

「うるせー！逃走用の車よこせ！！」

犯人の一人が窓を割り、そう叫んだ時だった。

（今だ！）

タイミングを見計らい、ロックが窓を割った犯人の首に手刀を叩きつけた。

「うぐおあぁッ！？」

彼は悲鳴をあげ、気絶した。

「なッ！？てめえ！！！」

吉井が振り向き、ロックに拳を飛ばす。

「はッ！」

それをかわしたロックは、被っていた覆面を脱ぎ捨てた。

「やっぱ町田じゃねえな！！！」

バキッ！！

ロックの頬に吉井の右ストレートが炸裂する。

「ぎゃッ！！！」

そのままロックは倒れ込んだが、局員時代に受けていた訓練のおかげですぐに態勢を立て直した。

「へへへ…お前中々やるじゃねえか！！！」

吉井はモデルガンを捨てて拳を握り締め、ボクシングの構えをとった。

「でもよ…元自衛隊の俺に勝てるもんか！！！」

ロックも吉井を睨みつけ、言い放った。

「…試してみるかい？僕だって元管理局員だ！」

そう言った直後、吉井の拳が飛んできたが、ロックはそれを見逃さなかった。

軽々とその拳を避け、先程ポケットに忍ばせておいた砂糖の封を開け、中身を吉井の顔面に叩きつけた。

「がああッ！？目が…！」

目潰しの砂糖を食らった吉井は目を押さえ、のた打ちまわった。

「今だ！みんな早く逃げて…！」

人質達に叫ぶロック。

すると彼らは一斉に出口へ走り出した。

「君達、立てるかい！？」

ロックは先程の少女二人に駆け寄る。

「そ…その…腰が…」

大人しそうな少女が、震えながらそう答えた。

二人とも腰を抜かしてしまったらしい。

「危ない！後ろ！！」

金髪の少女が声をあげる。

なんと吉井がふらつきながらも立ち上がり、ナイフを片手に持っていた。

「てめえらぶっ殺してやらあああー！！」

ナイフを振り下ろす吉井だが…

ガシッ！

「ぐッ…！！」

「「ええッ！？」」

二人の少女が目を見開く。

なんとロツクが素手でナイフを受け止めていたのだ。

「ぐッ！ぼ…僕は…」

当然ロツクの右手からは、血がドクドクと溢れ出てくる。

だが今の彼は薫に影響されたのか、半ば意地になっていた。

「僕は…お前達なんかとは違っただあぁッ!」

バキッ!!

ナイフを押さえている右手に代わり、左腕で吉井の顔面を思い切り殴った。

そう、ロックは両利きだったのだ。

殴られた吉井はよろけ、テーブルの角に後頭部をぶつけて気絶した。

こうしてファミレス立てこもり事件は解決し、犯人は全員逮捕された。

吉井達は銀行強盗の犯人であり、警察に追われていたのだ。

ロックがファミレスから出た時、人質だった人間や警官、野次馬が彼に拍手や歓声を浴びせた。

こういうのも悪くない…ロックはそう思っていた。

*

「広い家だなあ…」

その数日後、ロックは月村邸に呼び出された。

そう、彼が助けた少女はアリサ・バニングスと月村すすかだったのだ。

右手には包帯が巻かれており、事件の痛々しさを物語っている。

「失礼します」

そう言い、ロックは応接間に入った。

部屋には既に二人の人間がおり、一人はすすかだった。

「お兄さん、こないだはありがとうございました!」

すすかが第一声を放つ。

すると隣の若い女性も口を開いた。

「先日は妹を助けていただき、ありがとうございました。私はこの子の姉の忍といます」

「忍さん、ですか。自分はロック・ブルといます。いえ、僕も無我夢中だったんで…」

苦笑いするロック。

「失礼ですがロックさん、定職に就かれていらっしやらないとか？」

「え…ええ。お恥ずかしい話ですが…その通りです」

すると忍がある提案を申し出た。

「もしよろしかったら、うちで働いてくださいませんか？」

これにはロックが驚いた。

「え！？ど…どういうことですか？」

「実はこの家はメイドが多いので、男手があまり無いんです。貴方のようなお強い方がいてくだされば、私も心強いです」

ロックにとっては嬉しい申し出だ。

「は、はい！ありがとうございます！よろしく願いします！」

こうしてロックは月村邸で用心棒として働くことになった。

この数日後、遊びにきたアリサからは感謝され、なのはからは驚かれるのだが、それはまた別の話。

番外編・彼のその後（後書き）

本来、ロックはプレシアの身代わりになって虚数空間に落ちて死亡する予定でしたが、書いてるうちに愛着が湧いてきて現在に至ります。

ちなみに作者の脳内でのロックの声は、下野紘さんです。

番外編・帰国子女の転校生（前書き）

今回の相棒成分はかなり低いです。

番外編・帰国子女の転校生

P・T事件から三週間後の朝、

「おはよう、アリサちゃん！すずかちゃん！」

「あらなのは、おはよう！」

「おはよう、なのはちゃん！」

ここ私立聖祥大附属小学校にて、いつもの仲良し三人組が揃った。

「そういえば、今日の体育ドッジボールだって！」

「よかったねすずかちゃん、腕の見せどころだね！」

他愛のない話で盛り上がっている最中、教室のドアが開いて担任教師が入ってきた。

「はい、皆さん席について！」

生徒達が全員着席したのを見計らい、担任が口を開いた。

「今日は皆さんに転校生を紹介します！」

その途端、生徒達がどよめき始めた。

「なのは、転校生だって！」

「うん、男の子かな？女の子かな？」

「静かに。さ、入ってきてください！」

担任がそう言った時、ドアが開いて一人の少女が入ってきた。

「うわぁ、可愛い……」

一人の生徒がそう呟く。

そしてその少女は担任の横に立った。

「では、自己紹介をしてください」

するとその少女は少し息を吸い、口を開いた。

「あ、あたしは真田……真田ヴィータです。よろしく……」

少女は自らを真田ヴィータと名乗った。

「はい、ありがとうございます。真田さんは、オーストリアからの帰国子女です。皆さん仲良くね！」

「「はい……」」

*

次の休み時間、ヴィータは大勢の生徒達に囲まれ、質問攻めにされていた。

「ねえねえ、真田さんはどんな有名人が好きなの？」

「えっと…アーノルド・シュワルツェネッガー…だよ」

なんともゴツイ趣味である。

質問には答えているが、明らかに困っている様子だ。

「ちょっと、困ってるじゃない！質問はここまで！」

アリサが助け舟を出し、生徒達が離れていく。

ヴィータは安堵のため息をもらした。

「大丈夫？」

「あ…ああ。ありがとう…」

素直にアリサに礼を言うヴィータ。

「あたし、アリサ・バニングス。よろしく」

アリサに続き、なのはとすすかもやってきた。

「私は月村すずか。すずかって呼んでね」

「高町なのはだよ。よろしくねヴィータちゃん！」

ヴィータも三人の方を向いた。

「アリサ・バニングスと、月村すずかと…えーと…高町なんか？」

なんとなのはだけ名前を覚えられていなかった。

「なッ…！」

三人、特になのはは啞然とした。

「なのはだっば〜！な・の・は！」

なのははそう伝えるが、ヴィータは舌打ちした。

「チッ、うっせーな！オメーの名前言いにくいんだよ！」

「やめなさいよ二人とも！」

アリサが慌てて止めに入る。

とりあえずヴィータは大人しくなったものの、授業中に時々なのはを睨みつけていた。

*

放課後、アリサとすずかはピアノの稽古のため先に帰ってしまった。

現在は、なのはとヴィータが並んで下校している。

「あの…ヴィータ、ちゃん？」

「…あん？」

ヴィータは無愛想な返事をする。

「その…私はヴィータちゃんとお話したいだけなんだけど…」

「こっちは話すことなんかねーよ！」

途端にしょんぼりするなのは。

「あたしの家、こっちだから」

そんななのはを余所に、ヴィータは角を曲がって走り去ってしまった。

「あっ…」

なのはが呼び止めようとしたが、ヴィータの姿はもうそこにはなかった。

*

「はあ…」

一人になり、ヴィータはため息をついた。

「あたしって…友達作るの上手くねーな。自分が嫌になるぜ…」

ボソツと呟き、俯いて歩いている時だった。

「君！前見て！」

何処からか声が聞こえ、ヴィータが顔をあげると目の前には電柱があった。

「…！」

ヴィータはギョツとし、足を止めた。

「危ないじゃないか。駄目だよ、ちゃんと前見て歩かないと」

買い物袋を下げた一人の男が、そう言いながら駆け寄ってきた。

「誰だよオッサン？」

「…ところで君、今友達がどうか言ってたけど…何かあったのかい？」

その男はしゃがみ込み、ヴィータと同じ目線になった。

「うるせー！オッサンには関係ないだろ！」

「オッサンでも何でもいいから!…僕に話してみなよ」

*

二人は路地を並んで歩きながら言葉を交わしていた。

「…そっかあ。つつい冷たくなってしまっんだね…」

「うん。ていうか何で、オッサンはあたしの話聞いてくれんだ?」

するとその男はしばらく黙り込み、やがて口を開いた。

「…僕は今まで、君以上にひねくれててね…友達も居なかったんだよ。でもね、ある男に出会ったんだ。彼は、僕が何者かを知っても普通に接してくれたし、どんなにひどいことをしても…僕のことを親友って言ってくれたんだ」

「何が言いてえんだ?」

首を傾げるヴィータ。

「まあ要約すると…友達や親友っていうのは、作るものじゃない。自然とそうなっているものなんだ。ごめんね、差し出がましいことして」

そう言った男は、軽くヴィータに手を振って去ろうとした。

「ま、待てよオッサン!オッサン…誰なんだよ!?!」

ヴィータがそう問うと、男は振り返った。

「僕はロック・ブル。しがない用心棒さ」

そう言い、ロックは立ち去っていった。

*

翌日、

「おい、高町なんか!」

登校して早々、ヴィータは教室にいたなのはに話し掛けた。

「だ〜か〜ら〜!なのはだっば〜!」

「うっせーな!その…昨日言ったオメーの話、聞いてやるよ…」

一瞬なのははキョトンとし、ヴィータの顔を見る。

ヴィータは顔を少し赤くし、俯いていた。

「あははっ、ありがとうヴィータちゃん!」

笑顔を浮かべたなのはは、ヴィータの手を握った。

(ありがとな……ロックのオッサン!)

この調子だと、自然と友達になれそうだ。

心の中でロツクに礼を言うヴェータだった。

番外編・帰国子女の転校生（後書き）

というわけで今回の主役はリクエストのあったヴォルケンリッターの一人、ヴィータでした。

ちなみにこのヴィータはそっくりさんで、闇の書のプログラムとは一切関係ありません（なので性格が少し素直です）。

彼女の好きな有名人、アーノルド・シュワルツェネッガーは作者の好きな映画俳優でもあります。

ですがほら、ヴィータってアクション映画好きそうじゃありません
…？w

番外編・伊丹の新ライバル！？（前書き）

今回は伊丹とあのキャラが主役です。

番外編・伊丹の新ライバル！？

某日、捜査一課の伊丹と芹沢は街中で張り込みをしていた。

「クソッ、気に入らねえ……」

車内にて、先程から伊丹が独り言を繰り返している。

「…先輩、今日でそれ15回目じゃないですか。ちょっとは張り込みに集中してくださいよ！」

後輩の芹沢が口を挟む。

パシンッ！

「痛ッ！」

伊丹に叩かれ、頭をさする芹沢。

「うるせえ！ついでこないだ来た奴にいい顔された俺の身にもなれよ！」

なんとも理不尽である。

薫が居なくなっただ後、伊丹の八つ当たり先は後輩の芹沢へと向いていた。

それもここ最近、それが増していた。

*

実は一週間前、警視庁捜査一課に一人の刑事が配属された。

「え、お前達に彼女を紹介する」

刑事部の参事官・中園が刑事達を集めて前に立っている。

その隣にはスーツを纏った、ポニーテールの髪型をした女性刑事が立っている。

「彼女は清水香織巡查。以前の所轄での愛称はシグナムだ。まだ若いから、皆面倒見てやってくれ」

「清水です。よろしくお願いします」

挨拶したシグナムは刑事達に頭を下げた。

*

シグナムは刑事として優秀だった。

包丁を持った犯人と対峙したときは、彼女が咄嗟に隣の警官から警

棒を抜き取って凶器を叩き落としたため、負傷者は出なかった。

ちなみにロックが犯人達を鎮圧したファミレスにも駆けつけており、彼らを連行したのも彼女だ。

それは他の部署でも有名になり、尚且つシグナムは人を見る目があるので、右京や尊ともすぐ親しくなった。

それ故、捜査一課の捜査員で唯一、特命係と友好的である。

(へっ、気に入らねえ奴だぜ…)

伊丹は自分のデスクにてシグナムを睨みつけていた。

彼は特命係を快く思っていないので、右京達と友好的なシグナムのことも快く思っていない。

そして彼女が書類をまとめ終えた時を見計らい、伊丹は立ち上がった。

「おいシグナム！」

対するシグナムは特に動じず、伊丹に目を向ける。

「何でしょうか？伊丹巡査部長」

「今から稽古に付き合え！いいな？」

伊丹が竹刀を振る動作をする。

(……)

シグナムは剣道だと察し、少し考えた。

伊丹は剣道の達人であり、以前にも十人を連続で打ち負かすほどの人間であるとの話は三浦から聞いていた。

「…はい。わかりました」

そう答えたシグナムは伊丹と共に道場へと向かった。

*

そして舞台は戻る。

「チツ、気に入らねえ…！」

あの後二人は互角に渡り合ったが、あと一歩というところで伊丹の敗北という結果に終わった。

「シグナムさん強いですからね。それに美人ですし、先輩にピッタリなんじゃないんですか？」

ニヤニヤしながら芹沢が口を開く。

パシンッ！

「もう！痛いですよ！」

「お前が余計なことばっか言うからだろっが！俺はあんな女死んでも御免だ！」

伊丹が声を荒げる。

日に日に伊丹の、芹沢に対する暴力がひどくなっているのがよくわかる。

「次変なこと言ったらその口縫い合わせ……おッ！」

車の外を凝視する伊丹。

彼の視線の先には、いかつい風貌の男が一人歩いていた。

「…間違いねえ、奴だ。行くぞ芹沢！」

「は、はい！」

すぐさま二人は車を降り、その男に近づいた。

「…何だよあんたら？」

男も伊丹達に気づき、二人を睨みつける。

「須崎孝太郎だな？殺人容疑で逮捕状が出ている。署まで来てもらっぞ」

伊丹が逮捕状を見せた時だった。

バキッ！！

「ぐおわッ！？」

なんと須崎がいきなり芹沢の顔面に拳を叩き込み、その場から逃げ出した。

「なにやってんだ馬鹿！」

芹沢に文句を吐きつつ、須崎を追跡する伊丹。

「はぁ…はぁ…」

二人の距離が段々と縮まり、須崎が息切れを起こす。

「観念しろコラ！」

伊丹が須崎に手を伸ばした時、

シャキン！

須崎はナイフを取り出し、伊丹に襲い掛かった。

「うらああッ！！」

「くツ…！」

須崎の攻撃を避ける伊丹だが、運悪く右腕をかすってしまった。

「うわ…！」

スーツの袖がバツサリと切れる。

（クソツ、近づけねえ…！）

伊丹が焦りを感じた時、須崎の後ろに人影が現れた。

ガシッ！

その人影は須崎のナイフを持った右腕を押さえた。

「須崎！銃刀法違反並びに公務執行妨害で逮捕する！」

「おま…シグナム！」

そう、シグナムは右京のアドバイスを受けて別の場所で待ち伏せていたのだ。

「うっせーよ姉ちゃん！怪我すんぞ…！」

シグナムに殴りかかるうとする須崎だが…

カシャン！

その腕に手錠がかけられた。

「はあ…はあ…手こずらせやがってこの野郎！」

手錠をかけたのは須崎を睨みつけている伊丹だ。

「すみません先輩！」

先程ノックアウトされた芹沢がようやくやってきた。

「おい芹沢、こいつ連行するぞ」

「は、はい！」

伊丹と芹沢は須崎を捜査車両まで連行を開始したが、途中で伊丹が振り向いた。

「…ありがとうよ」

彼はシグナムにそれだけ言い、その場から去っていった。

*

「杉下警部。ありがとうございます」

その夜、シグナムは小料理屋“花の里”にて右京に礼を言った。

「いえ、僕は『伊丹刑事達とは離れた場所で張り込むといい』とアドバイスしたまでです。犯人逮捕は君の功績ですよ、清水さん」

「さ、どうぞ香織さん。熱いので気をつけてくださいね」

「ありがとうございます」

女将の宮部たまきがシグナムの前に茶碗蒸しを置く。

「でも珍しいですね。右京さんが神戸さんや米沢さん以外の人連れてくるなんて」

どうやらシグナムとたまきは初対面のようにだ。

「たまきさん、余計なことは言わなくて結構ですよ。そろそろお茶漬けにしてください」

「ふふふ…はいはい」

元夫婦の右京とたまき。

二人のやり取りを目に焼き付け、シグナムは少し微笑んでいた。

*

翌日、シグナムが一課にやってくると伊丹が待っていた。

「よう、シグナム。来たばっかだろぅが聞け」

「おはようございます伊丹巡查部長。何でしょうか？」

伊丹は辺りを見回し、声を潜めた。

「今からまた張り込みだ。重要な容疑者だから取り逃がすわけにはいかねえ。だから今回は俺に付き合え、いいな？」

「…はい！」

そして二人は一課を後にした。

シグナムと伊丹の捜査は始まったばかりだ。

番外編・伊丹の新ライバル！？（後書き）

シグナムの本名はご覧の通り中の人と同じ名前ですが、一字一句同じなのはまずいと思ったので漢字を一字変えました。

シグナムは作者の一番好きなキャラですので、書けてよかったです！

作者にアイデアが無いので、ザフィーラとリインフォースは出番少なめになるかもしれませんが、ご了承ください。

番外編・ロックと温泉旅行（前書き）

今回で番外編は終わりです。

番外編・ロックと温泉旅行

P・T事件から一ヶ月後、ロックは忍からある話を聞かされた。

「えっ、温泉ですか？」

「はい。月村家とバニングス家、高町家で行きます。出発は明日の朝です」

ここ最近なのはがバタバタしていたので、久々の三家揃っての旅行である。

「それはいいですね、お屋敷は僕に任せて楽しんできてください」
そう言ったロックが仕事に戻ろうとした時だった。

「何を言っているんですかロックさん。貴方も来るんですよ？」

「……え？」

それを聞き、ロックの足が止まった。

「どうしてですか？僕はただの使用人ですよ？」

「我が家では使用人の方々も旅行に同席するのが普通なのです。それともご予定がありましたか？」

ロックにとって月村家の様子は不思議だった。

数週間前に働き始めたばかりの男を、旅行に連れていくなど考えられなかったからだ。

「い…いえ、特に何もありませんが…」

「では同席してください。皆さん喜びますよ」

（一体誰が喜ぶんだ…？）

疑問に思ったロックだが、口には出さず仕事に戻った。

*

翌日、ロックは月村家の車ではなく、なんと高町家の車に乗せられた。

（なんで僕がなのはちゃんの車に…）

車に乗って早々、疑問に思うロック。

他にはなのはの父の士郎や母の桃子、アリサやすずかがいた。

（こつこついうことか…）

ようやくその意味を悟ったロック。

ファミレス立てこもり事件以来、アリサとすずかからはすっかり懐

かれ、なのははロックを見直したのだ。

「ロックさん、こないだ新しい犬を飼ったのよ！」

嬉しそうに話すアリサ。

「へえ、名前は決めたのかい？」

「ザフィーラっていうの。よ…よかったら今度、遊びに来てもいいわよ…」

「ああ、そうさせてもらうよ。ありがとうね」

ロックがアリサに笑顔を向けた時、運転席の士郎が口を開いた。

「君が噂のロック君か。すっかりモテモテだねえ」

「いえ、そんなことは……あ、初めまして！」

ロックもバックミラーを見ながら会釈する。

「なのはの父親の高町士郎です。凄く強いらしいね。強盗を三人も倒したんだって？」

興味津々の士郎だが、ロックは苦笑いした。

「いやあ、その話はもう…」

「お父さん、ロックさん困ってるよ？」

なのはが助け舟を出し、ロックは安堵のため息をついた。

(どうなっちゃうんだる僕…)

集団での行動にあまり慣れていないロックは不安を隠せなかった。

*

数時間後、一行は旅館に到着した。

そこは自然に囲まれ、静かな場所だ。

「いらっしやいませ」

旅館の従業員らしき銀髪の女性が玄関にいた。

「お部屋の方にご案内しますね」

皆は荷物を片手に、彼女へとついていった。

部屋に荷物を置いたロックは外へ出て遠くを眺めていた。

そこは絶景で海が見える。

(ケリーブルク以外の世界にも、こんなに綺麗な場所があったのかあ…)

生まれ故郷を思い出すロック。

「いい眺めですよね」

声をかけられ、ロックが振り返ると先程の銀髪の女性が立っていた。

「あ、さっきの…」

「はい。私、従業員の小林リインと申します」

その女性はリインと名乗り、ロックに近づいてきた。

「僕はロック・ブルです。こんな素晴らしい場所があったなんて知りませんでした。リインさんが羨ましいですよ、このような場所で働けて…」

つい本音をこぼすロック。

彼は都会よりも、実は田舎の方が好きなのだ。

「ええ、ありがとうございます。ではロックさん、今日はゆっくりしてくださいね」

そう言ったリインはロックに会釈し、慌てて旅館へ戻っていった。

（僕も戻るか…）

*

やがて夕方になり、温泉に入ることになった。

今回の男性陣はロックと土郎、恭也の三人だ。

「ロックさんが居てくれて、本当に助かりましたよ」

湯船に浸かっている恭也が突如口を開いた。

「…どういふこと？」

「俺が居ない時は、貴方が忍を守ってくださいるんで…」

恭也はロックに感謝しているようだ。

「恭也君は忍さんと付き合っているんだよね。普通なら彼女を心配して僕を敵視しない？」

ロックも湯船の中で、「冗談を言いながら恭也に笑いかける。

「そういえばロック君には、そういう女性はあるのかな？」

ここで土郎も会話に加わった。

「はは、残念ながら。この歳になるまでずっと独身ですよ」

苦笑いするロック。

どうやら打ち解けてきたようだ。

(管理局への復讐ばっかで、そんなこと考えてられなかったからなあ…)

*

それから数時間後、食事を終えた大人達は飲酒しながら世間話を、なのは達はトランプで遊んでいた。

「くそッ、またか…！」

そんな中ロックはゲームコーナーで一人、UFOキャッチャーと格闘していた。

「あと一つなのに……よしッ、とれた！」

ロックが獲得したのはウサギのぬいぐるみだ。

彼はゲームコーナーを後にし、部屋へと戻った。

「あ、おかえりなさい」

帰ってきたロックに気づき、桃子が声をかける。

「ただいま戻りました」

「わあ！可愛い…！」

ロックが持っているウサギを目にし、さすがが第一声を放った。

「ああ、これ？ヴィータちゃんへのお土産にしようと思ってね」

「なあんだ、あたし達にはナシか…」

アリスがあからさまに肩を落としてみせる。

「大丈夫、君達の間もあるよ。はい！」

そう言っつて、ロックは手に持っていた袋から同じウサギを三つ取り出し、なのはとアリス、すずかに手渡した。

「お揃いだ！」

「ありがとうございます！」

「ありがとう、ロックさん！」

「…気にしなくていいよ。大したことないから…ね」

澄まし顔のロックだが、実はぬいぐるみを四つ獲得するのに五千円も使い込んだのだ。

「優しいんですね、ロックさんって！」

美由希がロックを賞賛する。

この後、ロックは高町家の大人達やメイド達に囲まれて酒の席に付き合わされる羽目になったのだった。

*

翌日、リインに見送られながら一行は宿を後にした。

帰りの車内にて、なのはもアリサもすずかも、ロックにもらったウサギを抱き締めながら眠っている。

その横でロックは外の景色を眺め、かつての友へ思いを馳せていた。

（そろそろフェイトとアルフの判決が下される頃だね…僕は楽しく元気でやっている。君のおかげだよ、ありがとう…薫！）

*

同時刻、ミッドチルダ裁判所前。

「二人とも無罪になってよかったですね、亀山さん」

「リンディさんやクロノ君の証言のおかげですって！」

リンディの台詞に薫が謙遜する。

判決はフェイトもアルフも無罪になり、執行猶予が一年ついただけで済んだ。

「でも一番の決め手は、ロック元二尉の証拠だと僕は思うな」

クロノが口を挟む。勿論良い意味で。

「それじゃ、俺達はもう行きます。色々ありがとうございました！」

リンディとクロノに頭を下げた薫は、たった今裁判所から出てきたフェイトとアルフのもとへ駆け寄った。

「薫！」

「薫さん！」

二人とも薫の顔を目にしてホッとした表情を浮かべた。

「よかったなフェイト、アルフ。さ、帰ろう！」

「はい！」

そう言った薫はフェイトとアルフを伴い、裁判所を後にした。

「幸せになれるといいわね、フェイトさん……」

三人の後ろ姿を見送りながら、リンディがそう呟いた。

こうして本当の意味でP・T事件は終わりを迎えた。

薫は元の生活へ戻り、フェイトとアルフは新しい平和な日常を手に入れたのだった。

番外編・ロックと温泉旅行（後書き）

リンとザフィーラ、特に後者は登場すらできませんでした。
ザフィーラファンの方々、申し訳ありませんでした！

ですが二人とも幸せに暮らしています！

次回からアフターストーリー編に入ります。
シャマルはそちらに登場します。

新しい家族（前書き）

今回からアフターストーリー編の開始です。

なので主人公は亀山君に戻ります。

新しい家族

薫達がサルウィンに戻った時はもう夕方になっていた。

「ここがサルウィン…」

サルウインの土を踏んだフェイトがそう呟く。

政府の腐敗のせいでこの国は荒れ果てており、お世辞にも豊かな国とはいえないのが現状である。

「ひでえところだろ？大きな声では言えねえけど、この国の子供達は貧しいんだ。つたく、やり切れねえよ」

「貧しいって？」

アルフが薫の顔を覗き込む。

「ああ、大人達が勝手に始めた戦争に巻き込まれて親を亡くしたり、十分な食事も寝床も、勉強も出来ねえんだ」

「かわいそう…」

フェイトが悲しそうな表情を浮かべる。

理不尽な目に遭っている子供が沢山いるという実感が、彼女にも湧いてきたのだ。

「だから俺は…こんな腐った世の中で生きる子供達に、正義を知ってほしかったんだ。いい歳して何言ってるんだって思ってもしんねえけどな…へへ！」

苦笑いする薫だが、フェイトとアルフは首を横に振った。

「いえ。私は薫さんの考えは素晴らしいと思いますよ」

「うん。あたしもそう思う！だから薫は、あたしらを引き取ってくれたんだろ？あたしらにも、その正義ってヤツを教えたかったんだよね！」

「ははは、まあな。おっと、ここが今日からお前らの家だ」

話している間に、門灯がついている自宅に到着した。

「美和子の奴帰ってきてるみてえだな。二人とも俺についてきてくれ」

フェイトとアルフを連れ、薫は自宅へと入っていった。

「美和子…、帰ったぞ…」

すると奥から足音が聞こえ、薫の妻・美和子が姿を現した。

「おかえり薫ちゃん！その子達が例の…？」

美和子がフェイトとアルフに目を向ける。

「おう。フェイトとアルフだ」

そう言った薫は二人を振り返る。

「女房の美和子だ。一応魔法とかの事情は話してある。ちょっと凶暴だけだよ、仲良くしてやってくれよな」

「殴るよ薫ちゃん」

一瞬黒いオーラを出した美和子だが、すぐにフェイトとアルフに顔を向けた。

「えっと…どっちがフェイトちゃんで、アルフちゃんなのかな？」

するとフェイトが軽く挙手し、口を開いた。

「わ…私がフェイトです。フェイト・テストロッサ…」

緊張しているのか、どこかぎこちない。

「あたしがアルフ。よろしくね！」

アルフの方はフェイトより緊張がほぐれており、ハキハキとしていた。

「うん、二人ともよろしく！まあ、とりあえず上がりなよ」

美和子はそう言い、奥へと戻っていった。

薫達もそれに続く。

「失礼します…」

「こらフェイト、失礼しますじゃねえだろ。お前ん家なんだから薫が少し笑う。」

「あー最初に言っとくけど、わざわざ名字変えなくてもいいんだぜ」
「えっ…？」

戸惑った表情で薫の顔を見上げるフェイト。

「フェイトが生みの親であるプレシアを想い続ける限り、お前の名前はテストロッサだ。それを変えていいのは、彼女の娘であるお前だけだ」

「薫さん…」

正直フェイトは、ずっと名前を変えるものだと思っていた。

なので今の薫の台詞には驚かされたのだ。

「第一よ、“ 亀山フェイト ”なんてカッコ悪いだろ？ ははは！」

「…ありがとう、薫さん」

フェイトの瞳に涙が浮かぶ。

「ほらほら涙拭いて」

エプロン姿の美和子がフェイトにハンカチを手渡す。

「薫ちゃんの言う通りだぞ。そだ、今から皆でご飯食べよ！あ、でも確かアルフはイヌ科だからタマネギ駄目だし…ドッグフードでも大丈夫かな？」

「ああ。むしろ好物だよ！」

地球に潜入していた時、ドッグフードの味を覚えたようだ。

「なら良かった。さ、椅子に座って」

そう言った美和子は三枚の皿にパスタを盛り、テーブルの中央に置いた。

「おっ、今日はえらく豪勢だな」

「イタリアに取材に行つてたから、そこで買ってきたんだ。はい、これはアルフの！」

ソーセージが二本乗ったドッグフード大盛りがアルフの前に置かれた。

「うはあ！ありがとう美和子〜！」

アルフは涎を垂らしながら美和子に礼を言う。

「ドイツに行った時に買ったんだよ。やっぱ本場は違うね〜本場は〜！」

そう、美和子は取材先の国で食材を買ってきては家の冷蔵庫に保管したり、他のスタッフや子供達に配っているのだ。

「美和子、ドイツ行ったんだったらビールねえか？」

「そう言うだろうと思って買ってきましたよ。それより冷めちゃうから早く食べよ！」

「そだな。フェイトもアルフも、遠慮せずにごんごん食べよ！」

薫と美和子の優しさに触れ、フェイトとアルフは自然と微笑んでいた。

*

食後、フェイトとアルフは、美和子が取材先の国で撮ってきた写真を見ていた。

「ま…街に水が…」

「びっくりしたでしょ？これはイタリアのヴェネツィアっていう街。水の都とも呼ばれてるんだよ」

「こっちはなんていうんだい？」

アルフが夜景の写真を指差している。

「それはアメリカのラスベガス。まあ…あんた達にはまだ早い場所だね」

「でも綺麗な場所ですね…」

フェイトはラスベガスの写真に見とれてしまっていた。

(意外と打ち解けるの早かったな…よかったぜ)

ビール片手に、三人を見守りながら安堵のため息をもらす薫。

(…さて、明日はフェイトを学校に連れて行かねえとな…)

サルウインの学校は、現地の子供達が集まって勉強する小さな小屋である。

薫はフェイトに、現地の友達を作らせるつもりなのだ。

「まあ写真はこんなもんかな。また何かあったら撮ってくるよ。あんな達そろそろお風呂入って寝ないと、明日起きれないよ」

「あ、はい。美和子さん」

美和子にそう施され、フェイトとアルフはバスルームへと向かった。

「ねえ、薫ちゃん」

二人が見えなくなってから、ソファーに寝転んでいる薫に美和子が話し掛けた。

「あ？」

「フェイトちゃんってさ、お母さん亡くしてるんだよね。でも遅しく生きようとしてる……私らで、あの子達二人を支えていこうよ！」

美和子はフェイトとアルフをすっかり気に入ったようだ。

「……ああ、そうだな！」

*

その頃バスルームでも、

「ねえフェイト……美和子ってさ、いい人だね。初対面のあたしらに優しくしてくれたし」

洗髪しながら、アルフが口を開く。

「うん。薫さんから聞いていた通りの人だったね」

湯船に浸かっているフェイトもアルフの方を向いて頷いた。

「私達、ここでやっていけそうだね……」

「ああ……」

新しい家族に馴染みつつあるフェイトとアルフであった。

新しい家族（後書き）

というわけで今回はフェイトとアルフが、美和子さんと対面しました。

「馴染むの早すぎだろ」って聞こえてきそうですが、作者は人間の気まずい雰囲気を描写するのが苦手なのでこうなりました。

でも美和子さんなら気まずさなど気にせず、こうしてくれると願いを込めました（意味不明）。

転校生フェイト（前書き）

今回新キャラが三人出ます。

ちなみにユーノは自分の世界に帰りました。

転校生フェイト

翌日、学校近くのスタッフの休憩所に、薫とフェイト、アルフの姿があった。

二人を他のスタッフに紹介しようとしたのだが、まだ誰も来ていない。

（早く来すぎたか…？）

ガチャ！

「オハヨウゴザイマス！」

突如ドアが開き、黒人の中年男性が挨拶しながら入ってきた。

「ようジャクソン」

薫が挨拶を返す。

「オー、ソノ子達デスカ？」

ジャクソンと呼ばれたその男は、フェイトとアルフに目を向けた。

「ああ、フェイト・テストロッサとアルフだ」

薫が頷く。

するとジャクソンはニコニコしながらしゃがみ込み、フェイトと同じ目線になった。

「初メマシテ！ボクハ、ジャクソン・マッケンジー。ヨロシクネ。フェイト、アルフ！」

彼の名はジャクソン・マッケンジー。

アメリカ出身で、元教師のスタッフである。

「フェイト・テストロツサです。よろしくお願いします」

「アルフだよ。よろしく！」

自己紹介した二人はジャクソンと握手を交わした。

「ジャクソン。フェイトは生徒で、アルフは俺達のサポート役……つまり副担任だ。よろしく頼むぜ」

分かりやすく説明する薫。

「オーケー、任せテクダサイ！」

そう言ったジャクソンはグッドサインを出した時だった。

「すみません遅れました〜！」

若い金髪の女性がドアを開け、慌ただしく入ってきた。

「オー、ハロー！」

「あ、先生。まだ大丈夫ツスよ！」

薫が笑顔でそう言う。

「あの…薫さん、この人は？」

フェイトが薫に尋ねる。

「ああ、シャル先生だ」

「柚木シャルマルです。医療担当だから、怪我したり病気になったら私に言ってね！」

彼女はそう名乗ると鞆から白衣を出し、それを羽織った。

「亀山さんから話は聞いていますわ。テストロッサちゃんにアルフよね？みんな大歓迎よ」

天使のような笑顔を二人に向けるシャル。

フェイトとアルフはその笑顔に安心感を覚え、いつの間にか緊張することを忘れていた。

「自己紹介は済ませたし、そろそろ行くぞ。二人とも、ここ頼むわ」
「オフコース！」

「わかりました！」

薫は休憩所の番をジャクソンとシャマルに任せ、フェイトとアルフを学校へと案内した。

*

二人を入口前に待たせ、薫は子供達が待っている教室に入った。

「えー、今日は皆に報告がある。実はここに、新しい友達が増えることになった」

それを聞いた子供達は驚いたが、やがて全員が笑顔を浮かべた。

「ホントニ!？」

「カオル!ハヤク会ワセテ！」

はしゃぐ子供達を薫が落ち着かせる。

ちなみに子供の人数は九人である。

「はいはいはい。じゃあフェイト、アルフ、入ってきてくれ」

薫が入口に向かってそう言ったと同時に、フェイトとアルフが教室に入ってきた。

「この子がフェイトで、こっちがアルフだ。俺やジャクソンがいな
い時はアルフを頼れ。それと、フェイトと仲良くしてやってくれよ
な」

「「ハイ！」」

子供達が元気良く返事する。

「じゃフェイト、あの席に座ってくれ」

薫が一番後ろの窓側の席を指さす。

「隣は…タオだな。フェイトの面倒見てやってくれよ」

「ハイ！」

タオと呼ばれた褐色肌の少女はすぐ立ち上がり、フェイトに向かっ
て手招きした。

「ホラ。コッチダヨ、フェイトチャン」

「…！」

タオの声を聞き、フェイトの動きが少し止まった。

(あの子の声…なのはにそっくりだ…！)

偶然にもフェイトの言う通り、なのはとそっくりなのだ。

「ドウシタノ？」

「あ…ごめん、ありがとう」

すぐさま我に返り、フェイトは席に座った。

「アタシ、タオ！日本語マダ上手ク出来ナイケド…仲良くシヨウネ、フェイトチャン！」

タオは満面の笑顔を浮かべ、フェイトに手を差し出した。

「うん…よろしくね、タオ」

フェイトもニコツと笑い、タオと握手を交わした。

「授業開始まで、しばらくそのまま待っていることな。アルフは俺と一緒に来てくれ」

そう言った薫はジャクソンを呼びべく、アルフを伴って教室の外へ出た。

「フェイトに…友達ができてよかったよ…」

外に出てから涙をこぼすアルフ。

「フェイトは…殆どの時間をジュエルシード探索や、自身の訓練に費やしてきたから…今まで友達が居なかったんだ」

「…そっか」

アルフの肩に手を置く薫。

「でもなアルフ、もうそんな心配ない。この子供達はな、多かれ少なかれ悲しい過去背負ってたんだ。それに魔法の事は伏せといたけど、事情も話してある。だから皆、他人に優しいんだ。フェイトにその気があれば、すぐに全員と友達になれるぜ！」

実際薫も、初めてサルウィンに降り立った際、子供達の素直さや笑顔に驚かされた。

家を失い、親兄弟を失い、毎日空腹感に襲われながらも前へ進んでいる子供達に、心を打たれたのだった。

殺された友人のこともあるが、やはり子供好き故に薫は放っておけなかったのだろう。

「…薫のところに来て…本当によかったよ。ありがとう」

ニコツと笑いながら薫に礼を言うアルフ。

「フェイトが幸せなら、あたしは嬉しいよ」

「何言ってるんだよ馬鹿、お前も幸せになんなきゃダメだよ」

薫が笑いながら、人差し指でアルフの額を軽く押す。

「あははッ、そうだね！」

*

その頃教室では、フェイトとタオが話しているのを、他の子供達が見守っていた。

「フェイトちゃんミタイナ、可愛イ子ト友達ニナレテ嬉シイヨ！」

「うん…」

フェイトはタオの話に相槌をうちながら、他の子供達一人一人の表情を観察していて内心驚いていた。

そう、全員笑顔なのだ。

悲しそうな素振りは微塵も見られない。

「ねえ、タオ…」

声のトーンを落とし、フェイトはタオに話し掛けた。

「ナアニ？」

「こんなこと言うのとっても失礼なんだけど…皆、楽しそうだね？」

申し訳なさそうな表情のフェイトだが、タオは笑ったままだ。

「勿論ダヨ！幸せダモン！」

「し、幸せ…？」

フェイトは首を傾げる。

「確力ニ…アタシ達ニハ、パパママモ居ナイ。デモネ、コノ学校ニ皆ガイルカラ、トツテモ幸セ！」

タオの笑顔…それはフェイトの中で、別れ際のなのと同じくらい綺麗な表情だった。

「コノ教室ノ皆ニ、ジャクソン、シャマル、ミワコ、カオル。ソレニ今日カラ、フェイトチャンガ来テクレタカラ…モット幸セダヨ！」

「タオ…ありがとう！」

自身の胸の奥が熱くなってくるのをフェイトは感じた。

これから、タオを始めとするこの教室の皆と仲良くなっていこう。

フェイトはそう心に誓った。

転校生フェイト（後書き）

設定が曖昧な奴いるし、キャラ設定表みたいな作った方がいいのかな…？

人物設定（前書き）

今後の登場予定の無いオリキャラです。

人物設定

ロック・ブル

年齢は34歳。

惑星ケリーブルク出身の元魔導師で、現在は月村家の用心棒。

デバイスは杖型のカルミだが、亀山薫との戦闘で破壊されて以降は、特技の格闘技で補っている。

性格は大人しくネガティブな部分があるが、根は優しく真面目。

意外とケチな部分があり、ドリンクバーだけで腹を満たしたことがある。

また薫の影響で子供に対して優しく接するようになった。

趣味は読書で、現在はアリサから借りたドラゴンボールにハマっており、好きなキャラはピッコロ（生きていく上で出費が少なくて済むから）。

真田ヴィータ

年齢は9歳でなのは達のクラスメート。

物心ついた頃からオーストリアに住んでおり、両親は日本人なので日本語とドイツ語を難なく話せる。

性格は少し素直な所以外、原作と同じ。

アーノルド・シュワルツェネッガーのファンで、好きな映画はターミネーターシリーズやイレイザー。

シグナム（清水香織）

年齢は25歳。

警視庁捜査一課所属で階級は巡査。

経験は浅いが、刑事としては優秀で将来有望。

上記の理由から経理担当の陣川公平にライバル視されているが、本人は気づいていない。

性格は原作と殆ど変わらないが、正義感はかなり強い。

かつては千束署刑事課所属で、米沢守の事件簿に登場する相原誠の部下だった。

ディアズ

年齢は28歳。

階級は二尉でアースラ所属の突入部隊長だが、自己中心的な性格のせいで大半の部下から嫌われている。

元々影が薄いが薰やなのは、ロックが来て以降はさらに薄くなっていった。

本人はそれを快く思っておらず、裏切ったロックに襲い掛かるが返り討ちに遭って死亡する。

彼の失踪後、取り調べでロックに礼を言った局員がいたとの噂がある。

小林リイン

年齢は22歳で、旅館の従業員。

両親は既に他界し、年の離れた妹と二人暮らし。

実はたまきや美和子が客として宿泊しに来た際、二人と知り合っている。

人物設定（後書き）

すいません、次回の更新は遅めです。

薫の安堵（前書き）

予定より早く用事が片付いたので投稿します。

薫の安堵

夕方、学校の授業が一通り終わり、薫とフェイトは自宅へ向かっていた。

「アルフは、ジャクソンとシャマル先生の手伝いで遅れるってさ」

「そうなんですか」

美和子も仕事でしばらく居ない。

「ところでフェイト、友達はできたか？」

「はい。皆…特にタオと一番仲良くなれました。嬉しいです」

フェイトが笑顔を浮かべる。

なのは以外の友達が一度に九人もできたのがとても嬉しいのだ。

「…そうだよな。友達ができて嬉しくないわけないよな！」

「はい。これも薫さんのおかげです」

そう言ったフェイトは、スカートのポケットからバルディッシュを取り出す。

「今まで無理させちゃった分、ゆっくり休んでね」

《Yes Sir.》

その光景を見ていた薫も、首から下げているアイファアを手を取った。

「アイファア、お前もお疲れだな」

《いえいえ。でもマスター、イメージトレーニングは欠かさないでくださいよ》

アイファアが心配そうな声を出す。

「だあいじょうぶだよアイファア。それよりフェイト、ここでの生活…続けられそうか？」

「はい。大丈夫です」

力強く頷くフェイト。

「ならよかったぜ。それより今日は緊張して疲れたろ？早く寝ろよ」

「はい！」

そうこうしている間に自宅に到着し、薫が玄関の扉を開けた。

「あ、そついや今日から美和子いねえんだった…飯作んなきゃな」

「薫さん、私手伝います」

自分と薫の靴を並べ、フェイトも家へあがった。

「ありがとな。でも俺の料理なんて美和子と違って適当だからよ、あんまその必要ないぜ」

「えっ…何をやるんですか？」

台所に立った薫はフライパンを取り出し、口を開いた。

「ミッドチルダには“炒飯”って料理あるか？」

「聞いたことはありませんけど、食べたことは…」

若干口ごもるフェイト。

やはり口にしたことのない物なので、少し不安なのだ。

「そっか。よし、じゃあ俺が今日食わしてやる！」

そう言った薫はフェイトをテーブルに座らせた。

「よし暫く待ってる！」

*

「ほれ！」

15分後、薫はフェイトの前に作った炒飯を置いた。

具は卵とグリーンピースの二種類だけだ。

「な、適当だろ？」

苦笑する薫だが、フェイトは嬉しそうに微笑んだ。

「私…父さんいなかったから、男の人の手料理に憧れてたんです」

「憧れてた…？」

「はい。作り方は豪快で、使う素材も少なくても美味しい。そういうの食べてみたかったんです！」

目を輝かせるフェイト。

そんな彼女を見て薫も自然と笑顔になっていた。

「へへっ、んなおだてんなよ。それより早く食ってみてくれよ」

「はい。いただきます」

フェイトはスプーンで炒飯をすくい、それを口に運んだ。

「これ…美味しいです！」

「だろ？俺が作れる数少ない料理だ。まだあるから沢山食べよ」

「はい！」

本当は美和子作り置きしていたものがあるのだが、薫はあえて出さなかった。

自分もフェイトに何か作ってやりたかったし、その美和子の料理がアレだったからだ。

(美和子スペシャルは…明日でいいか)

*

翌朝、薫とフェイト、アルフの三人はリビングにいた。

だがアルフの様子がおかしい。

昨日帰宅してからずっとうなだれており、朝食も口にしないのだ。

「ねえアルフ、なんか変だよ？」

「どうした？具合でも悪いのか？」

薫とフェイトが心配そうに問う。

するとアルフは顔をあげ、口を開いた。

「昨日シャマルの家で食べたものがちょっとね…胃がもたれたのか

も…」

フェイトはキョトンとするが、薫は何かを思い出したようだ。

「あ、悪い悪い。シャマル先生が料理下手なこと言い忘れてたわ」

「はあ!？」

驚いた表情で薫の方を向くアルフ。

「何なのさそれ!？」

「いや俺も以前、美和子がない時に煮物の差し入れ貰ったんだけどよ…」

そこまで言って黙り込む薫。

ここから先は言いにくいようだ。

「…悪かったなアルフ。今日はゆっくり休んどけ。胃薬置いとくからちゃんと飲めよ」

「うん…覚えときなよ薫…」

そう呟き、薄気味悪く笑うアルフ。

薫はそんな彼女に罪悪感と軽い恐怖を感じながら、フェイトを連れて自宅を後にした。

*

学校に到着したフェイトは教室に、薫は休憩所へ入った。

「オハヨウゴザイマス、カオル！」

「あら亀山さん、おはようございます！」

「お…おはようございます」

今朝のことがあったので、軽く笑顔がひきつる薫。

「今日アルフちゃんは？」

早速シャマルが切り出した。

(答えにくいこと訊くな、この人は…)

「じ、自宅っすよ。な…なんか気分がすぐれないとかで…」

嘘はついていない。

自分にそう言い聞かせながら、薫は自分の席に座った。

「そうですか。アルフちゃん、早く良くなるといいですね」

「ああ、はい…」

（明日には治るだろうけど…）

そう考えながら周りを見回す薫。

彼の目には、美和子が集めてきた資料を読み漁るジャクソンと、注射器を整理しているシャマルが映っていた。

（平和だなあ…）

しみじみと思う薫。

だが新たな火種はゆっくり、またゆっくりと忍び寄ってきていた…。

薫の安堵（後書き）

早いですが、次回から新展開に入ります。

やっぱり平和な話書くの苦手ですw

ちゃんと父親らしく亀山君を書けてるかな…？

突然の訪問者（前書き）

今回から新展開ですが、予め言います。

設定がめちゃくちゃです！

突然の訪問者

フェイトとアルフがサルウィンにやってきて半年…つまり薫が特命係を去って一年が過ぎた。

本日は薫が休みだが、フェイトとアルフは学校へ行った。

「暇だあ…」

自宅のソファアにて、薫は寝転がっていた。

「やること無い時に限って休みなんだよなあ…」

その時、自宅の電話が鳴り始めた。

サルウィンに来てから、あまり電話は使っていないので珍しい。

「…よつと…」

ソファアから起き上がった薫は、受話器を手に取った。

「もしもし…?」

《あ、もしもし失礼します。亀山薫さんでしょうか?》

男の声、しかも日本語である。

どつやら日本からの国際電話のようだ。

「あ、はい。そうっすけど…」

《自分は警視庁特命係の神戸尊です》

なんと薫に電話をかけてきたのは、後任の尊だった。

「あ…こ、これはどうも！」

以前に三浦から話を聞いていたので、すぐに自分の後釜だとわかったようだ。

《いいですか亀山さん、これは小野田官房長からの情報なんですが…》

「えっ？」

《赤いカナリアの元幹部が二人、サルウィンに逃亡しました》

「ええッ!？」

赤いカナリア……左翼過激派のテロ組織だが、現在はほぼ壊滅状態である。

「そっついや現在^{いま}でも、捕まってない幹部が何人かいたっけ…」

《はい。こちらでも手配していたんですが、逃亡を許してしまつて……何も無いと思いますが、十分注意してください。では僕はこれで失礼します》

「ああ、ちよつと！」

通話を終わろうとした尊だが、薫が引き止めた。

《はい？》

「神戸さん…右京さんのこと、よろしくお願いします！」

薫がそう言つと、受話器の向こうから尊の「はい！」という力強い返事が返つてきた。

「じゃあ失礼します」

受話器を置く薫。

「幹部が二人来てるからつて何かあるわけでもねえし…いや、もしかしたら…」

何となく嫌な予感がした薫は、アイファアを首にぶら下げて自宅を飛び出した。

行き先は勿論学校である。

（何するかわかんねえけど…何するかわかんねえけど！）

じつとせずにはいられなかった。

*

自宅から走ること10分弱、学校が見えてきた。

だがそこには招かれざる客が二人来ていた。

(やっぱ間に合わなかったか…)

薫の足音が聴こえたのか、二人が振り向く。

「なんだあんた？」

一人が薫を見る。

それに続いてもう一人が振り向いた。

二人ともガタイがよく、悪人面である。

「お…俺は学校のボランティアの者ですけど、ここに何か用っすか？」

薫がそう問うと、二人が顔を見合わせてニヤリと笑った。

「…ああ大有りだ」

ジャキッ！

二人は懐から拳銃を取り出し、薫に向けた。

「おわッ!？」

「わしらは赤いカナリアの幹部や。車寄越しや兄ちゃん、そしたら命だけは助けたるわ」

もう一人が口を開いた。

薫達のボランティアグループにとって自動車は最も貴重な移動手段である。

そう簡単に手放すわけにはいかない。

(くッ…こっになったらアイファーで…！)

薫が首にぶら下げているアイファーを取ろうとした時だった。

「ちよっど…」

突如、薫と幹部達の耳に女性の声が届いた。

「なんや姉ちゃん!？」

関西弁口調の幹部が声のした方を向く。

そこに立っていたのは、茶色いコートを着た十代後半くらいの女性だった。

しかも彼女はコートの下に、なんと白いバリアジャケットのような服を身に纏っていた。

(ま、まさかあの子…!?)

薫の脳裏に、魔導師という三文字の言葉がよぎる。

そんな薫を余所に、彼女は黙って両手を幹部達に向かって突き出した。

シュルル…!

「あ…!？」

「な、なんや!？」

その時、オレンジ色のテープのような物が二人に巻きついた。

「」「うわぁ!？」

予期せぬ事態に慌てふためく幹部達。

(あれはバインド…ってことはやっぱり魔導師か…！)

薫の疑問は確信へと変わった。

魔導師の女性は、続いて拘束した二人の足下に魔法陣を展開させ、何かを唱えていた。

「…座標…：…転移先、日本…：東京…：警視庁前…」

彼女がそう言い終わると同時に、二人の幹部が魔法陣に吸い込まれていく。

「わ、わああああ…！」

「堪忍してええなああ…！」

だが抵抗すらできず、二人は女性と薫の前から消えていった。

「ふう…」

彼女は長いオレンジ色の髪を掻きあげながらため息をつくとき、薫の前まで駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？」

「あ…あ、ああ！」

やっこの思いで返事する薫。

突然の事態で状況が飲み込めていないのだ。

「…ところであいつら何処に消えたんだ？」

「転移先を警視庁の前に設定しました。じきに逮捕されるでしょう」

薫の問いに笑って答える女性。

「なんか知らねえけど助かったぜ。サンキューな！」

「こうした方が私にも都合が…」

「え？」

「い、いえ！それより貴方もご無事で良かったです。亀山薫さん」

「あはは、ありがt……は！？」

なんとその女性、薫の名を知っていたのだ。

「…いや…あんた…なんで俺の名前…」

ポカンとする薫。

初対面の人間が自分の名を知っていれば、驚くのも当然である。

「すみません、申し遅れました」

そう言った彼女は、手のひらに小さな魔法陣を展開し、自身の身分証を表示した。

初めて会った時のクロノと同じように。

「私の名前はティアナ・ランスター。信じられないでしょうけど、今から14年後のミッドチルダから来ました」

そう名乗った女性、ティアナは薫に対して敬礼した。

突然の訪問者（後書き）

ね？めちゃくちゃでしょ （半ば投げやり

最初はティアナではなくオリキャラの予定でしたが、自分が考えた奴でもどのみち彼女とかぶるので、既存キャラのティアナにしました。

ちなみに赤いカナリアの幹部の名前は、関西弁の方が「南条吾郎」、もう一人の方が「椎名哲」です。

11年後の惨劇（前書き）

ティアナの未来には、なのはもフェイトもはやても居ないので、スバルやギン姉、エリオ、キャロはいません。

また、ご都合主義によりスカリエッツィ達ナンバーズも居ません。

11年後の惨劇

「私の名前はティアナ・ランスター。今から14年後のミッドチルダから来ました」

そう言つて敬礼するティアナ。

「……へ？」

そんな彼女の発言に驚き、薫の動きが止まった。

「えっと……それってつまり、未来から来た……ってことか……？」

「はい！」

薫には信じられなかった。

いや、多分殆どの者には信じられないだろう。

だが薫には、ティアナが嘘を言っているようには見えなかった。

「それは……何か目的があつてのことなのか？」

するとティアナは黙って俯き、口を開いた。

「……これは、フェイトさん達にもお話ししなければならぬ事なんで

す。それまでお待ちしていただいてもよろしいですか？」

「ああ、全然いいぜ俺は。じゃあ家に来いよ、あと一時間くらいで帰ってくるだろうから」

そう言った薫は踵を返し、自宅へと戻っていく。

ティアナもそれに続いた。

*

自宅に着いた二人はリビングにいた。

「ほいよ」

薫がテーブルに座っているティアナの前に、コーヒーの入ったカップを置く。

「ありがとうございます」

「いやいや、どうせコーヒーしかねえしな」

薫もソファーに座り、ため息をつく。

(未来から来た、か…もしかして誰かを助けに来た?…いやいや、某猫型ロボットじゃあるまいし…)

ティアナの、未来から来たという発言の意味を考える薫。

(…まあ、フェイト達が帰ってくるのを待つか…)

そして待つこと数十分、

「ただいま」

「薫、帰ったよー！」

フェイトとアルフが帰宅した。

「おう、おかえり」

「あれ、お客さんですか？」

二人がティアナに気づいた。

「お邪魔してます」

ティアナがフェイトとアルフに会釈する。

「フェイト、アルフ」

タイミングを見計らい、薫が口を開いた。

「この子はティアナだ。お前達に話があるってさ。どこでもいいか

ら座れ」

「あ、はい」

「わかったよ」

フェイトはティアナの正面に座り、アルフは薫の隣に座った。

「じゃあティアナ、話してくれないか」

「…はい」

返事をする、ティアナはゆっくりと語り始めた。

*

現在薫達が暮らしている時代から10年後、ティアナは16歳という若さで管理局に入局した。

当時、試験監督を務めていた局員のロベルト・ディック二佐に声をかけられた。

「ランスター君、君なかなか素質あるね」

「ありがとうございます！」

ロベルトに敬礼するティアナ。

彼は22歳にして、ミッドチルダ地上本部直属部隊の若き部隊長…
要するにエリートである。

「そうだ。君に頼みがあるんだけど…」

「頼み…？」

ティアナは首を傾げる。

「…僕の部隊に入ってくれないか？」

「ええッ!？」

突然の勧誘に驚いた。

素質があるとはいえ、いきなり部隊に編入されるとは思っていなかったのだ。

「あ、いや…無理強いしているわけではな…」

「光栄です!よろしくお願いします!」

こうしてティアナはロベルトの部隊に配属された。

*

ティアナはデバイス、クロス・ミラージュを与えられ、毎日訓練に励んでいた。

他の局員ともうまくやっているようである。

特に一番仲が良かったのは…

「ティアナ、お疲れさま！また腕上げたね〜！」

「モンロー！」

彼女はマルガリータ・モンロー。

名前が少し長いので、周囲の人間は名字で呼んでいる。

ちなみにティアナと同年だ。

「このままじゃすぐティアナに抜かれちゃうな〜」

「そんなことないわよ。でも執務官への道のりはまだまだだね…」

モンローは優秀な新人であり、かつての高町なのはに匹敵するほどの魔力を持っている。

そんな彼女とティアナは、互いにライバルとして競い合っていた。
だがそれから一年後に、大事件が起こる。

*

何処で造られたのか、二人の戦闘機人が突如ミッドチルダの首都・
クラナガンに現れた。

戦闘機人達はクラナガンを暴れまわり、地上本部は勿論、ホテル・
アグスタなどの建造物が甚大な被害を被った。

襲撃の際、地上本部のレジアスが戦死したため、指揮系統は一気に
乱れた。

「落ち着け！普段の訓練通りにやればいい！」

「はい！」

当然ながらロベルトの部隊も動員された。

だが…戦闘機人の強さはロベルト達をも上回っていた。

「ぐあぁッ…！」

「部隊長！」

ロベルトは刺殺され、次々とティアナの仲間達が消されていく。

そして…

「ハア…ハア…」

「残ったのは…あたしだけみたいだね」

ティアナとモンローは傷だらけになりながらも、瓦礫の陰に隠れていた。

「どうする…？アイツら中々強いよ…」

「ねえモンロー、いつもやってる“挟み撃ち作戦”やろう…！」

挟み撃ち作戦…その名の通り、模擬戦でティアナとモンローが組んだ際に、相手チームに対して使っている戦法である。

ちなみに失敗したことはない。

「…よっしゃ、やろう！」

コクンと頷いたモンローは立ち上がって戦闘機人達の前に姿を現し、ティアナは忍び足で戦闘機人達の後ろへ回り込んだ。

「なんだお前、まだ生きていたのか」

戦闘機人の一人、ノインが鼻で笑う。

「お前一人か？まあ別に構わん。私は戦えればそれでいい」

もう一人の戦闘機人、ツヴェルフが静かにそう言う。

二人とも男である。

「あ…アンタら！何が目的なの！？」

いつも温厚なモンローだが、今回は当然ながら戦闘機人二人に激しい怒りを露わにしていた。

「…部隊長やみんなを殺して…何のために！？」

「何のために…だって？」

ノインが口を開く。

「そんなの楽しいからに決まってるだろ」

悪びれる様子もなく、無邪気な笑顔を浮かべるノイン。

「理由なんてないよ。あんたバカ？」

「くッ…！」

モンローは奥歯を噛み締める。

「…絶対に許さない!!」

そう叫んだモンローは、剣のデバイス・シェイファーを両手で握り締めながらノインに飛びかかった。

「やあああああ!!」

ガキンツ!

「オイオイ、そう邪険にするなよ」

ノインは平然としながら、モンローのシェイファーを受け止めた。

「…フッフ!」

だがモンローは静かに笑っていた。

いや、笑いを堪えているといった方がいいだろうか。

「今だよティアナ!」

「なにツ!?!」

驚いて振り返るノインの後ろでは、クロスミラージユを構えるティアナの姿があった。

「クロスファイヤー…」

ザッ…！

だが一瞬の間をつき、ツヴェルフがティアナの背後に回り込んだ。

「…！しまっ…！」

ドスッ！

「かはあッ…！」

ハイキックをくらったティアナは吹き飛ばされ、瓦礫に身体を打ちつけた。

「うッ…ぐうう…！」

痛みに悶えるティアナに対し、モンローを退けたノインが刃を向ける。

「今楽にしてやるからな！」

嫌らしい笑みを浮かべながら、ノインはティアナにまっすぐ向かっていった。

(やられる…こんなところで…！)

まだ執務官になるという夢を叶えていない。

ティアナが思わず目をつぶった、その時だった。

「ティアナ！危ない！！」

ザシュツ…！

突如耳に入った声に驚き、目を開けるティアナ。

「……え？」

そこには自分とノインの間に割って入り、自分の代わりに腹部を刺されたモンローの姿があった。

「モ…モンロー！？」

「な…コイツ！」

自分の邪魔をしたモンローから刃を抜くノイン。

「邪魔しやがって！」

ノインは再びモンローを刺そうとするが、ツヴェルフが彼の肩に手

を置いた。

「な、なんだよ!?!」

「その位にしておけノイン。お前はやりすぎだ」

ツヴェルフはそう言い、その場から飛び去っていった。

「チツ、ツヴェルフがそう言うならしゃあねえな…!」

ノインは納得していないようだが、ツヴェルフと同様に去っていった。

*

「ねえ…ねえモンロー…!なんで…なんで私なんか庇ったの…?」

血が溢れ出る傷口をハンカチで押さえながら、モンローに呼び掛けるティアナ。

「あ…あはは…」

モンローはかすれた声で笑ってみせる。

「…ロベルト部隊長が…言ってたんだよ。ティアナは、第二の亀山薫だって…」

「…！」

亀山薫： ティアナもその名を聞いたことがある。

11年前に起きたP・T事件の際、偶然魔導師となって事件解決のために尽力した男だ。

時空管理局ではちょっとした有名人である。

「そつえば…」

ティアナは足下のクロスミラージュに目をやる。

薫のデバイスも、クロスミラージュと同じ銃タイプである。

「…無鉄砲なところもそつくりだって…げほッ！ごほッ！」

大量に血を吐き出すモンロー。

「だ…大丈夫！？そつだ、助けを…！」

「い…いいよ…はは…」

目に涙を浮かべるティアナに対し、モンローは心配させまいと必死で笑顔を作りながら、ティアナの頬に手を添える。

「え…えへへ…立派な執務官に…なるんだぞ…」

モンローの手がだらりと落ちる。

「…はっ…モンロー…?」

ティアナが呼び掛けるが、モンローには聞こえない。

「ねえ…起きなさいよ…起きなさいよモンロー!…モンロー…
!」

冷たくなったモンローを抱き締め、ティアナは泣き叫び続けた。

11年後の惨劇（後書き）

次回もティアナの過去編から入ります。

ティアナの決意（前書き）

今回はティアナの過去から入ります。

ティアナの決意

戦闘機人達がクラナガンを襲撃してから三年が経過した。

20歳の誕生日と同時に執務官になったティアナは、自分の職務とあの事件以来姿を見せない戦闘機人達の調査を並行して行っている。だが本日は資料室に足を運び、過去の事件の資料を読んでいた。

(これが…ジュエルシード事件の資料…)

彼女は机に座り、資料をめくっていく。

過去の魔導師達の戦闘スタイルを参考にしようと思ったのだ。

そしてある名前を見つけ、その手を止めた。

「あ…」

ティアナが見つけたのは、ロック・ブルの名だ。

「確か昔、モンローが…」

*

「へえ〜！ティアナ、執務官目指してるんだ！」

「まあね。ところでモンローは、どうして魔導師になるつもりなの？」

ティアナが尋ねると、モンローはため息をついた。

「あたしが孤児院出身ってことは知ってるよね？」

「え？ええ……」

「その孤児院に、いつも寄付してくれる人がいてね。ロック・ブルツて人なんだけど、ティアナも名前くらいは知ってるよね？」

「それってジュエルシード事件で、プレシアに買収されて管理局を裏切った人でしょ？」

ティアナが冷たく言い捨てる。

「ひどいなあ〜、あたしの初恋の人なのに」

苦笑するモンローだが、彼女のロックに対する信頼は変わらない。

「何か事情があったんじゃないかな？でもあの人がよく顔出してくれたから、全然寂しくなかったよ！あたしも、ロックさんのようになれたらいいなって思ってたね！」

(…あ、いけない！)

モンローとの思い出に浸るのを中断したティアナ。

その目にはつつすらと涙が浮かんでいた。

(モンローや皆のためにも…あの二人を倒さなきゃ…！)

そして資料を読むこと10分、ティアナは最終的に三つの名にたどり着いた。

(高町なのは…フェイト・テスタロッサ…亀山薫、か…)

P・T事件の際、主に活躍した魔導師である。

特に薫はティアナと同様、銃タイプのデバイスを所持している。

(もし三年前の事件の時…この三人の内、誰かが居たら…)

そう考えたティアナだが、すぐに首を横に振った。

(…いない人のこと考えても仕方ない。なんとかして二人を捜して逮捕しないと！)

覚悟を決めたティアナは、資料を棚に戻すと資料室を後にした。

*

それから更に二日後、事態は急展開を迎えた。

なんとノインとツヴェルフが製造された施設を、巡回中の局員が発見したのだ。

その施設は山奥にあるため人目に付きにくかったが、最近木が伐採されたので局員の目にとまったのだ。

「派手に荒らされてるわね…」

施設に赴いたティアナは一人、そう呟く。

それもそのはず、各部屋の至る所が破壊し尽くされているのだ。

恐らく二人の戦闘機人が暴れたのだろう。

（ん？奥の部屋に何かある…）

最深部の部屋に違和感を感じ、ティアナは気配を消してそっと足を踏み入れた。

「これは…」

違和感の正体…それは最深部の部屋のみ破壊されていなかった。

(どうしてこの部屋だけ…?)

そんな疑問はさておき、机の上に置かれた沢山の資料を手に取る。

資料を読み進めていくうち、ある物を見つけた。

「これは…転送装置!?!」

見ると机の隣に、資料に掲載されている機材がある。

(戦闘機人並びに転送装置の製作者は…レクサス博士!)

ティアナは製作者の名を聞いたことがあった。

(確か彼は行方不明のはず…)

施設内の凄まじい荒れようから見て、レクサスはこの世にはいない。

戦闘機人達の暴走に巻き込まれたのだろう。

そして次のページをめくった時だった。

「あっ!」

再び驚くティアナ。

そこには未来と過去への行き方が記載されていた。

しかもよく見ると、その機械には何者かが使用した形跡があった。

「これ…ひよつとしてタイムマシン…？まさか戦闘機人達、これで何処かに行ったんじゃない…」

機械には「2009年12月14日 地球」と表示されている。

(この日付は…ジュエルシード事件から半年後ね…)

資料片手に機械のボタンを押すティアナ。

その途端、機械が青白く輝いた。

「えつと次は…どう？」

ティアナが発光部に手を触れた時、青白い光が彼女を包み込んだ。

「あ………」

それと同時に、室内からティアナの姿が消えた。

こうしてティアナは戦闘機人達を捜し、14年前の地球へと旅立った。

*

「…というわけなんです。気がつくところのサルウィンにいて…」

ティアナから事情を聞かされた薫達は、あまりの事態に何も言えずにいた。

「そっかあ、そんなことが…」

薫がため息をつく。

「…私、管理局に入った方がよかったのかな…？そうすれば、モンローさんも死なずにすんだかもしれないのに…」

フェイトもティアナの話聞き、ショックを受けたようだった。

「私個人としては、そうした方がよろしいと思います。フェイトさんは立派な魔力をお持ちです。それに…このような何も無い場所でもせぜにいるのは、正直勿体無いと思います」

サルウィンを何も無い場所呼ばわりしたティアナに対し、薫は内心カチンときた。

だが今はそれどころではない。

この地球上の何処かに、恐ろしい悪魔が一人も潜んでいるのだ。

「その…戦闘機人だっけ？こっちに来るってことはないのかい？」
深刻な表情のアルフがティアナに尋ねる。

「さあ…それは何とも言えません」

「そう…いやあ、子ども達のこともあるから心配だね…」
ため息をつくアルフ。

あれから半年、アルフはすっかり学校の子ども達に懐かれていた。

「まあとにかく、今のところは大丈夫ってことでいいのか？」
確認する薫に対し、ティアナは頷く。

「はい。今のところは、ですが…」

そこまで言った彼女はフェイトの方を向く。

「フェイトさん」

「は、はい？」

「管理局入りのお話、考えておいてくださいね」

そう言うと、ティアナは椅子から立ち上がり、玄関へ向かった。

「おい、何処行くんだ？」

「あの二人を捜しに行きます。お邪魔しました」

薫に頭を下げ、ティアナは亀山家を後にした。

ティアナの決意（後書き）

相棒シーズン10楽しみです。

亀山君：一瞬でもいいので帰ってこーい！

動き出す影（前書き）

大学が始まったので、これから更新が遅くなるかもです。

動き出す影

「唐突な話だったな」

ティアナが帰った後、薫はそう呟いた。

「ああ……」

「……」

先程から黙りこくるフェイト。

そんなフェイトを見かね、薫はため息をつくとソファアールを立ち上がり、彼女の正面に座った。

「フェイト。管理局に入ろうか迷ってんのか？」

「え……」

凶星だったのか、フェイトが顔を上げた。

「入らなきゃ……駄目ですか？」

恐る恐る尋ねるフェイト。

「いや、入ることあねえぞ」

「「え……？」」

思わずキョトンとするフェイトとアルフ。

「いやむしろ、入らないでほしい…って言った方がいいな」

「入らないでほしい…？」

フェイトが首を傾げる。

「管理局に入って、それで未来のティアナの仲間達が助かるのかも
しれない。けどよフェイト、お前自身はどうなるんだ？」

「私自身…？」

「ああ。お前がそいつらと戦って、絶対に死なないって保証はどこ
にもねえんだからな」

フェイトの目をまっすぐ見つめる薫。

「それにフェイトが死んだら、アルフが悲しむ。いや、俺や美和子
だってそうだ」

「薫さん…」

「学校の皆だって、絶対悲しむぞ」

薫の言葉を受け、フェイトの脳裏にタオの顔が浮かぶ。

「あの…薫さん」

「ん？」

「…私はどうすればいいんでしょうか？」

葛藤するフェイト。

「そつだなあ…お前は どうしたいんだ？」

「…わかりません。すみません…」

フェイトは自分の答えを出せず、自身を情けなく感じた。

「まあ焦ることはねえよ。自分の将来に関わることだ、ゆっくり考えればいいぜ」

薫がそう言った時、玄関の扉が開いた。

「ただいま！」

タイミング良く美和子が帰宅した。

「はいフェイトちゃん、なのはちゃんから手紙来てたよ」

美和子はピンク色の封筒をフェイトに手渡す。

「ありがとうございます」

封を開け、手紙を広げて読み始めるフェイト。

「ねえ、薫」

美和子が台所に向かったのを見計らい、アルフが薫に耳打ちする。

「あたしとしても、できればフェイトに管理局に入ってほしくないよ……」

どうやらアルフも、薫と同じ考えのようだ。

「ああ、そうだな」

*

翌日の昼過ぎ、

「カオル、アルフ知ラナイ？」

「そういえば朝から姿見えねえな。何処行つたんだあいつ？」

薫とジャクソンが学校で子ども達と遊んでいると、一人の客人がやってきた。

「こんにちは。亀山さん」

「ティアナ……？」

薫のもとを訪れたのはティアナだった。

ちなみに今日はコートの下に時空管理局の制服を着ている。

「カオル、コノオ姉サン誰？」

「タオ、ちょっと行ってくるからジャクソンと一緒にいるよ」

薫はジャクソンに子ども達を任せ、ティアナを連れて学校を後にした。

「戦闘機人達は見つかったのか？」

歩きながら話す二人。

「いえ。それが…」

ティアナは残念そうな表情を浮かべる。

「そうか…」

「ところで亀山さん、貴方とフェイトさんの管理局入りのお話ですけど…考えていただけましたか？」

そう言ったティアナだが、薫はため息をついた。

「…そいつは無理だな。俺もフェイトも時空管理局には入らねえよ」

「ど、どうしてですか!？」

思わず声を大きくするティアナ。

「俺は一応、フェイトの保護者だ。俺にとっちゃ、あの子は娘みたいなもんなんだ。娘が危険な目に遭うのに、許可できるわけねえだろ」

薫の言い分も尤もだが、ティアナは諦めない。

「ですが…フェイトさんも亀山さんも、高い魔力をお持ちです!その方々が、このようにな…」

「『何も無い場所で何もせずにいるのは勿体無い』か?」

ティアナの台詞を遮るように、薫が口を開く。

「そ…そうですね!時空管理局に入った方が、大勢の人の役に立つんです!」

「それは違います!」

突如、後ろから声が聞こえた。

「なッ…?」

「フェイトさん!」

薫とティアナの後ろにいたのはフェイトだった。

学校から出た二人を目撃し、こっそり後をつけたのだ。

「私には…管理局に入ることだけが、誰かの役に立つとは思えませ
ん」

「フェイトさん…」

「ティアナさんはサルウインを『何もない場所』って言いましたけど、薫さん達はその何もない場所で苦しんでいる人達の役に立っているんです。それに、ここには私の友達が…大切な家族がいるんです
！」

拳を握り締め、ティアナにそう主張するフェイト。

「フェイト、もういい」

薫がフェイトの肩に手を置く。

「俺が話つけるから…な？」

「…はい。すみません」

シユンとするフェイトだが、薫は笑っている。

「いいよ。それよりティアナ、君の仲間には悪いけどよ…やっぱり俺達は、時空管理局に入らねえわ」

しばらくの間、沈黙が続く。

やがてその沈黙を破るかのように、ティアナがため息をついた。

「…わかりました。残念ですが、諦めます」

そう言ったティアナはニコツと笑う。

「私も少し強引でした。申し訳ありません…」

「いや。親友の無念を晴らしたいのはよくわかるぜ」

薫は刑事時代、親友の浅倉禄郎を殺した犯人を追っていた時のことを思い出す。

「ありがとうございます。頑張ってモンローの仇を討ちます」

「まあ万が一、戦闘機人達が地球で暴れ出したら…俺も戦つかもな」

冗談っぽく笑う薫。

「それだと心強いですね。そうならないことを祈ってますが…では失礼します」

薫とフェイトに頭を下げ、ティアナはその場から立ち去っていった。

「さ、帰るぞ」

「すみません薫さん…私、少し興奮してしまつて…」

申し訳なさそうに謝るフェイト。

「いや、俺達のこと考えてああ言ってくれたんだろ？サンキューな」

薫はフェイトの頭を撫で、学校へと引き返した。

「さ、学校に戻るぞ」

「はい！」

*

夕方、アルフは世界各地を飛び回っていた。

（戦闘機人を探してぶちのめせば…フェイトも薫も管理局に入らずに済む…！）

自分の大切な者達を死なせるわけにはいかない。

そう考えた彼女はじつとせずにはいられなかった。

「ハア…ハア…」

サルウィン上空に戻ってきたアルフ。

何時間も各地を飛び回っており、徐々に疲労が溜まってきたのだ。

「これだけ探して見つからないって…本当に戦闘機人達はいるのかねえ…？」

「ああ、ここにな！」

「!？」

ドスツ!!

驚いたアルフが振り向いたその時、何者かが彼女の腹部に蹴りを入れた。

「かはツ…！」

痛みに襲われるアルフが目にしたのは、紫色のプロテクトスーツのようなものを着用した短い緑髪の男…モンローを殺害したノインだ。

ノインの後ろにもう一人の男がいるのが見えたが、彼は口を閉じたまま動かない。

「あ…アンタ達が…！」

「お前のような使い魔如きが調子乗ってんじゃねえよ…！」

そう叫んだノインは、手の甲に装着されている刃をアルフの右肩に突き立てた。

グシャツ…！

「あ…あぐツ…！」

アルフの刺された右肩から血が溢れ出し、ノインは嫌らしい笑みを浮かべながら手に付いた彼女の血を舐めとる。

「…へツ！」

そう笑い捨てたノインはアルフから刃を抜き、彼女を蹴飛ばした。

蹴飛ばされたアルフは力無く地面へと吸い寄せられていく。

「なあツヴェルフ、お前ホントやる気ねえよな？」

やがてアルフが見えなくなり、ノインが後ろの男を振り返る。

ツヴェルフと呼ばれた男は長い黒髪を後ろで束ねており、終始腕を組んだままだった。

「あの使い魔はお前と戦っていた…私も攻撃に加わるのは無粋だろう」

そう言うツヴェルフに対し、ノインはため息をつく。

「お前ってなんか変な拘り持ってるなあ。そういやお前、ミッドチルダでも局員ばっかと戦ってたな」

「力を持たぬ者を傷つけるのは好まん。それより、奴らはここに居る筈なんだが…また探すか」

「日本という国の出身だったよなあいつらは。そこ行ってみようぜ」
頷いた二人の戦闘機人は、サルウィン上空から姿を消した。

*

「あ…ああ…」

一方、ノインとの戦闘で負傷したアルフは真つ逆さまに落ちていく。先程出くわした男達が、ティアナの言っていた戦闘機人だということと、自分が刺されたことを悟っていた。

(せめて…家の近くに…)

心の中でそう呟いたアルフは残りの力を振り絞り、転移魔法を使って空から姿を消した。

動き出す影（後書き）

次回は再びキャラ設定表の予定です。

ご意見、ご感想お待ちしております！

人物設定？（前書き）

久々の更新が人物紹介ですみません。

人物設定？

ジャクソン・マッケンジー

47歳で、薫の同僚のスタッフ。

アメリカのカリフォルニア出身で、元教師の経験を活かして子ども達に勉強を教える。

日本の文化が好きで、日本人の薫がサルウィンに来たことを喜んでいる。

柚木シヤマル

25歳で、薫やジャクソンの同僚の医療スタッフ。

原作と同様、穏やかな性格で料理が苦手。

彼女の料理は薫やアルフ、ジャクソンから恐れられている。

その人柄からか、子ども達からはかなり懐かれている。

タオ

九歳で、フェイトの友人。

物心ついた頃には既に両親はおらず、叔母に育てられた。

六歳の時、叔母も病死したため天涯孤独の身。

フェイト曰く、声がなのはに似ている。

名前の由来は、ドラマ「ハガネの女」に登場するタオ。

ロベルト・ディック

享年23歳で、ミッドチルダ地上本部所属。

階級は二佐で、ロベルト隊の部隊長。

ティアナの素質を見抜き、自らの部隊に引き抜いた張本人。

彼女の成長に最も期待していたが、戦闘機人との戦いで殉職した。

マルガリータ・モンロー

享年17歳。

ロベルト隊の一員で、ティアナと同期。

使用デバイスは剣タイプのシェイファー。

ティアナと最も仲が良く、互いに競い合う良きライバル。

産まれて間もなく母親に捨てられ、孤児院で育つ。

その際、孤児院によく顔を出していたロックに憧れており、本人曰く初恋の人。

最期はティアナを庇い、ノインに刺殺された。

彼女の死はティアナに影響を与え、戦闘機人達を逮捕もしくは破壊することを決心させた。

名前の由来はマリリン・モンロー。

ノイン

ミッドチルダで作り出された、男性タイプの戦闘機人。

見た目年齢は18歳。

血の気が多く、楽しいという理由で人を殺す残忍な性格。

ミッドチルダの首都・クラナガンで大暴れし、多くの施設に甚大な被害を与え、また大勢の局員や民間人を殺害した。

名前の由来は、ドイツ語で9（neun）。

ツヴェルフ

ノインと同様、ミッドチルダで作り出された男性タイプの戦闘機人。

見た目年齢は22歳。

ノインと違い、非戦闘員や民間人は傷つけないという考えを持つが、局員や魔導師相手には容赦しない。

モチーフはミルキイホームズのストーンリバー。

名前の由来は、ドイツ語で12（zwoelf）。

人物設定？（後書き）

ドイツ語のウムラウト入力が文字化けするわ、どっついうわけか同じ文が何度も記載されるわで苦労しました…w

次の更新は十月中にしたいと思います！

巻き込まれる刑事達（前書き）

サブタイからしてネタバレですw

巻き込まれる刑事達

日本に潜入したノインとツヴェルフは、東京である人物を二名探し
ていた。

「…なあツヴェルフ、南条吾郎と椎名哲は何処にもいねえじゃねえ
か。どういうことだよ？」

「私にもわからん」

時間帯は夜、公園なので人通りはない。

そんな中、ツヴェルフの足下に何か転がってきた。

「…ん？」

転がってきた物を手に取るツヴェルフ。

それはグシャグシャに丸められた、昨日の新聞だった。

「なんだ？」

ツヴェルフがそれを広げると、新聞には『赤いカナリア幹部・南条
吾郎、椎名哲を逮捕』と記載されていた。

「はあ？あいつら捕まったのかよ！二人をスカウトして最新のガジ
エットを造らせようと思ったのによ！」

声を荒げるノイン。

「確かに二人は技術面に関して優秀だからな。それに私達は五機しか所持していないから、ガジェットを造れないのは痛い」

ツヴェルフも顔をしかめる。

「ふざけやがって！ここの住宅地ごと吹き飛ばしてやる！！」

ノインが物騒なことを叫んだ、その時だった。

「ちょっと、君達何やってるの！」

ノインとツヴェルフが声の聞こえた方を向くと、そこには二人の男がこちらへ歩いてきていた。

「今何て言ってたのかな？住宅地を吹っ飛ばす？」

男の一人がそう尋ねる。

「誰だよあんたら？」

「警察だよ」

そう言った男と、後ろの男が警察手帳を見せた。

手前の男の手帳には「神戸尊」、後ろの男の手帳には「杉下右京」と名前があった。

「そんなに騒いだら近所迷惑だから静かに…」

ドスッ！

「がッ！？」

突如、尊の鳩尾に拳を叩き込んだノイン。

不意打ちをくらった尊の意識は遠退き、その場に倒れ込んだ。

「神戸君！？」

流石の右京も驚く。

だがノインはそんな彼に、尊と同様に鳩尾に膝を叩き込んだ。

「うッ…！」

右京もその場に倒れ込んだ。

「ノイン！何してる！？」

「こいつら警察が南条と椎名を逮捕しなければ、オレ達が苦労せず
に済んだんだよ！」

要するに逆恨みである。

「クソッ、このままじゃ怒りが収まらねえ！こいつらにガジェット造らせてやる！！」

そう言ったノインは気絶した右京と尊を担ぎ、その場から姿を消した。

「チッ…」

残されたツヴェルフは舌打ちすると、ノインと同様に消え去っていった。

*

同時刻、自宅にて薫とフェイトはアルフの帰りを待っていた。

「アルフ…どこ行っちゃったんだろう？」

「朝からいないからなあ…」

ドン！ドン！

その時、玄関の扉を強く叩くノック音が響いた。

「アルフか…！？」

ソファから立ち上がった薫が急いで玄関へ向かい、フェイトが彼の後を追う。

「はいはい今開けるから…」

そう言いながら扉を開けた薫を待っていたのは、想像し難い光景だった。

「亀山さん！アルフさんが…！」

外には、肩から血を流して全身傷だらけで意識不明のアルフと、彼女に肩を貸したティアナが立っていた。

「えッ…！？」

「ア、アルフ！」

驚愕する薫とフェイト。

「フェイト！ティアナを中へ案内しろ！」

指示を出しながら、薫は急いで靴を履く。

「薫さんは！？」

「シャマル先生を呼んでくる！」

そう言った薫は自宅を飛び出した。

*

十数分後、薫はシャマルを連れて帰ってきた。

「応急処置は済ませたわ。あとは一週間程ゆっくりしていれば大丈夫よ」

アルフの治療を終えたシャマルがため息をつき、ティアナの方を向く。

「あなたの発見がもう少し遅ければ、もっとひどくなっていたかもしれないわ」

「そうですか…」

「亀山さん。私は帰りますけど、アルフちゃんの意識が戻ったら呼んでくださいね」

シャマルは医療鞆を持ち、玄関へと向かう。

「「ありがとうございます!」「」」

薫とフェイトが礼を言い、シャマルを見送った。

静かに眠っているアルフの顔をチラッと見て、薫が口を開いた。

「ティアナ…アルフをこんな目に遭わせたのは、お前の言った戦闘機人か？」

「はい、おそらくそうだと思います。あの二人は、平気で人を傷つけるんです…！」

ティアナが拳を握り締める。

新たな被害者を出してしまったことを悔やんでいるのだ。

「私のせいです…私が戦闘機人を逮捕できないから、アルフさんが…」

「…気にすんな。お前のせいじゃねえよ」

そう言う薫だが、彼も拳を握り締めていた。

自分の家族に重傷を負わせた戦闘機人に対し、怒りを露わにしていたのだ。

「許さねえ…！」

「薫さん…」

思わず薫の腕袖を掴むフェイト。

「心配すんなよフェイト！仮にそいつらがここに来ても、お前のと絶対に守るからな！」

薫はフェイトの頭を撫で、彼女を落ち着かせる。

(もっ…誰も傷つけさせるかよ！)

*

深夜、ノインに拉致された右京と尊が目を覚ますと、そこは見覚えのない廃虚の中だった。

「よっやくお目覚めかい刑事さん？」

二人の耳にノインの声が届く。

「ここは…？僕達に何をした！？」

額をさすりながらノインに問い掛ける尊。

「ここはサルウインの廃工場だ。お前らに、ガジェットの手伝ってもらおうと思ってな」

右京はサルウインと聞いて薫のことを思い出したが、同時にガジェットという言葉も気になった。

「その…ガジェットというのは…？」

「簡単に言えば小型破壊兵器さ。それ造る手伝いしてくれたら解放

してやるぜ」

ノインは歪んだ笑みを浮かべる。

だが右京はこのような状況でも、自分の考えを変えることはしなかった。

「人を容赦なく殺すマシンを造るなど…僕にはできません！」

ドガッ！

「う…！」

「杉下さん！……ガッ！」

逆上したノインは右京の腹部に膝を、尊の右頬に拳を叩き込み、二人をその場に仰向けに倒した。

「お前ら自分の状況がわかってんのかよ！？ふざけてばっかいると、承知しねえぞ！！」

ツヴェルフが不在なせいか、普段より凶暴さが増しているノイン。

「い…いったあ…！」

尊は口元から滴り落ちる血を腕で拭う。

(ぐ…このままでは…)

喚き続けるノインを余所に、右京の意識は段々と遠ざかっていった。

巻き込まれる刑事達（後書き）

次回はようやく戦闘に入ると思います。

戦闘開始！（前書き）

登場予定は無いとあったロック、ヴィータ、シグナムが再登場します。

戦闘開始!

右京と尊が姿を消した翌日、警視庁にて

「杉下警部……」

特命係を訪ねたシグナム。

だが特命係には右京も尊もおらず、組対課の角田がパンダのマグカップでコーヒーを飲んでいた。

「よう清水、暇か？」

「角田課長。おはようございます」

シグナムが角田に会釈する。

「警部殿と神戸なら居ないよ。大方、何か事件でも嗅ぎつけたんじゃない？」

「そうですね……わかりました。失礼します」

角田に敬礼したシグナムは、特命係を後にした。

*

午後、翠屋でも同じような出来事があった。

「あ、みんないらっしやい！」

アリサとすずか、はやてとヴィータが翠屋を訪れ、なのはが四人を迎えた。

今日は終業式で、冬休みに入ったのだ。

ちなみにはやては尊の協力もあってか、車椅子を卒業している。

「なのはちゃん、お邪魔するな〜」

はやては尊を介し、なのは達と知り合ったようだ。

「…でな、私がいつも夜に電話してる神戸さんが、どういうわけか昨日から全く連絡とれへんのよ」

寝る前に、尊と少し話をするのがはやての習慣だ。

「そっかあ…」

尊は翠屋の常連でもあるので、なのは達とも顔見知りである。

皆が尊を心配するが、その暗い空気をヴィータが打ち破った。

「はやては心配性だな。そのおっさん、仕事でだったんじゃないのか？」

「やといいんやけど……というかあの人は？」

はやての視線の先には、翠屋のエプロンを着てせつせと皿洗いをするロツクの姿があった。

「ロツク・ブルさんだよ。こないだうちに来た時会ったでしょ？」

さすががそう言って笑う。

「なあんや、執事のロツクさんか！執事服やなかったから全然気づかんかったわ！」

どうやら使用人から執事にランクアップしたらしい。

「でもなんでロツクのオツサンが、なのはの店手伝ってんだ？」

「今日お父さん用事で居ないから、お母さんがロツクさんをお願いしたの」

すると皿洗いを終えたロツクが、なのは達のところへやってきた。

「皆今日から冬休みだね、宿題頑張りなよ。ところで、何の話をしていたんだい？」

はやてはロツクに、知り合いの刑事が行方不明になっていることを伝えた。

「…絶対に大丈夫だよ。そつだなのはちゃん、ちよつと話があるんだけど…」

そつと言つたロツクはなのはを呼び出し、翠屋の外へ彼女を連れ出した。

「何ですかロツクさん？」

「実は僕…昨日見たんだ。はやてちゃんが言つてた、刑事が拉致されるところを…」

「ええッ！？尊さんが！？」

思わず大声をあげるなのはだが、すぐに自らの口を両手で押さえた。

「それでね、その犯人達はサルウィンがどうとか言つてたんだ。サルウィンっていつたら、なのはちゃんは聞き覚えない？」

するとなのははしばらく考え、再び大声をあげた。

「あ！フェイトちゃんと薫さん達が住んでる国…！」

「そつだよね…僕、なんか嫌な予感がするんだ」

腕を組み、悩むロツクだがなのははすぐに答えを出した。

「ロツクさん…私、フェイトちゃん達を助けに行きます！」

だがロツクは首を横に振る。

「残念だけどその意見、僕は賛同しかねるね」

「ど、どうしてですか!？」

「いいかい？君が一人でサルウィンに行っても、フェイトが助かるわけじゃないだろう。向こうには薫もアルフも居るんだし、心配いらないよ」

なのはを優しく諭すロックだが、彼も薫達のことを心配していた。

「でも…私、フェイトちゃんに会いたい！」

「…だろうね。君を止めても無駄なことはわかってる。だからさ…」

何かを思いついたロックは、なのはに耳打ちした。

*

更に翌日、二日経ってもアルフの意識は戻らない。

「アルフ…」

フェイトは一昨日からずっと彼女に付き添い、リビングで就寝していたのだ。

「…美和子がいりゃいいんだけどなあ」

薫が欠伸びながら起きてきた。

既に着替えは済ませており、私服姿である。

「アルフが心配なのはわかるけどよ、ゆっくり寝なきゃ疲れとれな
いぞ。俺が代わるから、ちゃんと休め」

「…はい」

そう返事したフェイトが自室に戻ろうとした時だった。

ドガアアアアン！！

突如、外で爆発音が響いた。

「な、なんだ！？」

薫はすぐさま外に飛び出す。

「あッ…！？」

彼の視線の先には、激しく燃え盛る森があった。

「ちくしょう…！！」

勢いに任せ、自宅を飛び出す薫。

「あ…！」

フェイトは一度アルフを振り返り、こっさり薫の後をつけた。

「こりゃひでえ…！」

森の前に到着した薫。

そんな彼に、近づく影が二つあった。

「…ッ！」

薫はその気配を察知し、振り返った。

するとそこには二人の男が立っており、二人とも紫色のプロテクトスーツのようなものを着ていた。

「お前ら…まさか戦闘機人か？」

すると戦闘機人の一人もといノインが口を開いた。

「そうさ！…ん？ああ、あんたが亀山薫か。以前写真で見たことあるよ」

「うるせえ！どういつつもりか知らねえが、今すぐ火を消してこい」

から失せる!!」

薫がノインとツヴェルフを睨みつける。

「まあまあ。それより亀山さんよお、そんな態度とっていいのかわか？こつちには人質がいるんだぞ!!」

そう叫んだノインは懐から何かを取り出した。

「そ、それは…!!」

驚愕する薫。

そう、彼が取り出したのは右京の警察手帳だったのだ。

「う…右京さんがなんで!?!」

「こつちだって最初はそんなつもりなかったんだが、今となつちや好都合みたいだな!!」

そう言い終わると同時に、ノインが薫に殴りかかった。

「おわツ!?!」

薫はギリギリでそれをかわし、二人と距離をとった。

「へへへ…どうやら手も足も出ないようだなあ…!!」

「よくもアルフや右京さんを…!!」

拳を握り締める薫。

「まあとりあえず……死ねや!!」

目を見開いたノインが、手のひらを薫に向けた時だった。

「クロスファイヤー……シユート!!」

突如、薫とノインの間に何かが着弾し、爆発した。

「亀山さん！大丈夫ですか!？」

なんと側の草むらから、クロスミラージユをかまえたティアナが迫ってきた。

「あのうざい執務官か！頼むぞツヴェルフ!!」

「心得た!」

そう言うやいなや、ツヴェルフは地面を蹴ってティアナに向かっていく。

「ふんッ!!!」

ドスッ!!

「かはッ…!!」

見えない速さでティアナの鳩尾に拳を叩き込み、ツヴェルフは何事もなかったかのように着地した。

対するティアナは腹部の激痛に堪え、なんとか薫の隣までやってきた。

「お、おい大丈夫か!？」

「はい…これでも局員の端くれですから!」

冷や汗をかきながらも苦笑するティアナに対し、頷いた薫はアイフアーを握り締め、そして言い放った。

「変身!セツトアップ!!!」

《了解!》

薫が赤い光に包まれ、バリアジャケット姿となる。

半年ぶりに変身し、戦う覚悟を決めたのだ。

「右京さんを返してもらおうぞ!!!」

「今日こそモンローの仇を討つ！！」

薫はアイフアーを、コートを脱ぎ捨てたティアナはクロスミラー
ユをかまえる。

元刑事と執務官が組み、残忍な戦闘機人との戦いの火蓋が切って落
とされた。

戦闘開始！（後書き）

ティアナのキャラが違うのは、生きてきた環境が違うせいです。

ドラゴンボールでいう、仲間を失い辛い道を歩んだ未来トランクスと、両親に大事に育てられたチビトランクスみたいなもんですね。

次回は11月中旬になると思われます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2105s/>

相棒 元刑事と魔法少女

2011年10月26日02時07分発行